

探究は生徒の学びを 変えられるのか？

報 告 書

長崎開催

開催日： 2022年 8月20日(土)

会場： 出島メッセ長崎

主催： 産業能率大学

後援： 長崎県教育委員会 福岡県教育委員会 佐賀県教育委員会

宮崎県教育委員会 熊本県教育委員会 大分県教育委員会

鹿児島県教育委員会

はじめに

本報告書は、2022 年 8 月 20 日（土）に開催した教育改革推進フォーラム（長崎）での講演セッションを主にまとめたものです。

今年度当初は感染者も大きく減少し、アクティブフォーラムは、自由が丘、長崎ともに会場での対面形式を主体に実施することで企画いたしました。そのため、従来の全体会、分科会による授業研究会の形態としました。

しかし、第 15 回キャリア教育推進フォーラム（自由が丘）は、感染拡大のリスクを避けるため、ワークショップ形式の授業研究会のみとし、講演等全体会は実施しておりません。

そのため、本報告書も教育改革推進フォーラムでの講演についてのみとなっております。

教育改革推進フォーラムのテーマ設定は、「キャリア教育から探究へと教育の関心事が移行する中、そもそも生徒は変容したのか？」という問いからの発想でした。これまで数回登壇いただいた和田先生、下町先生のお二人が高校現場から少し離れたところに移られたので、その立ち位置からお話しいただきたいと考えました。

フォーラムを開催した 8 月頃は、第 7 波もピークを迎え、実施も危ぶまれましたが、皆様のご支援もあり、無事に開催することができました。自由が丘、長崎ともに遠方からの参加者も多く、参加者同士も 3 年ぶりに対面で会え、旧交を温める機会にもなったようでした。

長崎を開催地としたのは、舟越校長（長崎県立松浦高等学校）との長く深いつながりからです。2013 年に長崎で実施した授業力向上セミナーなど、多くの機会を設けてくださり、ぜひ一度長崎でフォーラムも実施したいと考えた次第です。また、長崎県立長崎南高等学校など本学が開発した探究学習支援プログラム導入校へのサポートという側面もありました。

舟越先生が長崎県内の先生方による準備会を構築くださり、その準備会を通じ、多くの長崎県の先生方にご登壇いただくことになりました。準備会の先生方には、この場を借りて御礼申し上げます。

フォーラム開催にご協力、ご支援くださいました長崎フォーラム準備会、教育委員会の先生方、本当にありがとうございました。また、自由が丘あるいは長崎でご登壇くださいました先生方、心より御礼申し上げます。そして、このような状況下で会場にお越しいただいた先生方、オンラインで長時間おつきあいいただいた先生方、感謝の言葉もございません。誠にありがとうございました。

次年度もどのような状況となるか想像もできませんが、これまで 3 年間の経験を活かし、“with コロナ”環境でのフォーラム開催について検討し、皆様とお会いできるのを楽しみにしたいと思います。

本報告書が教育改革の一助となることを祈念し、これからも教育現場に寄り添えるフォーラムとなるよう努力して参ります。

産業能率大学 入試企画部長
林 巧 樹

教育改革推進フォーラム

in 長崎
8/20探究は生徒の
学びを変えられるのか？

キャリア教育・アクティブラーニング・探究そしてICT活用と教育のトレンドは移り変わっているが、生徒の学びはどのように進化しているのでしょうか？また、進化させるためには何が求められているのでしょうか？長崎県を舞台に、探究とICT活用を中心に教育改革について先生方と一緒に研究していきたいと思います。

開催概要

日程 2022年8月20日(土)

主催 産業能率大学

時間 10:00～17:00

後援 長崎県教育委員会
福岡県教育委員会
佐賀県教育委員会
宮崎県教育委員会
熊本県教育委員会
大分県教育委員会
鹿児島県教育委員会

会場 出島メッセ長崎
長崎県長崎市尾上町4-1

参加費 2,000 円

定員 会場参加:100名
オンライン参加:100名

※プログラム詳細は裏面をご覧ください

お問合せ

産業能率大学
フォーラム・セミナー事務局(企画課)

TEL.03-3704-0731

Email : kikaku@hj.sanno.ac.jp

〒158-8630 東京都世田谷区等々力6-39-15

お申込み

ホームページよりお申し込みいただけます。
右のQRコードからアクセスしてください。

【申込締切】

8月15日(月) 17時まで

<https://www.sanno.ac.jp/teachers/nagasaki2022.html>

Session 1 <<ハイブリッド開催>> 10:00～12:00 講演およびリフレクション

【テーマ】 過去を振り返り、未来を展望する

～キャリア教育・アクティブラーニング・探究・ICT活用 生徒の学びは変容した?～

【講演者】 和田 美千代 先生 福岡大学 人文学部 教授(元 福岡市立福岡西陵高等学校 校長)

下町 寿男 先生 しもまちハイスクール/盛岡白百合学園(元 岩手県花巻北高等学校 校長)

<ファシリテーター> 後田 康蔵 先生 長崎県立諫早高等学校 指導教諭

Session 2 13:00～14:50 分科会① ～総合的な探究の時間を考える～

<<A:ハイブリッド開催>>

【テーマ】 ICT×探究 ～ICT活用と探究の導入をいっしょに楽しむ～

【講演者】 吉本 悟 先生 福岡市教育センター人材育成課指導主事(元 岡市立福岡西陵高等学校 教諭)

<<B:会場専用>>

【テーマ】 「楽しくなければ探究じゃない」 ～進学校における「探究的な学習」カリキュラムの開発プロセス

【講演者】 渡邊 久暢 先生 福井県立藤島高等学校 教頭

<<C:会場専用>>

【テーマ】 進路多様校での探究学習導入のステップ ～生徒と教員が一体となった仕掛け大公開～

【講演者】 西山 正三 先生 宮崎県宮崎東高等学校(定時制) 教諭

<<D:オンライン専用>>

【テーマ】 SDGs時代における学校変容と学校文化に広がる学校改革の進め方

～新渡戸文化中学校・高等学校の実践・成果・課題～

【講演者】 山藤 旅間 先生 新渡戸文化高等学校 副校長/(一社)Think the Earth

※本講座(Session2_D)は <講演>13:30～14:30、<質疑応答(参加任意・退出可)>14:30～14:50 という構成になります

Session 2 15:10～17:00 分科会② ～教科での探究を考える～

<<A:ハイブリッド開催>>

【テーマ】 どうする!?「歴史総合」の授業デザイン

【講演者】 寺坂 悠平 先生 長崎県立対馬高等学校 教諭

皆川 雅樹 先生 産業能率大学 経営学部 准教授

<<B:会場専用>>

【テーマ】 生徒の可能性を引き出すICTを活用した授業設計 ～教科(理科)と探究をつなぐ～

【講演者】 徳田 憲一郎 先生 長崎南山中学校・高等学校 進路部キャリア探究課 課長 総合的な探究の時間委員会 委員長

<<C:会場専用>>

【テーマ】 数学×国語クロスカリキュラムに挑戦! ～感情を数式で表現することを通して、読解の精度を上げよう～

【講演者】 峯 悦子 先生 長崎県立佐世保西高等学校 教諭

酒井 淳平 先生 立命館宇治高等学校 教諭

<<D:オンライン専用>>

【テーマ】 教育の不易と流行とは?そして、教師の役割は変わったのか?

【鼎談】 鈴木 達哉 先生 ユマニテク教育研究所 副所長(元 三重県立高校 校長)

和田 美千代 先生 福岡大学 人文学部 教授(元 福岡市立福岡西陵高等学校 校長)

下町 寿男 先生 しもまちハイスクール/盛岡白百合学園(元 岩手県花巻北高等学校 校長)

<ファシリテーター> 林 巧樹 (主催者代表 産業能率大学)

※プログラムのテーマ等は変更になる可能性があります

講座概要



講師
プロフィール



産業能率大学

<https://www.sanno.ac.jp/teachers/nagasaki2022overview.html>

https://www.sanno.ac.jp/teachers/nagasaki2022_speakers.html

講演者プロフィール（敬省略）

■後田 康蔵 長崎県立諫早高等学校・附属中学校 指導教諭

教職 25 年。指導教諭。諫早高校では進路指導主事を 5 年、教務主任を 2 年歴任し現職。進学指導にとどまらないキャリア教育の充実をライフワークとし、現在は探究学習の普及に尽力している。進路指導、キャリア教育、探究学習、観点別評価、学校改革に関する組織マネジメントなど様々なテーマで全国を講演中。

■山藤 旅聞

新渡戸文化中学校・高等学校 副校長／(一社)Think the Earth

15 年間、都立高校および都立中高一貫校教諭を経て、2019 年から現任校。持続可能な社会を実現する行動者の育成を目指す教育デザインを実践。具体的には、企業や NPO/NGO とパートナーシップを組んだ PBL(project based Learning)を実施し、現在は 120 を超えるプロジェクトを生み出している。さらには、全国の学校や大学、企業への「SDGs 出前授業」などを通じて、学校の枠を超えた SDGs 教育の普及に尽力している。国連大学主催の全国ユース環境ネットワークや NHK 高校講座の講師、東京書籍教科書編集委員等も務める。2021 年立教大学・環境会副代表へ就任、2022 年(一社)旅する学校を設立・代表を務める。

■下町 壽男 しもまちハイスクール／盛岡白百合学園

数学科教師・共育コンサル。岩手県内外 5 校の高校に勤務後、教育委員会主任指導主事として学力向上と教員文化を変える取組を精力的に行う。2013 年度以降は管理職として授業改革を軸にした学校改革に力を入れ、全国への発信を積極的に行ってきた。花巻北高校校長退職後、現在は数学科講師および経営アドバイザーとして盛岡白百合学園に軸足を置きつつ、依頼に応じ、幅広い内容で、講演や出前講座等を行うとともに、WEB 上に「しもまちハイスクール」を立ち上げ、各種コンテンツの開発・発信に努めている。

■鈴木 達哉 ユマニテク教育研究所 副所長

国語科教員として3校を歴任。川越高校、津高校で進路指導主事として「進学校としてのキャリア教育」を推進。神戸高校においては教頭として、キャリア教育推進とそれを通じた進学教育に尽力。三重県立高校全体のレベルアップのための高大連携やインターンシップ推進事業、企業・行政・NPOなどとの連携にも貢献。

また、キャリア教育におけるアクティブラーニングの重要性と効果に着目、カリキュラムマネジメントをベースにしてその研究と試行に取り組んだ。公立高校を退職後、三重大学大学院（教育学修士）にて教育学を学ぶ（2022年3月修了）。並行してユマニテク教育研究所副所長として高校教育や地方教育の活性化をテーマに実践活動を行っている。

■和田 美千代 福岡大学 人文学部 教授

平成6年福岡県立城南高校で、生徒主体の進路学習ドリカムプランを企画開発、キャリア教育の先進事例として全国的注目を集める。城南高校には教諭教頭校長として計21年勤務。文部科学省のキャリア教育関係の委員を務め、学習指導要領特別活動の解説にも携わる。

平成27年から2年間、福岡県教育指導部長として、新たな学びプロジェクトチームを率い、アクティブ・ラーニング（主体的・対話的で深い学び）の普及啓発の仕事をする。

福岡県教育庁高校教育課主幹指導主事を経て、平成30年度から城南高校校長。ラストの年にssh3期の指定を受ける。

福岡県教職員を定年退職後、福岡市立福岡西陵高校校長となり、全国に先駆けてオンライン授業を開始、西陵職員からは黒船と呼ばれる。現在は福岡大学人文学部教授。

もくじ

「過去を振り返り、未来を展望する～キャリア教育・アクティブラーニング・探究・ICT活用 生徒の学びは変容した?～」・・・・・・・・・・・・ 8P

福岡大学 人文学部 教授 和田 美千代

しもまちハイスクール/盛岡白百合学園 下町 壽男

＜ファシリテーター＞長崎県立諫早高等学校・附属中学校 指導教諭 後田 康蔵

「SDGs 時代における学校変容と学校文化に広がる学校改革の進め方
～新渡戸文化中学校・高等学校の実践・成果・課題～」・・・・・・・・ 47P

新渡戸文化中学校・高等学校 副校長／(一社)Think the Earth 山藤 旅聞

「教育の不易と流行とは?そして、教師の役割は変わったのか?」・・・・・・・・ 73P

ユマニテク教育研究所 副所長 鈴木 達哉

福岡大学 人文学部 教授 和田 美千代

しもまちハイスクール/盛岡白百合学園 下町 壽男

＜ファシリテーター＞主催者代表 産業能率大学 林 巧樹

教育改革推進フォーラム長崎 Session1

【テーマ】 過去を振り返り、未来を展望する

～キャリア教育・アクティブラーニング・探究・ICT 活用 生徒の学びは変容した？～

福岡大学 人文学部 教授

(元 福岡市立福岡西陵高等学校 校長)

和田 美千代 先生

生徒の学びは変容したのか？

はじめに

- 1 福岡大学の事例紹介 学生の体験にある指導事例
- 2 福岡市立福岡西陵高校の事例紹介 世界史個別最適授業
- 3 本日のまとめ

生徒の学びは変容したのか？

福岡大学人文学部教授（元 福岡市立福岡西陵高等学校校長）

和田 美千代

はじめに

今年もここにこうして集まることができたことを、大変うれしく思っています。昨日長崎に来て、「和田先生、体は大丈夫ですか？」と訊ねられました。私はこう見えても体が弱くしょっちゅう病気をしているので、その体を気遣っていただきました。実は7月にコロナの陽性になり、8月1日に自宅療養が終わりました。10日間何の仕事もせずに、じっと家でごろごろしていたのは初めてです。こんなに10日間も堂々と休めるなんて。熱が出てぐったりしていたのは最初の2日3日で、その後は本当にずっとごろごろしていたので、コロナの隔離が明けたらものすごく体調がよくなりました。あんなにたくさん睡眠をとってごろごろしたら体調はいいんだ、ということを経験しました。このフォーラムと重ならなかったのがよかったと思っています。

本日私は「生徒の学びは変容したのか？」というテーマで30分いただいています。皆さんは「和田先生が30分で終わるわけがない」と思っていられっしゃるようですが、私の目標としては25分で終わらせたいと思っています。

私は4月から福岡大学の教職課程で週4コマ教えています。福岡県立高校で37年、国語科教員として、また管理職として働き、それから福岡市立高校で2年、管理職として働きました。今年でちょうど教職40年目です。福岡大学で教えているのは、「総合的な学習の時間と特別活動の指導法」1コマ、「教育方法論（ICT活用含む）」を3コマ教えています。このように私が大学の仕事に変えた一番の理由は、娘がこの4月から復職し孫が保育園に行き始めたからです。その2人を手伝いたいと思い、フルタイムの福岡西陵高校から裁量労働制で自分で自由に時間を使える福岡大学に移りました。朝は娘の家に行き、彼女が出勤した後を片付け、そこから大学に行きます。夕方はちょっと早めに娘の家に行き晩御飯をつくり、孫の入浴を手伝い、それから自宅に帰る、という生活をしていたらそれがめっちゃきつくて、自分の子育て時期よりもきついんじゃないか、という一学期を過ごしたので、フェイスブックに自分の近況報告を上げるゆとりもありませんでした。そんな中でコロナで10日間の休みをいただき、元気になったというわけです。

1 福岡大学の事例紹介 学生の体験にある指導事例

福岡大学の授業で感じたことを報告させていただくことが、今日のテーマの「生徒の学びは変容したのか？」の答えになると思っています。

私が福岡大学で授業のコマに毎回毎回しつこく出しているのが、このスライド3です。

(スライド3)



119人、36人、199人、50人 意地でもアクティブラーニングでやりたい！

「聞くだけの授業は、終わりにしよう」。これはインタラクティブティーチングという、私が受けた東京大学と河合塾が協働でされていた講義のタイトルで、この言葉が一番私にはピンときて、私が福岡大学で講義をするときのモットーです。学生に伝わるようにと、必ず授業の前と後にこのスライドを掲げ続けました。私が持っている4コマの学生数はそれぞれ119人、36人、199人、50人です。特に199人の学生がいるコマでは、毎回どうやってアクティブラーニング（以下AL）をしようかと、私は意地でもALにしたい、聞くだけの授業は終わりにしたい、学生が主体的に授業に参加しているという授業づくりに1学期の間ずっと悪戦苦闘していました。ちょっとその1コマを紹介させていただきます。

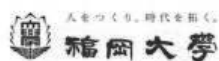
授業の1つは「総合的な学習の時間と特別活動の指導法」（スライド4）です。いわゆる総学と特活です。これをどのように授業をしていくのか、ということを考える授業です。

(スライド4)

総合的な学習の時間と特別活動の指導法

スタートアップ授業を含めて第4回

本時のテーマ 指導計画の作成

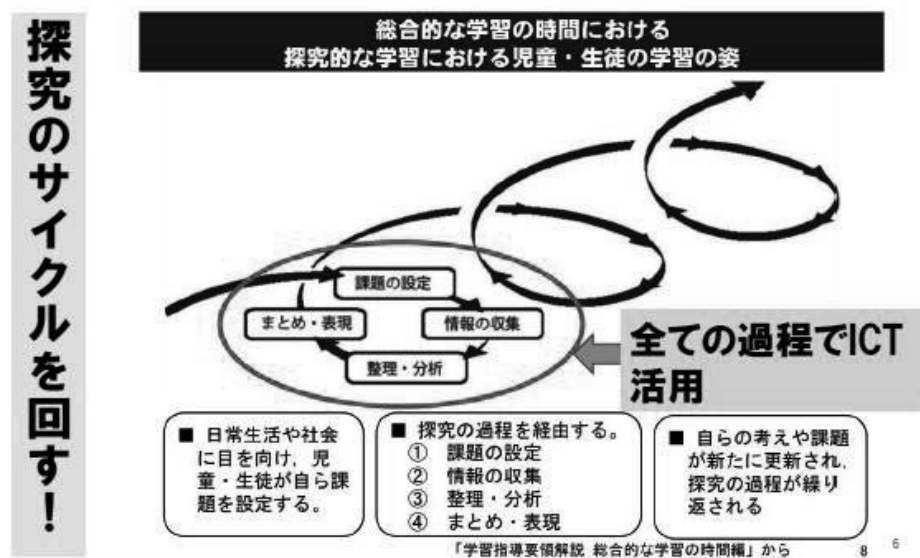


人文学部 教育・臨床心理学科 和田美千代

私はその中で、総合的な学習の時間を「母校の総学総探を担当としてリニューアルする」という授業課題を学生に、1学期は与えました。まずは自分が中学、高校どちらでもいいから、どんな総学を経験したのかをレポートしてもらいました。そしたらものすごくリアルに上がってきたのは「席替えの時間でした」というもの。さらには「体育祭の練習」、中には「自習」、「受験勉強をしていました」また「別の教科の穴埋めでした」などの答えも学生からリアルに上がってきました。次に「母校のHPにはどんな総学をやっていると紹介してあるのか」をレポートしてもらい、「自分がこんな総学だった」と思うのと、HPに紹介されている内容を比較してもらいました。そうすると「あの総学の時間にはこんな意味が込められていたのか」とわかった学生もいれば、「看板に偽りあり」と言う学生もいました。そしてここから、「ではあなたは母校の総学担当として、どういう総学を作りたいですか？ そのリニューアルプランを考えましょう」という課題です。こういったことをやっていく過程で、当然レポートに「〇〇県の〇〇高校」という出身校が登場してきます。熊本北高校の出身学生がいて「溝上広樹先生が」「ああ、知っとうよ」となり、実はこの産能大のフォーラムで一緒に学んできた学び仲間の先生方の名前が結構学生から上がってきて、佐世保西高校出身の学生からは「舟越先生に習いました」と。私は訊ねてはいないのですが、「あの先生は良かったです」という感想が出たり、筑紫高出身の学生からは「飯田先生に総探の時間を担当してもらいました」といったリアルな声がありました。

そのリニューアルをする中で大事なことは、「探究のサイクルを回すこと」(スライド6)。例えば体育祭の練習もやりようによっては、探究課題、総探にすることができる。それはどういうことかと言いますと、課題を設定し、情報を収集し、整理分析し、まとめ・表現をする、というこの探究のサイクルを生徒が回す経験をする。またそのすべての過程で、ICTの活用をするというリニューアルプランをつくりなさいという進め方で、最後に発表会をしました。

(スライド6)



もう 1 つの授業の「教育方法論」(スライド 7) とは、わかりやすく言うと授業のやり方です。

(スライド 7)

教育方法論

スタートアップ授業を含めて第14回

本時のテーマ

これからのICT活用と指導事例



人文学部 教育・臨床心理学科 和田美千代

もちろん「主体的・対話的で深い学び」を実現した授業、それから ICT を活用した授業、といったところをずっとやっていくわけですが、そんな中で「いい授業ってどんな授業だろう？」と学生にグループワークをしてもらい、1 グループで 8 つ以上出してもらったら、かなりいろんな意見が出ました。(スライド 8)

私が一番驚いたのは、スライド 8 の一番上にある「生徒が参加している授業がいい授業だ」ということです。これは私にとってものすごく衝撃的でした。「そうか、生徒は座っているけど、参加していないんだ」と。そして「座っている生徒の中には、参加している生徒と参加していない生徒がいるんだ」とも。これは私にとっては笑い出してしまうような、かつ衝撃を受ける意見でした。確かに生徒が主体的に授業を受ける授業が本当にいい授業だと、その通りだと思いました。

(スライド 8)

いい授業のポイント 列挙1

- 生徒が参加している
- 明るい 笑顔 楽しい 眠くならない わかりやすい 面白い
- 注意してくれる 厳しい
- 知識豊富 教材研究がしっかり 丁寧な板書と授業内容
- 目的がはっきり 結論を明確に話す 知識を定着させる 復習がある
- 将来使える知識を教えてくれる やる気になるような話を時折
- 時間通り 実践的 リズムがいい きっかけを与える
- ICTを活用している 映像がある 机の配置の工夫

「こういう授業がいい授業だ」とどんどんと意見があがっていく中で、スライド9の中央の「生徒の話聞いてくれる、対話的に話してくれる、寄り添ってくれる、生徒の言うことを否定しない」。この中の「対話的に話してくれる」って何かと尋ねたら、「先生が一方的にガーッと話すのではなく、自分とやり取りをしながら自分の気持ちも汲みながら話してくれることです」、なるほどです。

また、「一方的説明ではなく問いかける、生徒に考えさせる、生徒主体である」。それから「発言しやすい雰囲気がある、間違ってもいい雰囲気がある、息苦しくない」。次のスライド10では、「周囲と話せる、ペアワーク、実験観察体験」「学び合い、教え合い、助け合うことができる、生徒が授業を作る」。これは学生たちが出した言葉、フレーズそのままです。それから「生徒の顔色を見る」、これは顔色を窺うと捉えるとネガティブですが、学生が言いたかったことは生徒をよく観察しているということです。それから、「先生が口をはさむことが少ない、生徒主体の時は、先生は見守る」、「知識を共有、発表意見が多い、黒板でグループの意見交換」「先生も生徒も楽しんでいる、終わったときに達成感がある」「最後に感想を書かせる」のいい授業だ、というたくさん意見が出てきました。

(スライド9)

いい授業のポイント 列挙2

- ・興味を引く話をしてくれる 面白いとえ話 身近な例をあげる
- ・適宜雑談が入る 覚える公式を歌ってくれる 声が大きい
- ・スピードを変える(緩急) メリハリがある 身振り手振りジェスチャー
- ・生徒の話聞いてくれる 対話的に話してくれる 寄り添ってくれる 生徒のことを否定しない
- ・一方的説明ではなく問いかけ 生徒に考えさせる 生徒主体
- ・発言しやすい雰囲気 間違えてもいい雰囲気がある 息苦しくない

9

(スライド10)

いい授業のポイント 列挙3

- ・周囲と話せる ペアワーク グループワーク 実験観察体験
- ・学びあい 教えあい 助け合うことができる 生徒が授業を作る
- ・生徒の顔色を見る 先生が口を挟むことが少ない 生徒主体の時は先生は見守り
- ・知識を共有 意見発表が多い 黒板でグループの意見交換
- ・生徒も先生も楽しんでいる 終わった時に達成感
- ・最後に感想を書かせる

10

そして授業では、次の時間に「前授業の振り返り」をするのですが、それを学びの履歴として書いてもらっています。いわゆるリフレクションペーパーですね。その中に（スライド 11）次のコメントがありました。「いいと感じた授業はほとんど AL の要素が含まれていた。いまだに記憶にあるほど覚えている授業もあるので、グループ活動など取り入れながら授業構成していくことが大切だと思った」。

（スライド 11）

前時、自分が経験したいい授業を書き出し

【学びの履歴のコメントから】3

・自分がいいと感じた授業はほとんどアクティブラーニングの要素が含まれていた。いまだに記憶にあるほど覚えている授業もあるので、グループ活動など取り入れながら授業構成していくことが大切だと思った。

⇒アクティブラーニングけっこう普及していますね。

⇒いい授業の答えは自分の中にありましたね。

11

私は「いい授業」というものについて学生が経験したことをたくさん書いたものを見ながら、AL は結構普及しているんだな、少なくとも生徒がそう感じている。またいい授業という体験は、かつての一方向の授業の中では、つまり AL という言葉が登場する前は、あまりなかったんじゃないかと思います。私はスライド 11 のコメントに対して「いい授業の答えは自分の中にありましたね」と返しました。

さらに学びの履歴のコメントをもう 1 枚（スライド 12）を紹介します。

（スライド 12）

前時、自分が経験したいい授業を書き出し

【学びの履歴のコメントから】4

・中学、高校の時は意識してなかったが、今振り返るとグループで話し合うような授業が多かったと感じた。生徒が先生も思いつかないような意見を生み出せると最高の授業だと感じた。

⇒これがアクティブラーニングの醍醐味です。先生が想定している答えを超える答えが出てきた時！
出藍の誉れ 生徒に乗り越えられてこそ本望！

12

私は次のことを言いたかったんです、「先生が予想している以上の答えが例えばグループワークから出てきたらそれはALの醍醐味だ」ということを学生に伝えたかったんですが、私が伝える前に、もう学生が気づいてこんなふうには書いていました。

そして私は「生徒に乗り越えられてこそ本望だ」とコメントしました。

こういった経験を大学で1学期の間に重ねながら、私が日々感じていたのは、同時にそれは私なりの本日の回答であります、「生徒の学びは変容したか？」への答えとして「変容した、もしくは変容しつつある」です。このように感じています。

それはどこから言えるのかというと、ご覧いただいたスライドの福岡大学の学生たちの姿の中からです。

次に以前働いていた福岡西陵高校の授業の一例を紹介いたします。

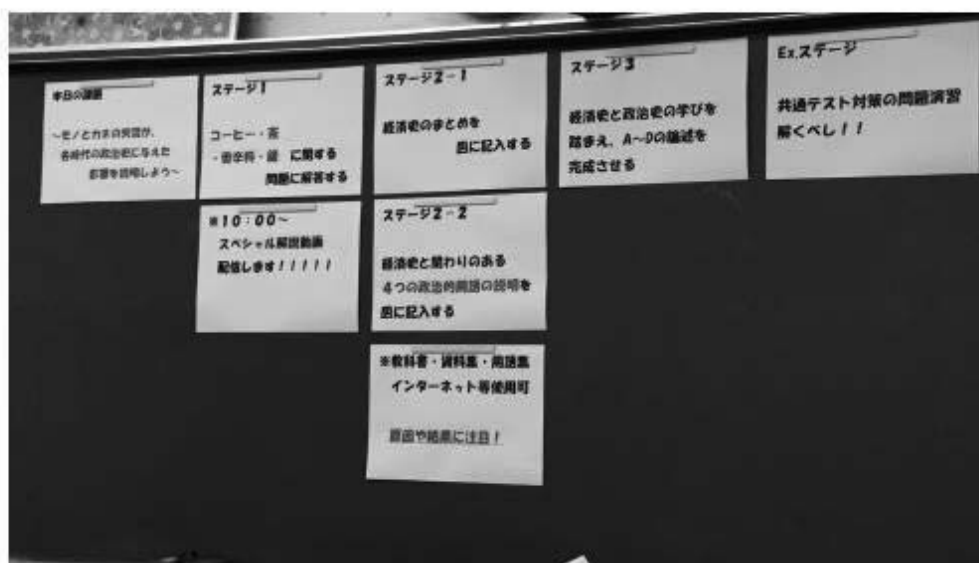
2 福岡市立福岡西陵高校の事例紹介 世界史個別最適授業

私が福岡西陵高校に着任した令和2年の年度末に、世界史の尾崎先生から「校長先生、授業を見に来てください」と誘われました。尾崎先生は新規採用の先生で、副校長と一緒に見に行ったところ、黒板に掲げられている「本日の課題」つまり本時のゴールですね、それは「モノとカネの交流が各時代の政治史に与えた影響を説明しよう」でした。そしてその授業で生徒がすることはKP法でスライド16のように指示されていました。

皆さんから見て左端に本日の課題・ゴールがあり、右へと順にステージ1、2、3、エクステンションステージと並んでいます。

(スライド16)

生徒がすることがKP法で指示されている



16

まずステージ1では、「コーヒー、茶、香辛料、銀に関する問題に解答するようにワークシートに仕組まれています。さらにステージ1では「10時からスペシャル動画配信します!」と書かれています。

ステージ2では経済史のまとめを図に記入するようになっています。さらに経済史と関わりのある4つの政治的用語の説明を図に記入するようになっています。このときに、教科書・資料集・用語集・インターネット等使用可とあります。

ステージ3では、経済史と政治史の学びを踏まえA～Dの論述を完成させ、最後のエクステンションでの課題は、共通テスト対策の問題集を解くべし、となっています。実はこれは東大の入試問題を意識したつくりになっています。

この黒板は、生徒からみれば、このような段階で考えを進めていけばいいんですよ、という指示をされています。スライド17は生徒の様子ですが、生徒は各自バラバラにやっています。先生が配信した動画を見ている生徒もいるし、ネット検索をしたり、教科書、図説、電子辞書を見たりしている生徒もいる。一人でやっている生徒もいれば、2人組もいる。それぞれ自分のやり方と自分の速度でワークシートを解いているんです。でも最終的に目指すゴールはひとつなんです。

スライド18は先生がオリジナルでつくって配信した動画を、生徒が何度も繰り返し見たり、自分の好きなところでストップさせたりしてワークシートの問題を解いている、というものです。

(スライド17)



生徒は先生配信動画、
ネット検索、教科書、
図説、電子辞書..
一人もいれば二人組も
自分のやり方、速度で
ワークシートを解く

でもゴールは一つ

(スライド18)



先生配信動画

(スライド 19)

ワークシートの問いに、各自で調べ考え答えていくうちにゴールへたどり着くように仕組みられている

自分のやり方、自分の速度で

最後に自分の作った答えを共有、TTPSしてより良い答えを作る



ワークシートの問いに各自で調べて考えて答えていくうちに、ゴールにたどり着けるよう仕組みられています。さらに自分のやり方と自分の速度で進められる。また最後には自分がつくった答えを共有し、TTPS、これは「徹底的にパクって進化する」の略ですが、答えを共有することで「あ、これはいい表現だ」と思ったらそれを自分の答えに取り込んでいく。この点は協働的な部分になります。こういった尾崎先生の授業を見ながら私が感じたことは、「個別最適とはこういうことか!」と思いました。尾崎先生は若い新採の先生で1年目だったんです。講師経験は3年くらいあるということでしたが、若い先生がこういう授業を構成している、組み立てているということに、本当に「こんなふうに時代は変わっていくんだな」ということを感じました。これは授業の一つの事例です。

また、去年（2021年）の産能大の岡山フォーラムで、本日の午後のセッションで登壇される吉本悟先生が紹介された福岡西陵高校の生徒たちは、1人1台の端末をバリバリと駆使しながら、さまざまな問題解決をしつつ、総探の時間に端末を活用して新しい体育祭をつくりあげてくれました。4月の始業式には「新しい体育祭はこうにやります、このような競技をします。動画を配信しますのでそれで新競技をご理解ください」と流しました。教師は指示していません。春休みに生徒による実行委員会がZoomで会議をして、自分たちでどんどんと作り上げているのを見ていましたが、始業式で流れた新体育祭の解説動画を見て先生方がびっくりしているような状況でした。スライド21の新聞の見出しに「コロナ下、体育祭実行委立ち上げ種目提案」とあります。もう一つは探究プロジェクトで毎年100組くらいが、自分たちで探究課題を設定しています。その中には例えば「校則の改正」につながったものもあります。生徒たちはこれらの経験をしながら、自分たちがいるコミュニティは、自分たちの意見や行動で住みやすく、よりよく変えることができるんだと、感じる体験をしました（スライド22）。

私はその様子をみて、「生徒たちは ICT を手にすることで自走し始めたなあ」と感じていました。それからもう一つ、ICT を手に入れて変わったことは修学旅行です。行先は北海道でした。まず修学旅行のしおりがデジタルになりました。生徒皆が端末を持ってそこに書き込みをしています。Google フォームで健康観察をし、班長会議はオンラインです。点呼もオンラインです。もちろんこれらはコロナ感染防止のためですが、ものすごく時間短縮となり「これって本当に便利ですね」となりました。それから「バズリグランプリ」、これは観光バスで観光をしたら本当はいろいろと感想を話し合いたいですよ。でもバスの中は無言なんです。だから皆は自分が見てきた観光地の写真を投稿し合って、そこに「いいね」をし合っていました。一番たくさん「いいね」がついた写真は、アイヌの笛を吹く体験の投稿でした。この「バズリグランプリ」を「校長先生、やっていいですか？」と生徒が言ってきたときに「面白そうね、やってみたら」と言いましたが、こんなふうに ICT を学校行事の中に使えば、皆が楽しめる。修学旅行が終わって係の先生が、「先生、コロナが終わってもこれでいきましょう」と言ってくれました。

3 本日のまとめ

そして、今日のまとめです。「キャリア教育、AL、探究、ICT で生徒の学びは変容したのか？」ですが、私の意見は生徒はそれらを体験しつつ、変容した。変容しつつあると実感しています。

これまでは、内容もやり方もペースも先生が決めて一斉でした。それが、生徒が自分のやり方、自分のペースでできる。それから内容も生徒の興味・関心に応じて、特に総学や総探の課題設定などは、本当にその子が関心を持っていることとなっていっています。つまり、一斉に同じことをやっていた時代から個別にそれぞれがやる。そして協力して課題を解決して、新しいやり方を自分たちで創造していく、ということが ICT 端末があるからやりやすい、と感じていました。

私は大学で学生に次のような講義をしています。「結局 ICT は教室の学びにどんな変化をもたらしたか？」。(スライド 26)

それは教室に閉じていた学びが、世界とつながった。世界の誰からでも、何からでも学べる。世界に向かって発信できる。そうすると、対面の先生の役割はどう変わるのか？

教えることももちろん続いていくと思いますが、ガイド役とか学びの案内人として、それから目の前で迷っている、つまづいている生徒たちの相談にのる学びのカウンセラーとして、それから「こういうことを学ぶべきだ」といった問いを立てる人。それから学び続ける姿勢を見せる人。そういう講義をしています。

また、一番大きかった変化というのは教室での記録媒体の変化だと思います。(スライド 27)

世界的に見ると、751 年「タラス河畔の戦い」で蔡倫（中国後漢）の製紙法が西方に伝わる。これで紙がヨーロッパに伝わり、紙がつくられるようになる。それからイギリスで「鉛筆」が大量生産されるようになり、さらに紙をパルプから作る方法が発明されて大量生産できるようになる。学校では長い間ノートと鉛筆で進んできたのですが、インターネットやデジタル機器の登場があり、日本では 2020 年に GIGA 構想前倒しで、一人 1 台デジタル端末を持つことになりました。

(スライド 26)

結局、ICTは教室の学びにどんな変化をもたらしたか
教室に閉じていた学びが、世界とつながった



世界の誰からでも、何からでも学べる
世界に向かって発信できる
対面の先生の役割は？

ガイド役、学びの案内人。相談にのる学びの力
ウンセラー。問いを立てる人。学び続ける人。

(スライド 27)

教室の記録媒体の変化

世界史的にみると

- 751年「タラス河畔の戦い」で蔡倫の製紙法が西方に伝わる
- 17世紀、英国で黒鉛鉛筆大量生産
- 1840年、ヨーロッパで紙の大量生産(パルプから紙を作る)
学校では「ノートと鉛筆」
- 1985年パソコン上での組版と構成が可能に
- 2000年代前半CD,DVD,デジタル信号を光ディスクに記録
- 2020年、GIGA構想前倒しで一人一台デジタル端末

結局、日本の教室の風景というのは、明治期は石版と石筆でした。大正期はノートと鉛筆、昭和も平成もずっとそれでやってきて長い間ノートと鉛筆を使ってきましたが、令和 2 年に一人 1 台デジタル端末が登場しました。その意味では「GIGA スクール構想」はものすごく変化が大きかったと思います。

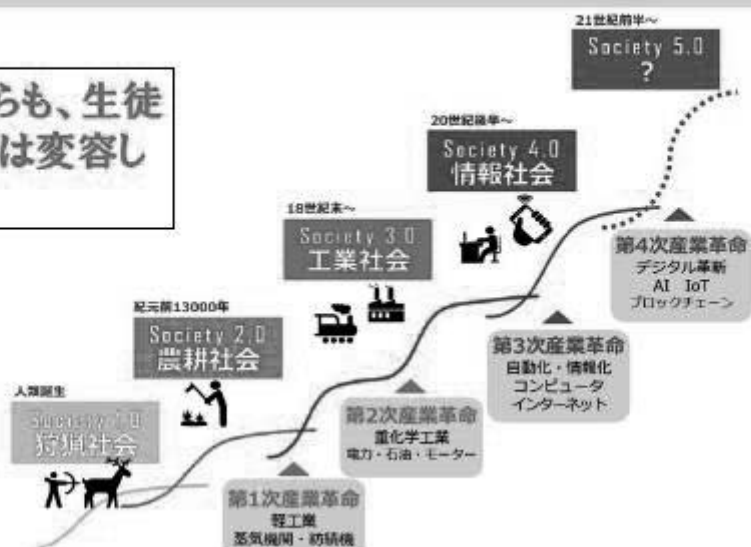
そして AL のときによく言っていた、「教える」から「学ぶ」に変わるんだ、という考え方の変化については、生徒が ICT を手にして自ら学び始めたことによって実現されたと思っています。そして文科省が 100 回教育改革を唱えるよりも、コロナウイルスの影響でこんなふうに変わったと思います。

そして「Society5.0」という言葉が言われます(スライド 31)。私は日本の学校は Society3.0 からようやく 4.0 に変わり始めたところだと思っています。そしてこれからも変容し続けると思っています。私たちは教師としてその激変期に立ち会っていますが、そういう意味で私たち自身も変容していかないといけないんだと感じています。以上で私の話を終わります。30 分で終わりました(笑)。

(スライド 31)

日本の学校は、近代工業社会から ようやく情報社会へ変わり始めたところ

これからも、生徒
の学びは変容し
ていく



(終わり)

教育改革推進フォーラム長崎 Session1

【テーマ】 過去を振り返り、未来を展望する

～キャリア教育・アクティブラーニング・探究・ICT 活用 生徒の学びは変容した？～

しもまちハイスクール/盛岡白百合学園

(元 岩手県立花巻北高等学校 校長)

下町 壽男 先生

生徒の学びは変わったのか

はじめに

- 1 生徒の学びが変わるプロセスとは
- 2 生徒の学びは変わったのか、変えさせられたのか
- 3 教育のデジタル化・個別最適な学びは生徒の学びを変えるのか

.....

リフレクション

ファシリテーター 後田康蔵先生（長崎県立諫早高等学校指導教諭）

生徒の学びは変わったのか

しもまちハイスクール/盛岡白百合学園（元 岩手県立花巻北高等学校校長）

下町 壽男

はじめに

こんにちは、下町と申します。どうぞよろしくお願いいたします。先ほどの和田先生のお話を聞いているとワクワクしますよね。なんか今すぐ、明日からもやれそうな気がする。そんな気にさせてくれるお話でした。ありがとうございました。私の話はここから一気に暗くなる話かもしれませんが、和田先生は具体的な実践事例のお話しが多かったのですが、私は総論的な話を批判的な視点で話させていただきます。本日のお題「生徒の学びは変わったのか」をいただいたときに、ふと浮かんだのは2つの問いでした。

Cp1「生徒の学びが変わるプロセスとは」

Cp2「生徒の学びは変わったのか、変えさせられたのか」

さらにおまけとして、

Cp3「教育のデジタル化・個別最適な学びは生徒の学びを変えるのか」

について私見を話す時間が取れたら、時間の許す限りやっていきたいと思っています。

1 生徒の学びが変わるプロセスとは

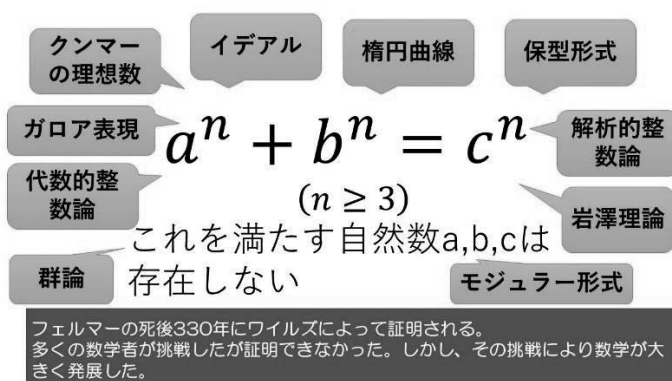
さて、「生徒の学びは変わったのか」

➡変わったとすればそれはどのようなプロセスによって変わったのか。それはどのような影響を受けたのか

についてです。「生徒」にフォーカスする前に、その変わるプロセスにおいて周辺にどういった変化があったのか。この部分を考える必要があるんじゃないかと思います。

要するに「生徒の学びは変わったのか」はゴールかもしれないけど、そこに至る経過を考えることが大事だと私は思ったんですよ。

（スライド3）



いきなりですが、これは何だと思いませんか？　そうです、フェルマーの定理です。このフェルマーの定理は彼が死んでから三百数十年の間、解決しなかったんです。いろんな数学者がチャレンジしたんですが、解決できなかった。そして 20 世紀の最後の方でワイルズが解決するんですが、じゃあその前に挑戦した数学者たちは皆無駄な人生を送ったのかというと決してそうではなく、彼らのチャレンジによって数学が発展していったという現状があります。定理は証明できなかったけれど、数学そのものはすごく発展していきました。これで何が言いたいかというと、たとえば生徒の学びが変わらなかったかもしれない、だけれど、先生方のマインドは変化した。あるいは学校組織が変わった、といったことが言えるかもしれないと思ってちょっと余計な話をしました。

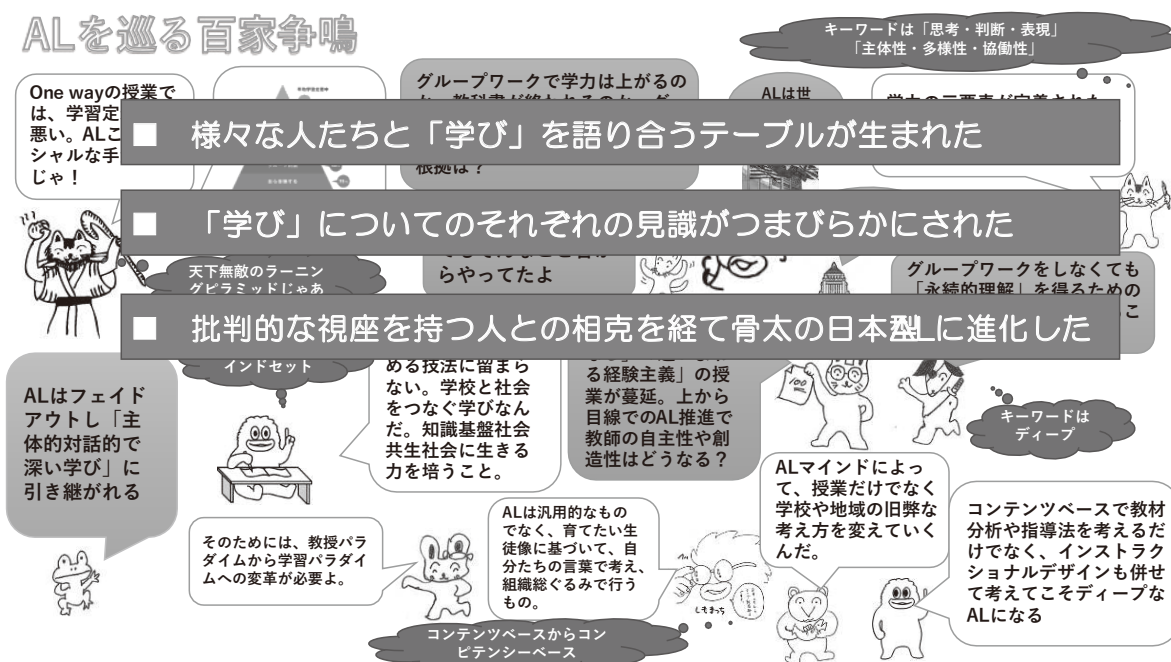
例えばアクティブラーニング（以下 AL）ですね。産能大フォーラムといえば AL ですが、皆さま「ラーニングピラミッド」をご存知でしょうか。最初のころは、AL はラーニングピラミッドとともに語られていました。また最初のころは AL とはワンウェイ型の授業を乗り越えるスペシアルなメソッドで、学習定着率をより高めるための方法であるという文脈で出てきたと思います。

もちろんそこに対して批判する人たちもいました。「AL なんて昔からやっているよ、俺が元祖だ」「俺の方がもっと昔からやってる」なんてね。そんなこと言ったら、もっとルーツをたどればプラトンだったみたいな話になりますが（笑）。またグループワークについて、「そんな賑やかしで学力は上がるのか」「教科書が終わらない」「グループに馴染めない生徒はどうするのか」と「できない理由」をいっぱいあげるといった人たちも多く見られました。でも国として AL を推進するという状況の下、議論を経ていく中で、日本型 AL という、欧米でやっている PBL（問題解決学習）などとはちょっと違った、さらに深いというか、精神性みたいなものを含めた、いわゆる先生方のマインドセットを整えるんだとか、AL を実施するためにどうカリキュラムマネジメントを行うか、といった大きいものに発展していったように思います。

もっと言いますと、「活動ありて学びなし」といった経験主義批判が起こり、そこから「ディープ」という声が大きくなりました。「深い学びでなきゃいかん」、「どういう問いを仕掛けるか」という声です。私はこれを「ディープの合唱」と言っていますが、それがずいぶんと出てきた中で、AL という言葉がフェードアウトして、「主体的で、対話的で、」に「深い学び」ということばが加えられました。

このように AL をひとつとってもその変遷をめぐっていろんな変化が起きているということです。私の中でその変化をまとめると三つほどあります。なんであれさまざまな人たち、職種や教科を超えた学びのテーブルが生まれた、というのが一点です。二点目は AL がやって来た、黒船がやって来た、というとき、学校の中で先生方は「私はこう思う」という、学びについての見識をつまびらかにしていかなきゃならなくなったということです。これはプロの教師として大事な場面ではなかったかと私は思います。三点目は批判的な視座を持つ人との対話が生まれたことです。それによってより太い、骨太の日本型 AL ができたんじゃないかと私は思います。

(スライド 4)

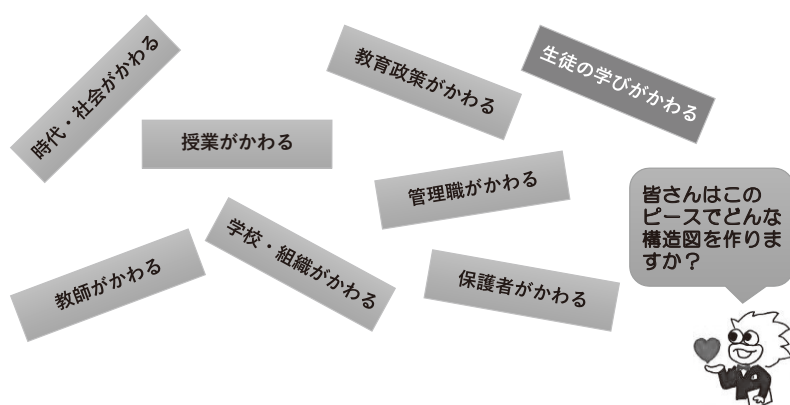


「否定の否定」は肯定ではなく、より強い肯定というものです。そういった意味でスライド 4 に百家争鳴とタイトルをつけましたが、ここ数年の流れの中で、実はいろんなことが生まれ、変化していきました。

さて、先ほどの話に戻りますが、「どういふプロセスで生徒が変わったのか」ですが、スライド 5 のように 8 つの付箋を考えました。

(スライド 5)

どのようなプロセスで生徒が変わったのか

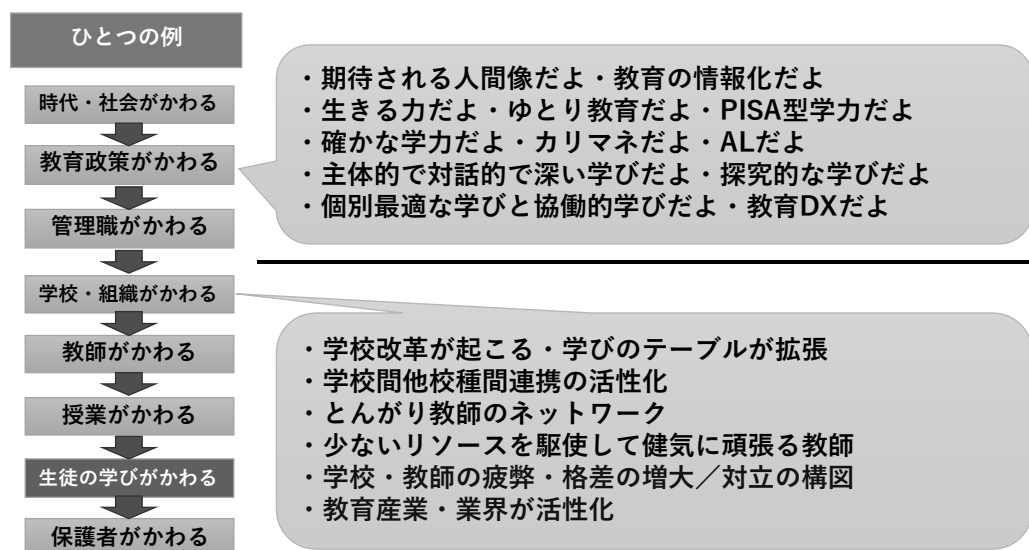


「生徒の学びが変わる」と言いますが、その前に「授業が変わるのか」「教師がどう変わったのか」などのピースです。これらのピースを使って皆さんならどう並べますか？

よくあるのは次の例です（スライド 6）。「教師が変わる」→「授業が変わる」→「生徒の学びが変わり自走しだす」といった文脈で語られることが多いと思いますが、これをもっと、身もふたもない並べ方をしてみます。教育行政の一方方向性というか、上位下達みたいなものですが、「教

師の学び変わる」のピースの上部に、上から「時代・社会が変わる」→「教育政策が変わる」がおかれます。日本の教育政策というのは非常にしっかりしていて、学力というのは学校教育法で決められているし、学習指導要領は10年に1回は時代に即して改訂が行われていく。そうやって教育政策が変わることによって、それが管理職に通達され「管理職が変わる」となる。管理職はそれによって組織を変えていこうと努力するわけです。それによって「教師が変わる」→「授業が変わる」→「生徒の学びが変わる」、そうやってハッピー(笑)という流れがひとつ想定されます。

(スライド6)



この例に対して、少し私見を述べます。私が教員になってもう40数年ですが、その間いろんなキャッチフレーズが文部省、文科省から出されました。「期待される人間像」だとか「教育の情報化」とか。ちなみにこの「教育の情報化」ですが、今でこそ「教育のデジタル化」と騒がれていますが、1990年代にCAI（Computer Assisted Instruction：コンピュータ支援学習）という言葉がすいぶん踊ったんです。私も情報系の大学を出ていたので当時はbasicというプログラミング言語でしたが、いろんなアプリケーションをつくっては授業で実践していました。当時はあまり普及していなかったので周囲は冷ややかでした。また、パソコンを使うのか、ペンとペーパーでやるのか、といったP&PP論争というものも起こっていました。コンピュータをツールとして使うことに意味がある、いや意味がない、といった結構侃々諤々の論争です。そんな議論が今また復活している感もあります。話を戻して、「生きる力」「ゆとり教育」という言葉も記憶に新しいです。このゆとり教育が始まったあたりで、PISAが始まりました。PISA2000では数学的リテラシーで日本は世界1位になりましたが、次のPISA2003では6位に落ちます。落ちてても得点に有意差は無いのですが、それでも大騒ぎになりました。そして「ゆとり教育」がスケープゴートにされ「確かな学力」という言葉が登場します。確か第一次安倍内閣の頃だと思いますが、「教育再生会議」が設置され、「教育の品質向上運動」とか「PDCAサイクルを回す」とか、学校に企業型マネジメントのような価値観が取り入れられます。それからカリキュラムマネジメントの話が出てきて、ALが登場します。さらに「探究的な学び」「個別最適な学び」「協働的学び」などがどんどん出てきてるんですね。それによって学校改革が起きて、学びのテーブルが拡張し、

いろんなネットワークができ、とんがっている先生・意識の高い先生を生み出し、あるいは乏しいリソースを駆使してけなげに頑張る先生も結構おりました。だけどその一方で、やはり学校や先生方は疲弊していったんじゃないかと思います。それから学校格差の増大問題、また学校の中での対立の構図などもあり、そして、ひとり教育産業だけが活性化していくという流れもありました。このことを敢えて私は指摘しておかなければならないと思っています。

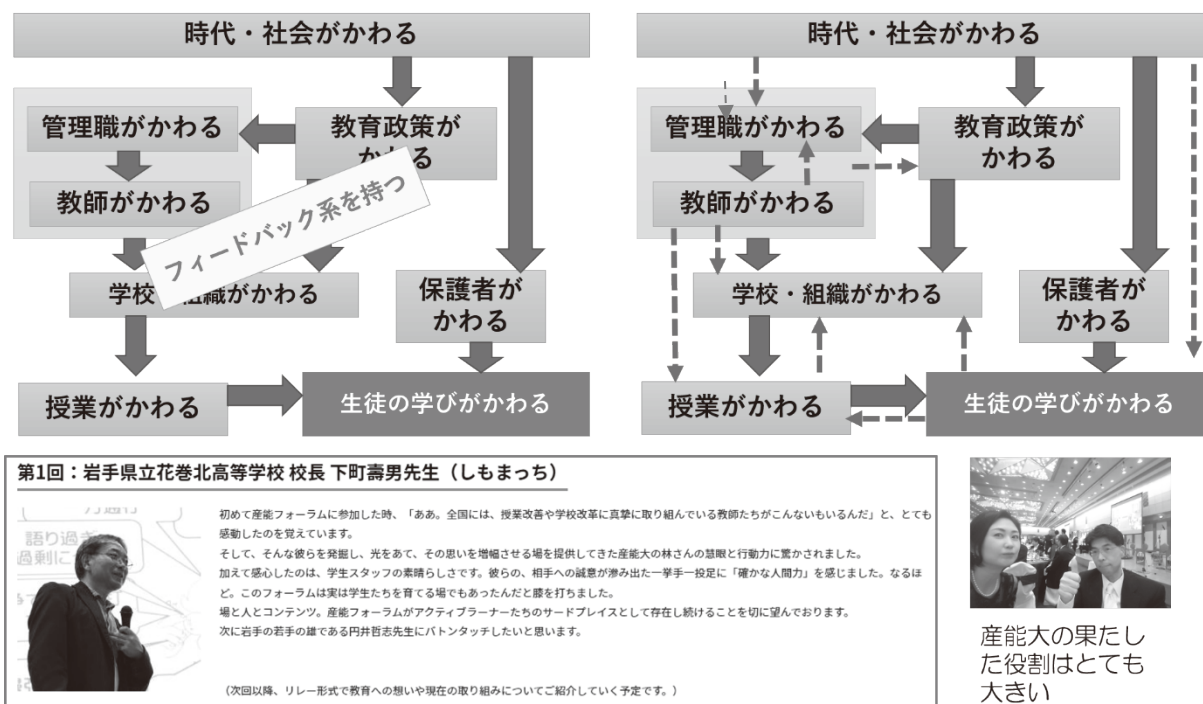
そして、「やらされ型や上位下達型の改革」は決して持続しないと私は思っています。AL だよ、主体的で深い学びだよ、探究的学びだよ、といった言葉によって、学校現場や教師がダッチロールのようなふらふら飛行を余儀なくされているということがあるんじゃないかと私は言っておこうと思います（スライド7）。そういった状況の中では形はつくろっても、教師は変らない、組織は変らない、そして生徒は変らないどころかむしろスポイルされる。そういう方向に変化するかもしれないわけです。ですから、大事なものは「やらされ型や上位下達型の改革」だけではなくて、逆のフィードバックですね、下からの草の根的な動き。フラットなコミュニティ、そういうプラットフォームが必要だと思っています。

（スライド 7）



先ほど（スライド 6）の私のフローチャートを平面に広げたものがスライド 8 です。図が左右に 2 つ並んでいますが同じものです。これって左の矢印通りにいけばそれは万々歳ですよ。でもそううまくはいかない。大切なのは、右図の点線の矢印のようなフィードバックだと思います。余談ですが私は今朝、ホテルで風呂にはいってきました。湯につかりながら、なぜ湯温を 40 度に一度設定するといつも同じ 40 度のお湯が出るんだろうってふと考えました。「あ、フィードバック系があるんだ」と気づきました。熱くなると温度センサーがそれを察知して水を足して温度を一定に保つ。こういう向きの流れをつくっていく運動が必要なのかなと思います。

(スライド 8)



ここで産業能率大学フォーラムについて話しますが、ちょっと自慢をしてもいいですか。これは産業能率大学のHPにある「学びの輪」というコーナーです。その第1回が私なんです（スライド8図の下）。今はもう107回ですよ、すごいです。和田先生も60何回目登場してるんですよ。こういうふうにつながっているんですよ。私は登場したとき何を書いたかというと、こんなことでした。「全国には授業改善や学校改革に真摯に取り組んでいる先生方がこんなにもいるんだ、と感動したことを覚えています。そんな彼らを発掘し、光をあて、その思いを増幅させる場を提供してきた産業能率大学の林さんの慧眼と行動力に驚かされました」。

スライド8の右図の点線の矢印のような、文科省や教育行政がやってきたことに対して、批判をするんじゃなくて、それをホンモノにするための草の根の運動、その「場」をつくってきた林さんや産業能率大学の方々の努力には本当に敬意を表したいと思っています。あともうひとつ書いています。「加えて関心したのは、学生スタッフの素晴らしさです。彼らの誠意がにじみ出た一挙手一投足に確かな人間力を感じました」。そこで思ったのは、産業能率大学フォーラムというのはわれわれのような先生方が集まる場を提供していると同時に、実は産業能率大学の学生の主体性を育てる場というのが裏テーマとしてあるのかなと思いました。だとすれば、これはすごく大きなヒントですよ。先ほどの和田先生のお話にもあったんですが、生徒たちは与えられた、先生が仕組んだ授業や仕掛けの中で、手のひらの上で主体的？になっているだけじゃなく、そこを飛び越えたところで先生目線になって、主体性を発揮していくことが大事なんじゃないかと思っています。だとしたら、これはもうそれぞれの学校でやっていけることなんじゃないかと思いました。

2 生徒の学びは変わったのか、変えさせられたのか

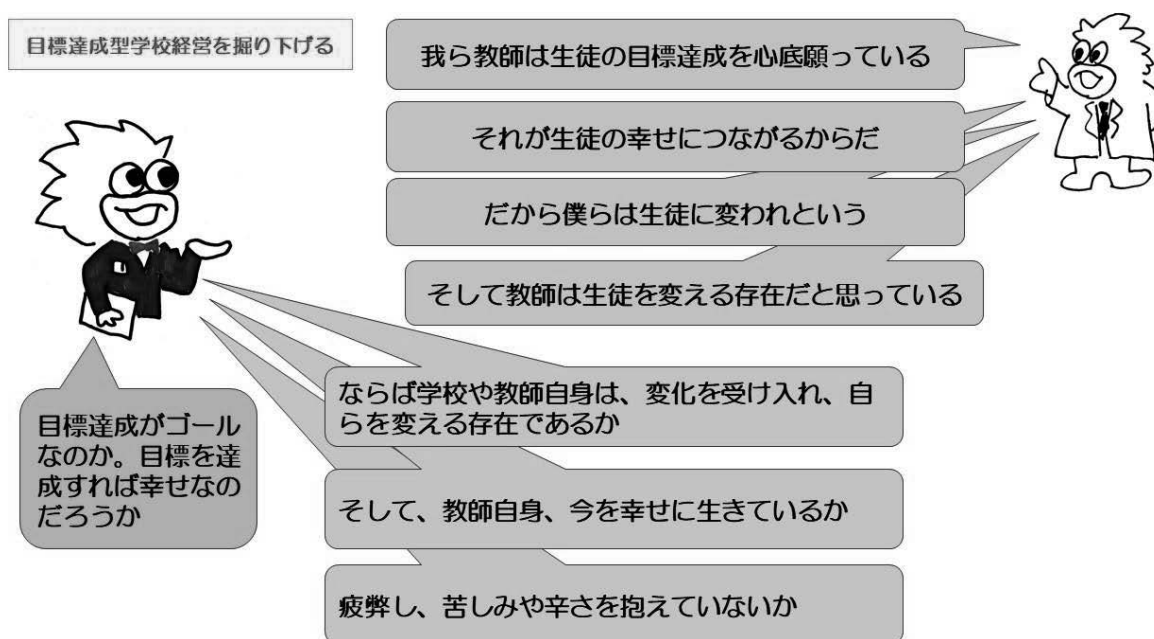
次は「生徒の学びは変わったのか」

➡どのように変わったのか。それは教師や学校によって「変えられた」のか

についてです。「生徒の学びは変わったのか」と言いますが、「変わった」というのはポジティブなことなんでしょうか。私はここにひとつちょっと引っかかりがあります。そもそも「変えたいの？」って話しなんです。

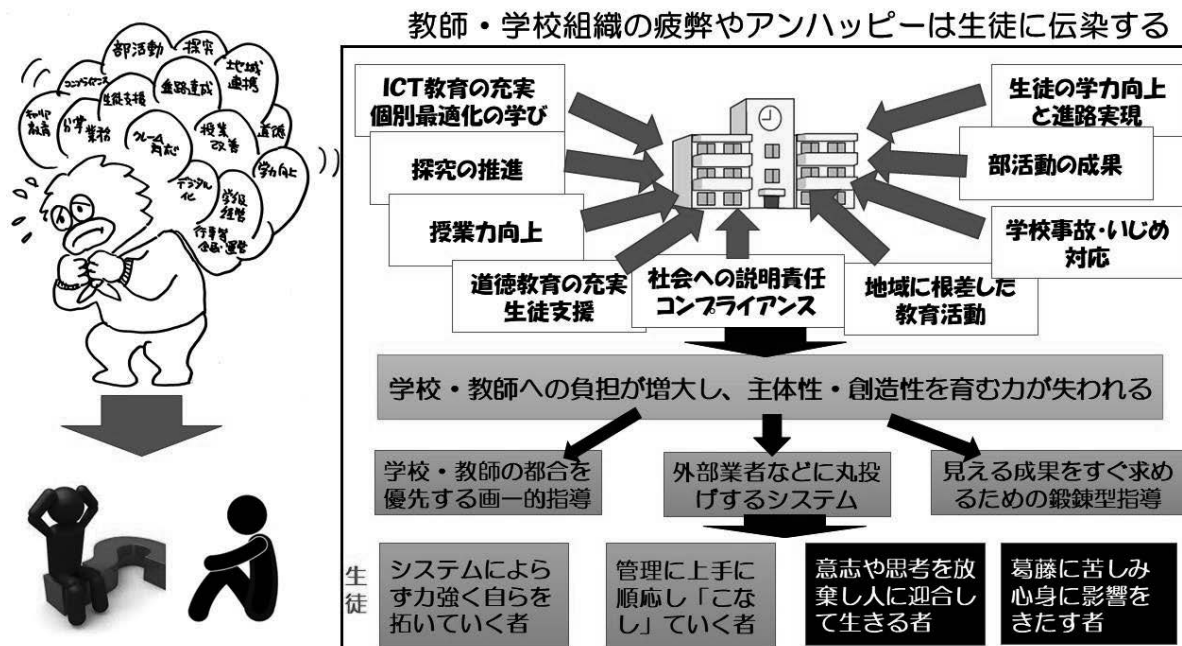
先ほど和田先生のお話で「あっ」と思ったのは、「ICTによって生徒が自走しだした」という言葉がありました。これを聞いてちょっと考えたのは、「ICTというテクノロジー、武器を手に入れたことによって生徒たちが自走できるようになった」のか、それともそうではなく「本来自走できるはずの生徒たちだった」のか。もしかしたらそれを先生方の方がストップというかブレーキをかけるような学校組織だったり先生方のマインドだったりしたのではないか、ということです。

(スライド 11)



「先生は生徒を変える存在である」とよく言いますよね。それは、生徒の目標達成を心から願っているからだ。そして生徒に「変われ」と言う。じゃあそういう教師は、教師自身は変化を受け入れ自らを変える存在であったか？ 教師自身は今幸せに生きているのか？ もしかして苦しんで、眉間にしわを寄せつつ、授業をやってるんじゃないか？という問いに我々はつねに向き合っていかなければならないんじゃないかと思っています。(スライド 11)

(スライド 12)



実際に現状を見ると、先生方の肩に乗っているものはとても多いんです（スライド 12）。ICT 教育、探究、授業力の向上、コンプライアンス、そして説明責任を果たせと。学校事故が起きたら授業どころじゃないですし、不登校の子どもへの対応など、もういろんな問題を教師は背負っています。そういった、いっぱいいっぱいの状況の中でも、学校は、主体性や創造性を育む力を創出していかねばならない。そして生徒は教師のたたずまいを内面化していく存在だと思います。だから教師や学校組織が疲弊していたり、先生がアンハッピーな状態だったらそれは生徒に伝染していくんじゃないかと私は捉えています。

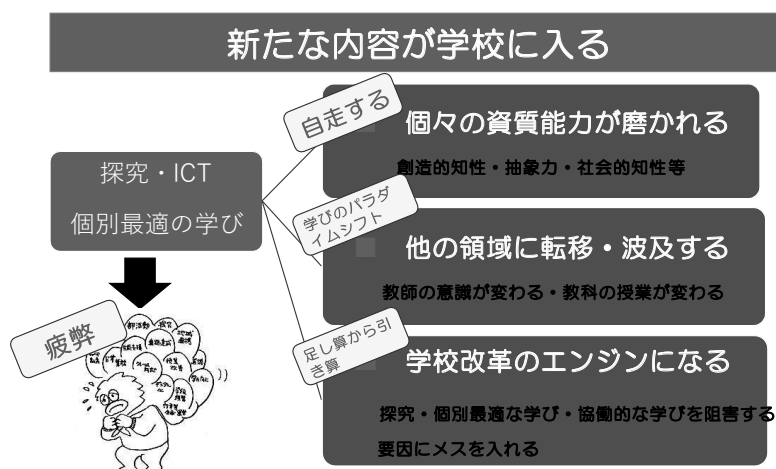
だから「生徒が変わる」といったときに、それは先生のたたずまいを内面化してそれで変わるというのであれば、それは変わらない方がよかった、ということもあるわけです。

スライド 12 の右の下から 2 段目の図です。学校が疲弊した状態ではどうしても画一的指導に走りがちになります。なぜなら等質的な集団であれば一つの教材、一人の教師で済むからです。あるいは探究や情報など面倒なのは業者に丸投げをする。外部業者と協働するならいいんだけど、丸投げしてしまう。そして見える成果をすぐに求められるため、鍛錬型指導に走ってしまう。そんな流れが生まれます。そのような中で生徒はどうなるか。それにもかかわらず強くがんばってやっていく生徒もいれば、そうじゃなくてそこに順応して上手に生きていく生徒もいるでしょう。でも、考えることを放棄して人に迎合して生きる、同調圧力の中でもがいて生きるという生徒も出てくる。あるいはそういうこともできずに葛藤に苦しんで、心身に影響をきたして不登校になったりする生徒もたくさんいるという状況があるわけです。

「生徒の学びは変わったのか」と言うならば、その前に、学校が生徒を伸び伸びと変わるような組織になっているかどうかということを見つめ直すことも大事ではないでしょうか。学校でやっているいわゆる領域分散型のマネジメントだったり、あるいは競争原理で動いていくとか、例

年通り前例踏襲の学校文化だったり、そういうものをもう一度見直すことが必要じゃないかと思っています。

(スライド 14)



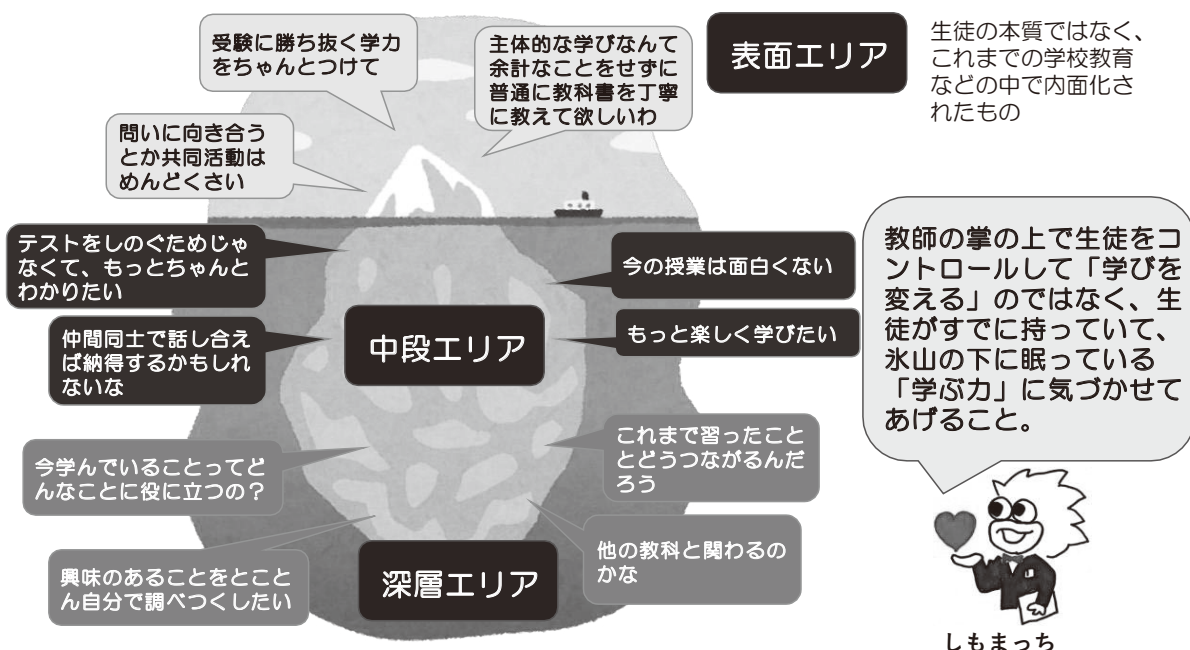
「探究」「ICT」「個別最適の学び」が登場してきたときに、確かにそれをする事で個々の資質、能力は磨かれるでしょう（スライド 14）。あるいは総探でやったことがそれぞれの教科の中に波及していき、教科の学びが変わっていくということも確かにあると思います。でも私はもうひとつあると思うんですよ。それは探究とか ICT もそうなんだけど、今ある学校のスタイル、例えば週に 45 分 7 コマ毎日ありますよとか、テストが何回あってそのテストでだめだったら再テストに回して、補習があって、と嫌でも目標を達成に向かわせるようなある種の最適化システム、それが実は本当の探究的学びには親和しない部分があるんじゃないかと私は思うんです。

では、今の学校に合うように、探究的学びをカスタマイズしてしまうのか。でもそれって違うと思います。探究的学びをしっかりおこなうために、逆に学校の方を変えるということです。

だから、探究的学びがやってきました、ICT デジタル化がやってきました、そしたら「あ、それはチャンスですね、学校を変える、組織を変える、教師のマインドセットを変える」と。そっちを期待したいと私は思っています。

さて、次のスライド 15 は生徒のニーズに学校は応えるのか、という話です。「生徒のニーズって何かな」と考えたときにそれはいろいろあります。例えば「受験に勝ちぬける学力をちゃんとつけて」という生徒もいれば、「また問いに向き合う授業やるんですか」「グループワークは疲れます」「主体的な学びなんてせずに普通に教科書を丁寧に教えてほしい」という生徒もいます。「早く終わって放課後の部活に専念したい」とか。みんながみんな授業に目を輝かせているわけじゃない。でもそれらは表面的ニーズ、あるいは経験の中でつくられたニーズだと思うんです。

(スライド 15)

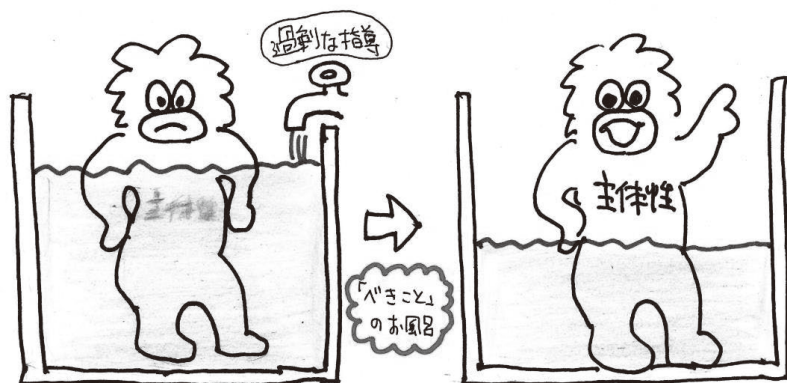


ニーズには表層エリア、中段エリア、深層エリアがあると私は考えます。表層にあるのは生徒の本質ではなくて、これまでの学校教育の中で培われてきてしまったものかもしれない。そこで、そういった表面的ニーズに向き合うのではなく、実はもっと深いところを掘り下げてみたい。深いところには、探究をしたい、興味あるものをとことん調べてみたいとかの欲求が本来的にあるはずなんです。

だけどそれを「〇〇すべき」というお風呂にこれまで生徒を浸かせてきたことで、もともとあった主体性を見えなくさせてしまった（スライド 16）。

(スライド 16)

「〇〇すべき」のお風呂



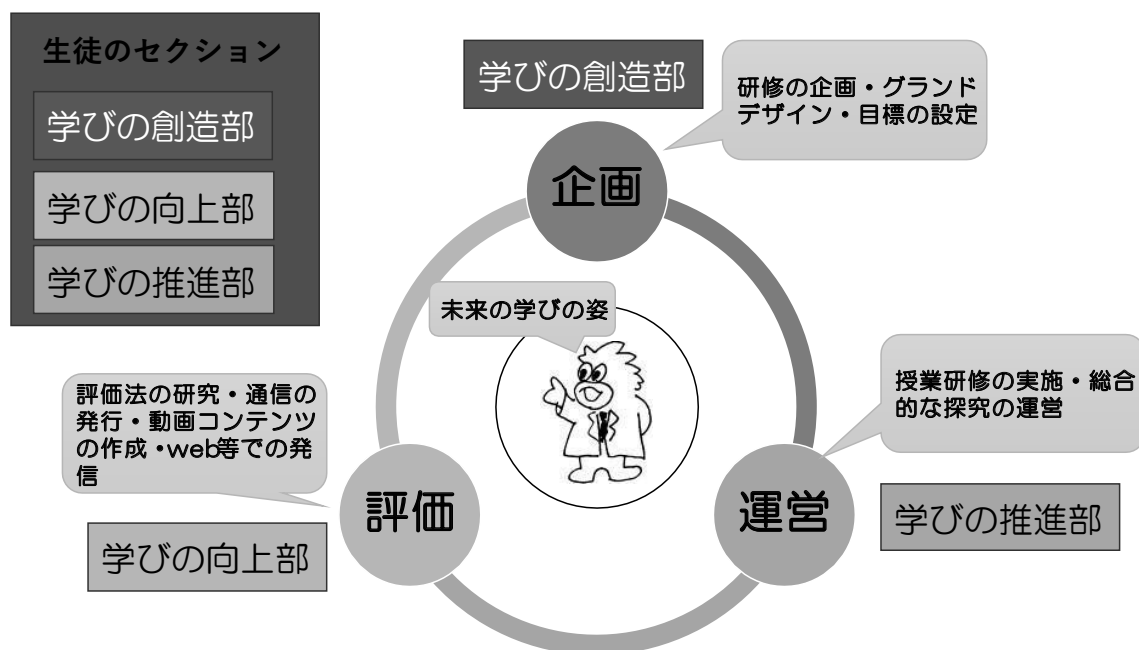
だからむしろわれわれがやるべきなのは、足し算ではなく引き算じゃないかと思います。「探究的な学びを指導するには何を足し算すればいいでしょうか」、ではなくて何を引き算するのか。なにが阻害している要因なのか、ということですね。そういうことを考えていくのが必要じゃないかと思います。

私は何年か前にある進学校で、探究の推進のために講演をしたり、出前授業をしたことがあります。「探究的な授業をしてほしい」と言われてやったんですが、その授業の進度がずいぶん遅かったので、なぜかと思ってたずねました。すると、実は2週間模試対策をしていたと言うんです。模試対策を授業で一生懸命行うということを温存しておいて、一方で探究を入れるということは、私はあり得ないと思うんです。これでは生徒が分裂症になってしまう気がします。探究をしっかりとやるんだったら、模試対策をするような授業は止めようということから入っていかないとダメじゃないかと思います。

先ほどの和田先生の話に福岡西陵高校の活き活きしている生徒が紹介されて素晴らしいと思いました。私が盛岡三高でSSHを担当していたときですが、当時岐阜大学の田村知子先生に運営指導員をしていただき、岐阜大教職大学院の先生方からもさまざまな提案をしていただきました。その中で、当時の盛岡三高の授業動画の感想として、「生徒が育っている。だったら、授業改革の輪の中に生徒も加えてみたらどうだろうか」と提案されました。これはまさに先ほど産業能率大学のフォーラムでは学生も一緒になってやっているという話しにもつながるんですが、例えば進路指導や生徒指導だったら、それなりのスペシャルな人間がやればいいかもしれないけど、こと授業改革においては教務とかがつかさどる仕事ではなく全員でやるべきものだと。だったら例えば企画・運営・評価といった3つのブロックに分けて、先生方がローテーションして担当するというのはどうか。

そしてそこにさらに生徒のセクションとして「学びの創造部」「学びの向上部」「学びの推進部」を加えることで、生徒たちが学校改革を自分事として受け止めてやっていく。そういった形をつくったらどうだろうか、と言われて、なるほどと感心して着手したんです（スライド17）。いくつか試みましたがなかなか継続はしませんでした。でも私はそのときに生徒のポテンシャルをすごく感じました。

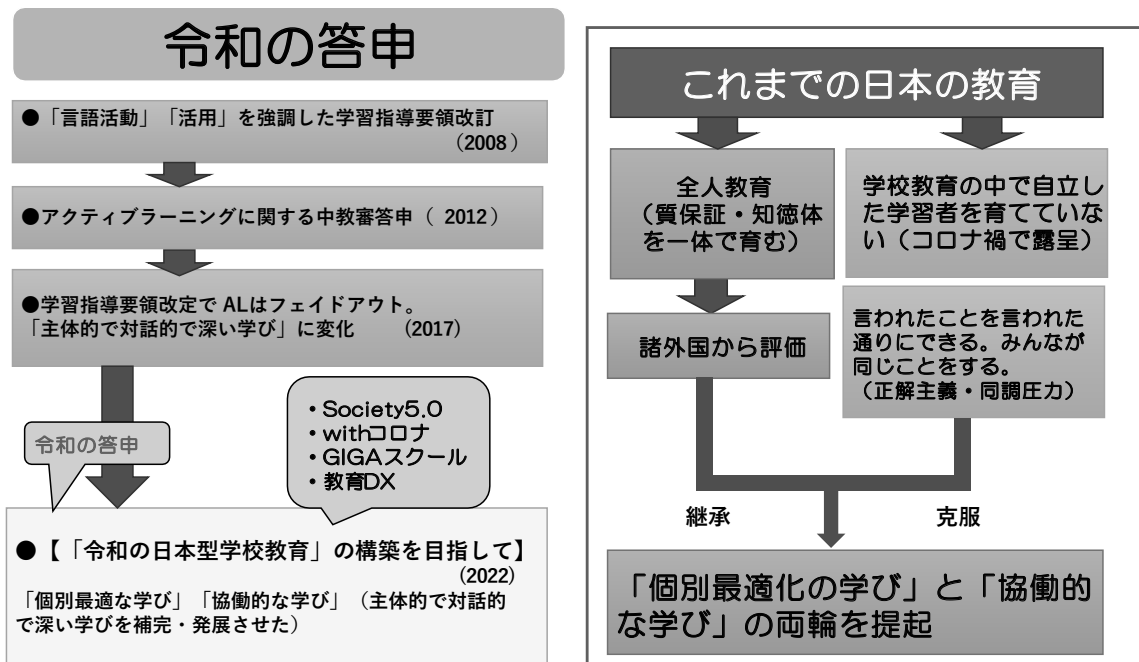
(スライド 17)



3 教育のデジタル化・個別最適な学びは生徒の学びを変えるのか

最後にデジタル化の話をしてします。和田先生のレポートにも登場しましたが、「令和の答申」といわれるものがありますよね（スライド 20）。いわゆる「個別最適な学び」と「協働的な学び」が抱き合わせで出てきたというものです。それは「主体的で対話的で深い学びを補完・発展させる」という趣旨ですが、これが出てきた背景として、Society5.0、with コロナ、GIGA スクール構想、教育 DX などがあります。これまで日本の全人教育力や、全体の質を保証するという点は諸外国から高く評価されていました。外国に行くと「日本の教育って素晴らしい」ってよく言われますよね。ところが一方でコロナ禍で露呈したのは、結局言われたことはできるけれど、皆と同じことしかしようとしらないという点、あるいは ICT 教育におけるインフラ上の問題点もありました。そこでこのような答申が出てきたわけです。

(スライド 20)



それを私はもろ手をあげて歓迎するというわけじゃないんですが、否定的ではありません。でも、せっかくの対談なので議論ができるように敢えて言います。私が以前「情報」の授業を担当していたとき、生徒に「スマホはどんなときに使うか」という調査をしたところ「動画を見る」「ゲームをやる」・・・とか。これって、見ると全部受け身の活動なんです。(スライド 21)

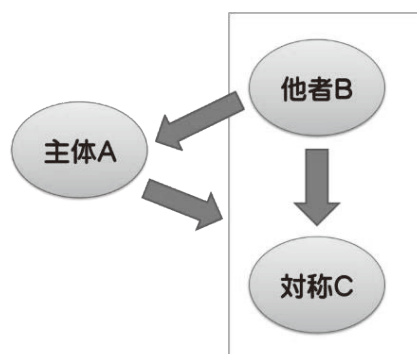
そもそもテクノロジーというのは、私の中では多様性を埋めるデバイスだと思っています。例えば社会的弱者、高齢者、障害者、遠隔に住む人などへのハンディをなくして公正にするためにそこにテクノロジーが存在している。それがひとつの大きな役割だと思っているんです。だとすればそれは主体性を促進する道具なんですけど、生徒たちの使い方を見ていくと、むしろ受動化する装置になってしまっているように感じられるんです。そういう状況の中で一人 1 台のタブレットを与えたときに、これはよっぽど上手にやっていかないと、単なる受け身的な使われ方になってしまう部分がある、ということも考えていかなきゃならないです。

(スライド 21)

テクノロジーは主体性を増幅させるツールなのか、受動化を促進する装置なのか



教育とエロス（欲望のミメシス）



生徒にとって教師とは、知識への挑発者として目に映るのであって、知識の所有者、例えば学者と同じではない。子どもの目の前にいる教師は、知への欲望にかられていて、それに夢中になり、その欲望のオーラを有形無形の形で生徒に見せ付ける存在である。子どもは、教師の所有する知識ではなく、彼／彼女が抱く欲望とその言動に滲み出る情熱に惹かれるのである。教師の知識に惹かれるのではなく、教師の「知への欲望」に惹かれるのである。

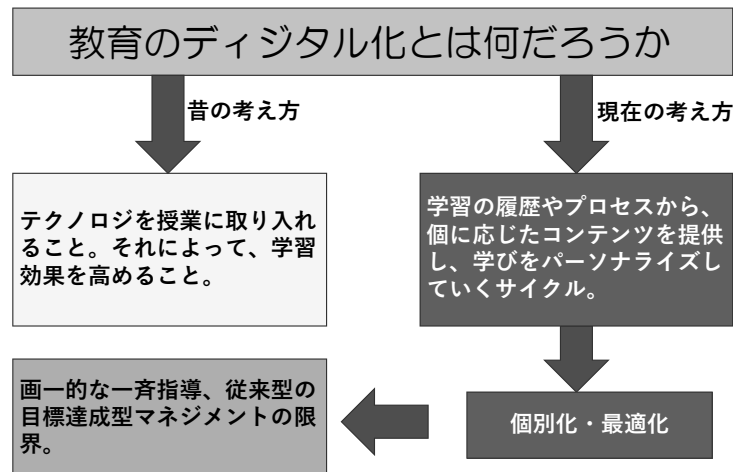
（参考・「教師－生徒関係論」高橋勝）

そしてもうひとつ。学びというのは何かの資格を取るために知識を先生が生徒に植え付ける、例えば自動車学校で自動車免許を取るために知識をインストールするというのであればそれはAIに取って代わられるものだと思います。だけどこれって学びではないじゃないですか。先生が言ったことを生徒に伝えて、それがちゃんと伝わったかどうかをテストによって再現させる。こういうのは学びではないと思うんです。学びというのは、先生が1つのことを言っても聞いている人は皆が違うことを考えていくということだと思います。だとすれば、教師の役割とは、「教師 as ファシリテーター」とよく言われますが、そこだけじゃなくて、教師である自分が知に飢えていて、その欠乏している知を生徒たちと一緒に獲得していこうという情熱を持っているとか、教えることや学ぶことが楽しくてしょうがないからその楽しさを生徒と共有したいとか、そういう思いを持っていることではないかと思います。学びには「先生がこんなに数学ラブなら私もその数学を愛してみよう」という欲望のミメシス構造がある（スライド 21）。

そういうことも考えると、教師を単なるファシリテーターで片づけてしまうのは身も蓋もないんじゃないかと思ったりもします。

最後に、教育のデジタル化の中で「個別最適化」という話ですが、これは学びのパーソナライズ化だと思います（スライド 22）。例えばNetflixやYouTubeを見る、そうすると「あなたにお勧めの動画はこれ」って連絡が来ますね。いろんなデータから。誰がどこにアクセスしたのかが全部記録に残っていて、それらから「あなたに最適なものはこれですよ」と提供してくれる。そういうふうに「個別化」「最適化」が進んでいく。ということでそれぞれがハッピーになるかもしれない。けども、学びの中に協働性のようなものがないと、果たして生徒たちは本当に幸せになっていくか、ということを考えたいです。

(スライド 22)



スライド 23 は「長寿管理番付 2022」です。寿命と医療と幸福度の順位を合算して番付するのですが、これを見ると日本は 15 位。ところが寿命と医療を合算するとトップなんです。でも幸福度が 56 位とめっちゃめっちゃ低いことによって 15 位になっているということです。もし幸福度が 18 位以内だったら日本は世界一の長寿管理番付国です。日本は幸せな長寿国としてロールモデルとしてその姿を世界に紹介できるんです。そうすると国のミッションって何だろう？ 私は幸福度を上げることだと思います。

では次に「世界幸福度報告 2019 年ランキング」(スライド 24) を見ましょう。国連が発行する幸福度調査です。2019 年度ランキングは 58 位、2020 年度は 62 位です。日本の何が低いのか？ GDP や社会的支援は上の方の国に近いのに、圧倒的に低いのは「寛容さ・気前の良さ」です。そして社会・政府への「腐敗の認識」も低いです。もっと言いますと、「レガタム繁栄指数」(スライド 25) というものがあります。イギリスのシンクタンクが行っている国の豊かさを示す指数です。これらは先の 2 つよりもっと細かく項目が設定されています。ここでは日本は世界で 19 位です。でもそれぞれの項目は悪くないんです。けどなんと **social capital** の項目のスコアが 132 位というめっちゃめっちゃ低い数字です。本当に低いです。**social capital** は家族との関係、社会的ネットワーク、対人的な信頼感、組織への信頼感、社会参加という 5 要素から算出されていて、そこが低いんです。ということはその部分をあげていくことで日本は幸せな長寿国になりうるんですよね。それが国の使命だと思います。

だとすれば、教育の側からそういった部分を解決していくというのが、すごく大事じゃないかと思っています。

(スライド 23)

長寿管理番付 (Longevity Management Scorecard) 2022 「20ファースト」調査

順	国	寿命	医療	幸福度	スコア	65歳以上の人口比率(%)	
1	スイス	7	16	3	26	19	
2	オーストラリア	12	9	11	32	16	
3	ノルウェー	24	12	6	42	18	
4	フランス	18	3	21	42	20	
5	オランダ	27	11	5	43	20	
6	スペイン	10	6	27	43	20	
7	フィンランド	34	10	1	45	22	
8	イスラエル	16	18	12	46	12	
9	デンマーク	46	5	2	53	20	
10	ニュージーランド	26	19	9	54	16	
15	日本	4	4	56	64	28	

「寿命」「医療」「幸福度」という3つの指標を用い、それぞれの順位を合算した「スコア」が小さいほど高齢化への対応が「よい」国としている。

幸福度が18位以内ならば日本は世界一になる

幸福度が低い要因は？

「世界幸福度報告」及びレガタム繁栄指数にその答えがある

ではみてみましょう！

(スライド 24)

世界幸福度報告 (World Happiness Report) 2019年ランキング

国連「持続可能開発ソリューションネットワーク」が発行する幸福度調査

困ったときに頼ることができる
親戚や友人がいるか

自分の心身で生命維持し、自立した生活ができる
生存期間

人生で何をするかを選択の自由
に満足しているか

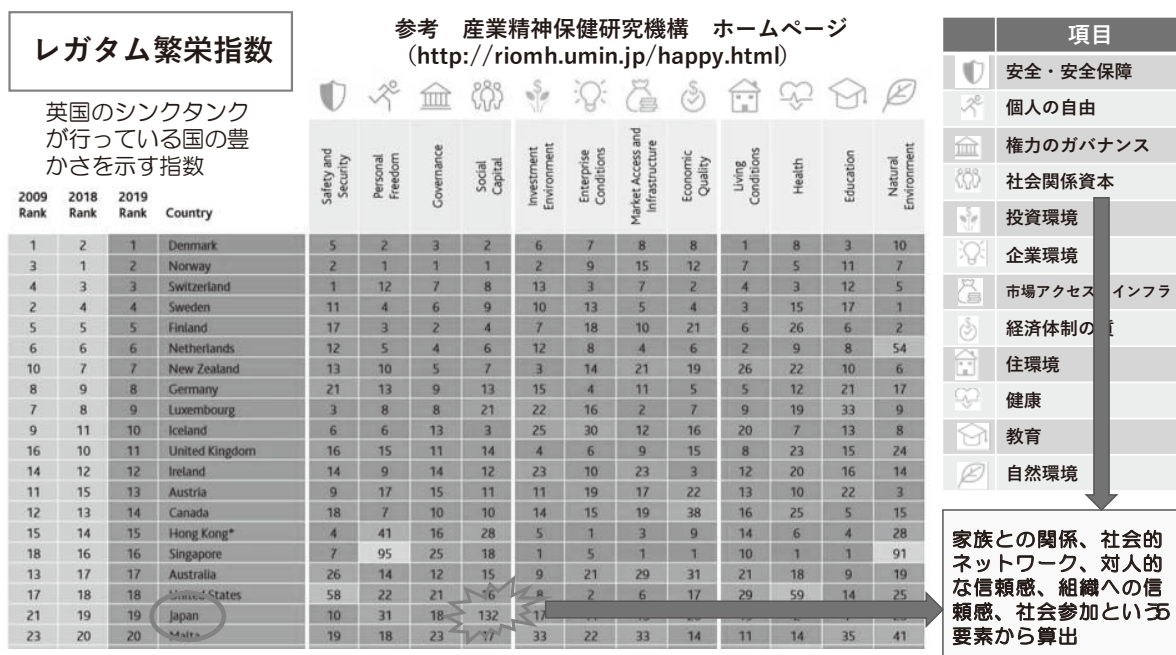
過去1か月の間にチャリティなどに寄付をしたことがあるか

不満・悲しみ・怒りの少なさ。社会・政府に腐敗が蔓延していないか

順位	国名	人口あたりGDP GDP for capita	社会的支援 Social support	健康寿命 Healthy life expectancy at birth	人生選択の自由度 Freedom to make life choices	寛容さ・気前の良さ Generosity	腐敗の認識 Perceptions of corruption	総合
1	フィンランド	1.340	1.587	0.986	0.596	0.153	0.393	7.769
2	デンマーク	1.383	1.573	0.996	0.592	0.252	0.410	7.600
3	ノルウェー	1.488	1.582	1.028	0.603	0.271	0.341	7.554
4	アイスランド	1.380	1.624	1.026	0.591	0.354	0.118	7.494
5	オランダ	1.396	1.522	0.999	0.557	0.322	0.298	7.488
6	スイス	1.452	1.526	1.052	0.572	0.263	0.343	7.480
7	スウェーデン	1.387	1.487	1.009	0.574	0.267	0.373	7.343
8	ニュージーランド	1.303	1.557	1.026	0.585	0.330	0.380	7.307
58	日本	1.327	1.419	1.088	0.445	0.069	0.140	5.886

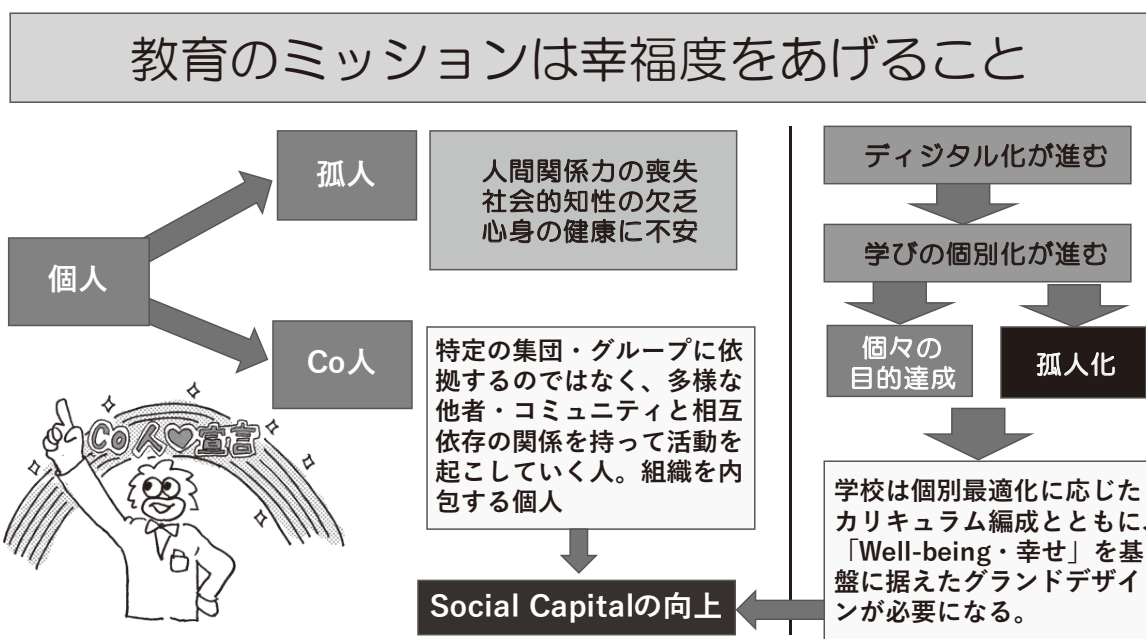
※ 2020は62位に後退

(スライド 25)



つまり「個別最適化の学び」を進めるのであれば、それと同じくらいの熱量で Well-being、幸せな学び、生徒に幸せに生きるということを進めていくのが大事だと考えています(スライド 26)。
私の話は終わりです、ありがとうございました。

(スライド 26)



リフレクション

(参加者)

和田先生／下町先生／ファシリテーター 後田康蔵先生（長崎県立諫早高等学校指導教諭）

—後田 会場の皆さん、たくさんの質問カードをありがとうございました。オンラインでもたくさんのチャットをいただきました、ありがとうございます。まずは質問・感想をそれぞれお互いにお話しいただけますか。では下町先生からお願いします。

—下町 和田先生ありがとうございました。先生とコラボできて大変光栄です。講演の中でも話したことなのですが、「ICTを手に入れることで生徒たちは自走しだした」のか「そもそも生徒は自走する存在にまでなっていたけど、むしろ学校や教師側がそこに縛り付けてしまっていた」のか、先生はどうお考えになりますか？

—和田 下町先生の話聞いてなるほどと思ったのは、ICTを手にして生徒たちは自走したんだけど、もともと自走する力はあったところに、先生たちが長い間ストップをかけてきたんじゃないか、ということ。そして長い間ストップをかけて自動車学校的学びを与えてきた結果として、生徒は自動車学校的学びを「学び」だと思っているんじゃないか、と感じました。

今、福岡大学で教えている大学3年生というのは、大学2年と3年のときにコロナ禍にぶつかった学生です。そして本人が高校生ときはICTや一人1台端末とはまったく関係ない世代ですが、将来本人が教壇に立つときの生徒は一人1台端末を持っているという谷間の世代になります。その学生にICTの活用とか推進の話をしていると、学生が「スマホを授業中に使っているんですか？」と言います。「使ったらいかなの？今はスマホどころか一人1台端末を持ってるんよ」と言うんですが、こういった昭和の時代の感じみたいなものの中に、現実の時代は平成も通り越して令和なんですけど、学生自身がストップされて、制限されている中で育ってきて、観察の徒弟制度で、自分たちがそうなっていることに気づいていない。そういう意味で自走する力はもともとあるんだけど、私たちは長い間、鋳型に生徒を入れようとしていたんじゃないか、ということを下町先生の話聞いて思いました。

—下町 ある高校の校長のときでしたが、発達障害の生徒から、タブレットを使って黒板を写すことを認めてほしいということだったので職員に図ったところ、シャッター音が隣の生徒の気になるんじゃないか、などといった反対を言う先生もいました。結局通しましたが、そのときに私が言ったのは、だったらそういう生徒のためにデバイスがあるという発想を超えて、皆が持って良いことにしたらどうだ、そうすればよりクリエイティブな学びが促進されることになるんじゃないか、と提案しました。でもこれは却下されました（笑）。今もやっぱりそういう先生方が多いのかなあという感じです。ありがとうございました。

—後田—では和田先生から下町先生への質問・感想をお願いします。

—和田—下町先生の話の中に「幸福度」の話が登場しました。実は私も自分の話の中で言いたいなあと思っていました。福岡大学の講義の中で「アクティブラーニング（以下AL）をなぜやるのかを社会変化の観点から考えてみてください、それから幸福度 Well-being の観点から考えてみてください」、というのを2つ出して、「何のためにALや主体的で対話的な学びをするのか」とそれぞれの意義を学生に考えさせたときに、「よりよい社会と幸福な人生のつくり手となる」という言葉が中教審の中にありますが、結局私たちが学んでいるのって、幸せになるために学んでいる。だから「よりよい社会と幸福な人生をつくっていくためのALなんだ」という講義をした回があったんです。そのときの学生たちの反応はめちゃくちゃ凄くて、実はその中で下町先生の「幸せになるためのAL」という言葉を紹介したんです。そこに学生たちは反応しました。なかには「鳥肌が立ちました」「幸せになるために学んでいるんだ、けどそのことを自分たちは忘れていました」そういった学生がいて、しかもたくさんいて、私はそのことを下町先生に感謝申し上げたいと思っていました。それから「幸福度」、これがキーワードになるんじゃないかと思います。すみません、お礼と感想が入り混じってしまいました。

—下町—チャットの最後の質問がそういった感じになっていますね、ちょっと読んでみます。

「個人の幸福は社会全体の安定や幸福があって成り立つということ、またその逆もしかり、だなど下町先生のお話を伺って再認識しました。他人を不幸にして自分の幸福を成立させてはならない、という文化を生徒に促す前に、私たち教員がまず持っていないとならないと同時に思いました。教員生活がそういう文化をはぐくむために必要なことは何だとお考えでしょうか？」

今の和田先生のお話と重なってくるかなと思いました。私は東日本大震災があったとき、考え方が大きく変わりました。すごく支援を受けて、世界中からいろんな人も訪れて、海外の貧しい子どもたちが自分のおこずかいを貯めて寄付金をつくとか、お菓子を送ってくるとか、すごく感動したんです。一方で、何かそこで一発当ててやろうとか、一本松の下でピースをして写真を撮ってすぐ帰ってしまう政治家とか、挙句の果てには「怪しいお米セシウムさん」というテロップ事件、大文字送り火の護摩木に「陸前高田の松の木は使わない」とか（大文字の護摩木として、東日本大震災の津波で流された岩手県陸前高田市の景勝地「高田松原」の松を使うことを大文字保存会が計画したところ、放射能汚染を不安視する声が京都市などに寄せられたため、急遽中止となった）。それから野球の選抜大会で「花巻東高校は放射線で汚染されているから甲子園に来るな、瓦礫を撤去している」とかの心ない声もいっぱいあったんです。そのときに思ったのは「教育屋としての使命って何かな」と考えたときに、それは学力を向上させようというのはもちろんそうなんだけど、それだけじゃなくて、いわゆる教育基本法の理念を持ってそれを実践する者でなくちゃいけない、ってことでした。そこを考えました。民主的で文化的な国家を担う子どもたちを育てる、世界の平和、人類の福祉を向上させる、差別をしないとか、そういう子どもを育てる。そこに立脚していくことで私たち教師は、教師になりうるんじゃないかと思いました。

—後田— それではここから質疑応答を始めますが、質問が多かったものから始めます。圧倒的に多かったものがあります、おそらくここにいらっしゃる先生方は現場で戦われていると感じました。

学校としての文化づくり。探究だったり ICT がコンテンツとして広がって行く前に、学校としての組織づくり。例えば探究をやるときにどれだけ学校に、生徒に主体的なことを認める風土があるのか。例えば課題がたくさん出ていたら、生徒はもうやらなくなっちゃいますね。特にお二人は校長先生の経験もされているので、組織づくりの点で質問がたくさん集まりました。おそらく質問を書かれた先生方はがんばっていらっしゃるけれど、それが学校としてなかなか形にならない。そういったことをいろんな視点で質問がきています。例えば「こういう厳しい意見や不満分子があったとき、どういふうにそれを克服して全体の流れにしていっていったのか？」というような質問を多くの先生が質問を寄せています。

—和田— すみません、今の中の「不満」について具体的に言っていただくと答えやすいので、遠慮なく「こういうことです」とお聞かせください。

—後田— はい、まずは疲弊感。とにかく忙しい。教員間の温度差。教師の多忙感もありますが、生徒の多忙感もあります。

—和田— 下町先生のスライドの中に、先生がたくさんの荷物を背負っている姿があります。やはり一番大きいのは、先生たちがやっているのか、やらされているのか。ここだと思います。実は私この1学期、福岡大学でやらされていることを感じていて、ものすごく負担感が大きかったんです。それがあるきっかけで、やらされているんじゃないくてこれは自分からやろう、って思ったときに、負担感を感じなくなっていった。これは皆さんも大なり小なり結構あるんじゃないでしょうか。「なぜそれをするのか」という本質を自分で納得いかないままにやっているから負担感が大きいと思うんです。「何をやるか」とか「どのようにやるか」じゃなくて、「なぜそれをするのか」をしっかり考えて自分が納得する、それが大事じゃないかと思います。結構学校の中では「なぜそれをするのか」をすっ飛ばして、どうやろうか、何をやろうか、というところにいつているんじゃないかと思います。「なぜやるのか」の根本、本質を押さえる。それが大事だと思います。それは、私は自分の学校の教育目標のどういう生徒を育てたいのか、そこに関わってくることがじゃないかと思います。

例えば ICT が入ってくる、それによってどういう生徒を育成したいか、という共通認識を先生方が持つ。そのための確認作業が大事になってくると思います。

—下町— 私も和田先生に大賛成です。同じことを言おうと思っていました。そこへのつけたしとして言うと、学習指導要領の6つの枠組みがあります。「何ができるようになるか／資質・能力」「何を学ぶか／カリキュラム編成、教育過程」、「どのように学ぶか／教育方法」「何に目をむけるか／発達段階」「何が身についたか／評価」「何が必要か／マネジメント」。この6つの枠組みがあるんだけど、授業改善とか探究とか ICT とかいったときに、われわれって、つい「どのように学ぶか」How・What から入っちゃうんですよ。でも大事なものは「何ができるようになるか」です。「本

校の生徒がどのように育ってほしいのか」ってことを学校の先生、事務方、もっと言えば生徒も含めて大きな議論をしていくべきかな、と私は思っています。まずはそこから出発する。

この「何ができるか／資質・能力」には文科省の「学力の3要素」がありますが、その他にも Society5.0 の中ではどういうふうに生きる力を持つていくのがいいとか、それぞれの学校の建学の精神もあります、そういったものを皆で議論していくとひとつの型が浮かび上がってくると思っています。そこを初めの一步にしていくことだと思います。

一和田 それから「温度差」ですが、私はこれはあって当然だと思います。温度差がなくて皆がバリバリと燃えている集団は怖いですね。温度差があって、いろんな考え方の人がいてこそ、いいものができる。絶対アンチの人っていますよね。でもその人たちの意見って、ひとつの活動や政策を進めていくのにはものすごくいい意見だと思います。アンチの人たちの意見をちゃんと取り入れることによって、全体が良くなると私は思います。だから温度差については無理に揃えなくても、それぞれ個性があって考え方があって背景もいろいろ違う。下町先生と私も違う、同じになるわけがないです。

一下町 今の話につながる花巻北高校の職員会議の例ですが、花巻北高校は60分授業なので、職員会議の日は授業を10分短縮にするため、60分の時間が会議の時間として確保されます。でも60分で職員会議をやるといっても、はっきり言って単なる連絡だけならば10分もあれば終わります。なので結構時間が余ることもあります。そこで、花北では毎回会議の後に続けてワークショップをやっていました。最初から会議をアイランド型のレイアウトで行うんです。例えば今日のテーマはいじめについて、今日のテーマは本校の強みと課題を知ろうとか、そういうワークショップをやったんです。そうするとやはり声の大きい人がいるんです。「何を言ったか」よりも「誰が言ったか」が大事になる文化ですね、そしたら副校長先生が非常に上手で、声の大きい人たちだけを集めてひとグループをつくるんですね(笑)。そうするとほかのグループの若い人たちが結構伸び伸び喋れて、わりとうまくいきました。そして、ただいい汗かいたねで終わらせるのではなく、ちゃんと学校経営に反映させることにしていました。例えば「職員朝会を止めよう」という意見があると、実際に朝会を止めてみました。そしたら3日もたなかったんで、また復活させましたけど(笑)。トライ&エラーでいいんです。そういう感じでやっていたことがありました。

一後田 次は「場づくり」についての質問が多かったです。和田先生、この「場づくり」でこれはよかったよ、という例はありますか？

一和田 西陵高校に着任していきなり2日目に「オンライン学習をやりましょう」と言って、ひどい校長だったなあと思いますが、でもその後にとってもいいことを言ったなあとも思っています。それは、「私は西陵高校のことはよくわかりません、先生の方がよっぽど西陵高校のことをわかっています。だから、生徒にこれをやった方がいいと思うことを先生方が考えてください。そのために各部の部長に全権を委任します。先生方が考えて、いいと思うことをやってください」そう言って、実際に全権を委任しました。つまりもうお任せしたんです。それは根本的に先生たちを信頼しているからです。そういう意味で信頼して任せる。ALでいう「手放す」、手放してその人に任せる。もちろん丸投げではなくその人をずっと見守っている、かつ困っているときはい

つでも出動できるような体制をとる。だからお願いするんだけど私も一緒にやりますよというもので、「場づくり」の根本は私は信頼だと思っています。

―後田　ありがとうございます。各学校でその一言がまず管理職の先生方からきて、リーダーを担う先生が動けるスタートになればいいなと思います。学校に戻られたら、ちょっとそこを意識して言ってスタートするのもいいと思います。質問はあと1つ程度の残り時間になりました。ICTに関する質問が多かったです。ICTのメリットもわかるが、小中時代から使ってきた生徒がやってくる時代に、デメリットもわれわれは把握してそこを埋めてメリットを活用した方がいいんじゃないかという意見がありました。ICTのデメリット、今後起きてくることだと思いますが、今後われわれはどう対応していくかを考えておくべきかと思います。そこでICTのデメリット、それからそこに対してこれから対応できることを教えていただけますか。

―下町　デメリットは当然ありますね。使い方によってメリットを生かせるし、使い方によってデメリット満載になってしまうということかと思います。議論の方向的には、どういう活動にどういう使い方をするのか、ということがまずありますよね。ICTの機器自体のメリット・デメリットではなく、使う流れの中でのことですよね。でもこれは昔から議論しつくされた感があって、1980年代、1990年代は例えば報酬や罰則としてICTを使わせてはいけないとか、電磁波の問題で長時間PCに向かわせてはいけないとか、それから使う必要のないアクティビティに使ってはいけないとか、これらはみな20世紀の議論ですが、それが今でも出てくるというのがちょっとね。もっと中味が進化していかなきゃならないと思うんですよね。ただ、当時と違うのはネットワークのツールとしてICTがフォーカスされているということ、つまり、むしろ個別最適な学びというよりも協働的学びを促進するツールとしての価値について語られていることは注目すべきことなのかなと思います。

―和田　ICT活用推進するときのデメリットを福岡大学の授業でもやったんです。学生から圧倒的に出たのは「関係ない動画を見る、というデメリットが起こる」というものでした。「そこへどういうふうに対応する、対策する？」と言ったら、学生から圧倒的に出たのは「禁止」(笑)。生徒が見ている画面を全部先生が見られるようにして先生がチェックすればいいとか、ブロックするとかで、先生としてそんなことに教室でのエネルギーを使いたくないよ(笑)。「昔から、授業中によそ見をしている、他のことを考えている、そういう生徒は必ずいるよ。あなたたちもそうだったじゃない？　あとマンガを読んでいた生徒もいたと思う。人の頭の中まで管理することはできんよ」と。さらに「ブロックや禁止をしたら、見たい動画まで見られなくなるよ」と言いました。「そうやって生徒が関係ない動画を見るというのは、授業がつまらんからよ」と。だから生徒の関心を引く魅力的授業、面白い授業をやっていたら生徒にそんなヒマはないと思う。もちろんその日の体調によって全然乗ってこない生徒もいるだろうけど、一番根本の解決は、見せない・禁止・ブロックではなくて、そもそも余計な動画を見るヒマを与えない授業をつくるのが先決じゃないか、と話しました。禁止することは簡単ですが、禁止することで「見ない、しない」ということにしたら、禁止のコミュニティを離れたら、じゃあやってしまうのか。つまり、禁止することよりも、それをしていいのかどうかの判断ができるデジタルシチズンシップの育成が大事だ

と思います。それで私は失敗させて体験させるというのもありだと思っています。西陵高校でも生徒が関係ないものをいっぱい見るので、禁止した時期もありました。ただそれは先生が禁止するのではなく、生徒会の中から自分たちで浄化しようという動きが起きたので、じゃあ生徒会の皆さんに任せます、というものでした。禁止することよりも判断力をつける、それがいわゆる「思考力、判断力、表現力の育成」にもなるんじゃないかと思います。そこからどうしても出てくるデメリットはデメリットで、逆転の発想をする必要があるんじゃないかと思います。

一後田 ありがとうございます。先ほどの学校の組織づくりのところにも関連しますね。本校生徒もサーフェスを一台ずつ持っているんですが、夏に自主学習会をすることがあって、その自主学習会には、勉強をせずに遊んでしまう生徒がいるかもしれないからという理由で、サーフェスは教室に持ち込み禁止になりました。20人ほどの先生が集まった結果が、なんで禁止になるのか。これが学校のICTを取り入れる発展途上の段階なのかと感じたところでした。学校組織の話とも関連するところだと思いました。では時間となりました。われわれ3人でひとことずつ感想をお伝えして終わりたいと思います。

ではまず私からですみません。コロナ禍でICTが進化したという話がずっと出ていますが、コロナ禍で発達したのはどちらかという人と人が直接接しなくて済むICTであって、学校が生徒の幸福度を上げる場であるなら、終着点ではなくてここに協働的な学びをいかにしっかり入れる。たぶんICTで個別に学びたいことを学んだら教室は静まり返って黙々と勉強する教室になるかもしれない。でもこれは到着点ではないと思います。今日お話を聞いてこのように思いました。ICT探究を学ぶよいきっかけになりました。本日はどうもありがとうございました。

一下町 さっきの和田先生と後田先生の話聞いて、老子の「法令(ほうれい)滋滋(ますます)彰(あきら)かにして盜賊(とうぞく)多(おお)く有(あ)り」という言葉を思いました。私のような、特に地方公務員は地方公務員法という「禁止・義務・制限」の中で生きています。そこでどうしてもつい生徒にも「禁止・義務・制限」を強いてしまう。そういう方向ではなくてSNSでも先生と生徒の両方が入ったコミュニティをつくって、その中でリテラシーやモラルなどを育ていくことが大事じゃないかと思います。先生は生徒に「それはあかん」って言うっておきながら、その中身を知らないわけなんです。知らない人から何を言われたって、それは効かないですよ。そんなこともひとつ思いました。

あと幸せの話にも出たんですが、和田先生がなんでこんなにアクティブでいろんなことをやられているのかというと、たたずまいが幸せだからなんです。私は白百合学園で祈りをしてるんですが、「いつも喜んでいなさい、たえず祈りなさい、どんなときにも感謝しなさい」テサロニケの信徒への手紙（新約聖書）というのがあります。この中の「いつも喜んでいなさい」という言葉はすごく大事で、幸せなことがあるから喜ぶんじゃなくて、喜ぶことによって幸せになっていく、ということ。先ほど和田先生が言った逆転の発想というのがすごく大事だと今日は思いました。

一和田 今回の禁止事項の話ですが、先生とか生徒とかに関係なく、自分がそれをされたらどんな気持ちになるかというのが大事なんじゃないかと思います。ICT って結局生徒たちの学びの中にコンピュータが入ってきたことだと思うんですよ。大人は仕事をするのにコンピュータなしには仕事できません、だけど生徒が学ぶときには使うな、使うな、と。それっておかしいんじゃないの。じゃあ例えば校長先生が職員に「一週間コンピュータは禁止です」って言ったらどうですか？ 皆さん、「そんなことはありえんっ！」と思いませんか？ 発達段階で制限しなくちゃならないことはあるけれど、基本的に大人も子どもも変わらない、受け止め方は変わらない。そこを大人の自分がそれをされたらどうなのか。それを基準に考えることが大事になると今日のお話を聞きながら思いました。どうもありがとうございました。

(終わり)

教育改革推進フォーラム長崎 Session2

【テーマ】 SDGs 時代における学校変容と学校文化に広がる学校改革の進め方
～新渡戸文化中学校・高等学校の実践・成果・課題～

新渡戸文化高等学校 副校長

(一社) Think the Earth

山藤 旅聞 先生

SDGs 時代における学校変容と学校文化に広がる学校改革の進め方
～新渡戸文化中高における実践・成果・課題～

はじめに

- 1 成果と課題
- 2 時代に合う教育を全職員で「定義」する
- 3 事例-1 「今までの延長線にない教育」
- 4 事例-2 大切にしていること

.....

質疑応答

SDGs 時代における学校変容と学校文化に広がる学校改革の進め方 [オンライン]

～新渡戸文化中高における実践・成果・課題～

新渡戸文化高等学校 副校長 / (一社) Think the Earth

山藤 旅聞

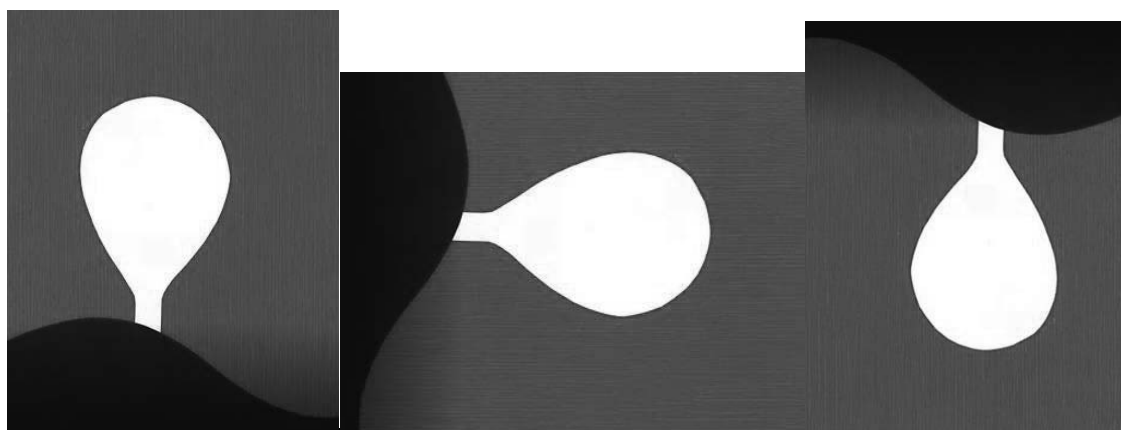
はじめに

参加者の皆さん、どうぞよろしくお願ひします。画面共有をしながら進めたいと思います。

いただいたテーマがこのような大々的なテーマなのですが、これについては途中で詳細をお話ししたいと思います。実は本校は定員割れをしていたのですが、この 2 年間で定員が戻り、今年の学校説明会の動員を見ると、去年に比べて 1.5 倍から 2 倍弱の動員ということで、認知をされて変化している最中の学校です。

でも、本校は非常に大きなことを成し遂げたとか、ものすごく進んでいる学校だということではなく、日々もがきながら全職員で頭を悩ませながらの日常です。こういう時代、SDGs 時代をはじめ、気候変動とか人口減少とか、世界的にも日本的にも「新しいフェーズに時代が入っていく中での学校とは？」といったことを考えている一例にすぎません。なので、参加者の皆さんからもたくさんご意見や、コメントをいただきたいと思います。ぜひご協力お願いします。

まずはチャットの練習をします。ぼくはオンラインは苦手で、リアルに勝るものはないとこの数年で実感しています。学校もオンラインに切り替えることもあります。私自身はリアルが好きなタイプです。一方でオンラインの強みはこのチャット、つぶやきの部分だと考えています。ですから、ぜひチャットでご協力いただけたらと思っています。



さて、こういう時代だからこそ「どういうふうに学校を変容させようか」とか、「どういうふうに学校全体の文化に広げていくのか」、日々活動している実践の一部をご紹介します。本日は下記の4つの話をしたいと思っています。

- 1 成果と課題
- 2 時代に合う教育を全職員で「定義」する
- 3 事例-1 「今までの延長線にない教育」
- 4 事例-2 大切にしていること

1 成果と課題

本校はもうすぐ100年の伝統ある学校ですが、中学校と高校で定員割れを起こしていました。時代のニーズに合っていなかったというのが率直な、素直な答えです。いわゆる偏差値教育に乗り切れず、大学進学実績で大きな成果をあげてこられなかった。もしくはそうではないオルタナティブ教育としては認知されなかった。このどちらかだと考えています。もともと女子校だったのを共学に変えたりしていろいろと凌いできましたが、高校は定員100人のところ30人という時代があったり、中学校は60人定員のところ10数名という時代だったり、かなり低迷した時期を抱えていました。理事長が変わるというタイミングをもって、「このままずるずると既存の教育をしてもしかたがない」ということで、これからの時代に一石を投げられるような学校にトランスフォームしよう、一緒につくっていこうじゃないかと、ご縁をいただきました。私自身は4年前に移籍し、1年間の準備期間を経て、中学校は3年前から、高校は2年前から大きな変容をさせてきました。結果的に今年度（2022年度）で定員割れを克服できました。取り組んできたことは脱偏差値教育、そして自律と探究を軸にしてきました。とても完成はしていませんが、ここを必死にやっているところです。そうしたら、先月『AERA』に本校が登場しました。もしかしたら見かけてくださった方もいらっしゃるかもしれませんが、総合型選抜の特集が組まれ、そこに新渡戸文化高等学校が載っていました、「オール3から難関大続々の新渡戸文化」（スライド3）。こういうことを考えていませんでしたし、先ほど言ったように難関校、偏差値の高い大学に生徒をどんどん送るというチャレンジをまったくしたわけじゃなく、むしろオルタナ教育をめざしていた結果、難関校と言われる大学に受かる生徒たちも現れてきたというのが実情で、合格のために補講をしたとか、夏期講習をしたとか、授業でガンガンとドリルで『ドラゴン桜』をしたとか、まったくそういうことではないのです。しかし、これが世の中の実状かなと偏差値の高い大学に受かると注目されるという、これが世の中の実状かなとモヤモヤしていますが、発信は続けていこうと思っています。これも1つの成果と課題だと考えています。

(スライド3)



実際にやってきたことは『AERA』の記事には書かれています。(スライド4)、中吊りではあいうふうに見出しに「オール3から難関大学」と出ちゃいました。紙面にあるように新渡戸文化高校の取り組みは、いかに進路と自分のやりたいことを重ねるか、ということをはたすらやっていました。探究だとか、自分たちで考え自分たちで行事をつくっていくことを学校教育のど真ん中に置いて、進路も自分が好きなことや、やってきたことを共感してもらったり、マッチングをはかって総合型選抜に思いっきり舵をきっています。ですから生徒にも保護者にも本校は総合型選抜を目指す、総合型選抜に強い、3年間の努力を出せる、やってきたことがそのまま総合型選抜で表現できることを目指しますと、言っています。一般受験で乗り越えていくということは目指しませんとは言いませんが、そちらにあまりエネルギーはかけませんということで進めています。もちろん、一般受験を目指す生徒にも対応はしております。

(スライド4)



その結果、この数年で、私学になりますが医学部、歯学部はじめ、美大などさまざまな分野の大学に進学する生徒が増えてきました。そして去年と今年の大学志望動向をみると、リベラルアーツ系、それから地方創生、地方イノベーション、サティスフィナビリティだとか、そういう学科を希望する生徒が他の学校よりもちょっと多いのかもしれないという雰囲気になっています。一番うれしいのは進路満足度です。これは偏差値の高い大学に受かってうれしいというのではなく、「自分が好きでやりたいことと進路が重なりました」と。ほとんどの生徒が総合型選抜で合格していますが、総合型選抜によってマッチングしましたと生徒たちが答えてくれた結果が、卒業生の進路満足度 97%につながったのだと思います。(2021 年度卒・高 3)

では、ここからまた皆さんと一緒に考えていきたいと思います。いったい私たち全職員が何を本気で話し合ってきたのか。非常勤の先生方も、また今年度からは大学のインターン生も一緒です。そして管理職も一緒に皆で話し合ってきたこと、この 4 年間ずっと話し合ってきて、これからも話し合っていくことを今から少し皆さんとも話し合いたいと思います。

それはまず、大前提で「価値観が変わる」ということを全職員で腹落ちした、納得したということです。スライドはニューヨーク 5 番街の 1900 年のイースターパレードの様子です。これは結構有名な写真で、ほとんどが馬車ですが 1 台だけ自動車が走っています。これがたった 10 年で変わります。石油革命が起きて、1913 年の写真では馬車はたった 1 台となりほとんどが自動車に変わりました。つまり、免許で言えば 10 年前は馬車に乗る免許が必要だったのが、10 年後には自動車に乗る免許に変わったという、必要となるスキルが変わるというよい事例です。これからの時代はこういった時代である、ということをもまず全職員で確認しました。ここは皆さんにも共感いただけたと思います。10 年サイクルで大きく世の中が変わっていく時代です。例えば気候変動で言うと、10 年前までは「CO2 削減」ということでしたが今は完全に「脱炭素」です。企業では「ゼロミッション」と言っています。CO2 排出は削減という時代ではなくなり、土でゼロ、もしくはマイナスにしていかなきゃいけない。そういう時代に価値観は変わりました。さらにこのコロナで考え方や価値観が変わってきていると思います。本当に 10 年で物差しは変るということを確認しています。

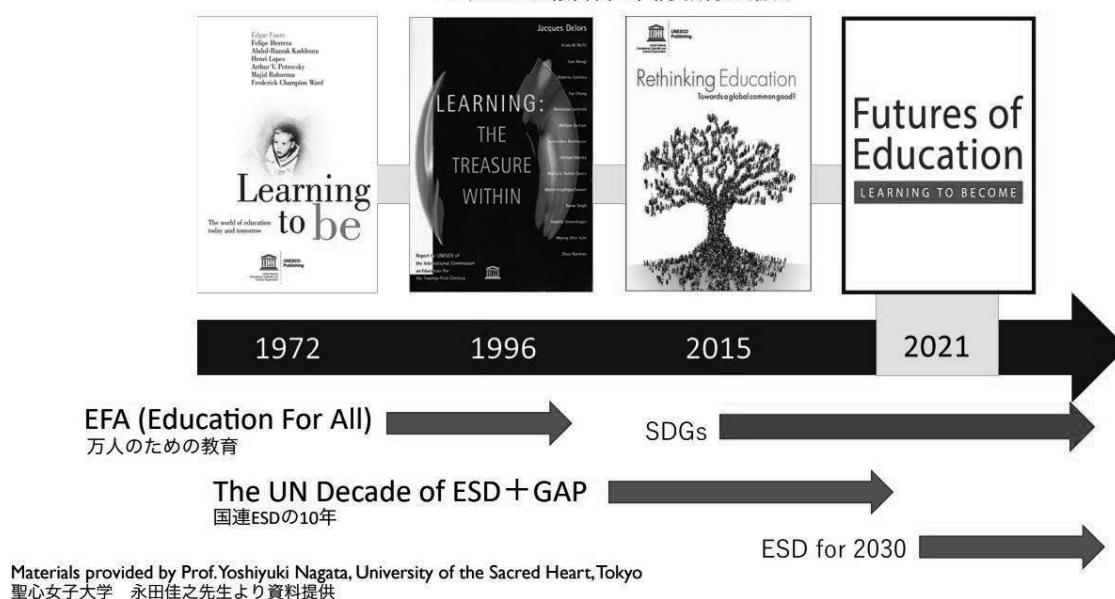
ですから、これまでの「当たり前」は変わる時代です、そうなったときに先ほどの馬車と自動車のように、学校ではいまだに馬車の乗り方を教えているのではないか、自動車の乗り方を教える教育に切り替わっているのか。もしくは 10 年後はもう自動車ではないものになってしまうのかもしれない。ドローンによる空中自動車のようなことになっていくのかもしれない。無人のクルマが動き、自動運転が盛んになったときに今の免許という形態がまた変わるのかもしれない。そういうことをちゃんと考えられているのかということを、「当たり前は変わる時代、今までの延長で教育（学校）はいいのか」と真剣に議論しています。

そこを支えてくれるのはユネスコの教育に関するレポートです。だいたい 20 年に 1 度くらい更新されて、ここ最近は頻繁です。2015 年、2021 年は 11 月でこれは非常に革新的でした（スライド 7）。

(スライド 7)

UNESCO's Report and Trends in International Education

ユネスコの報告書と国際教育の潮流

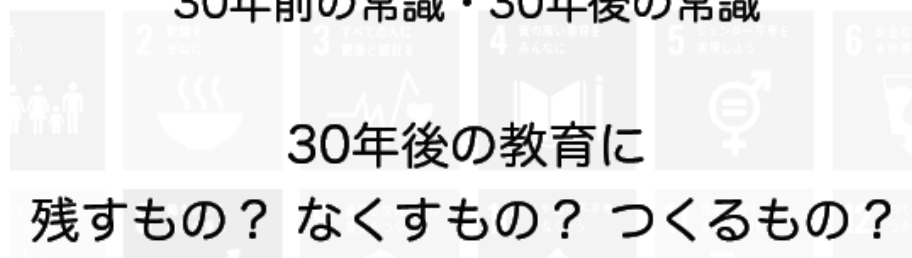


そしてまったくこのレポートと同じことを実はわれわれはやっていました。何をしていたかということですが、ぼくは教員 18 年目ですが、ぼくが教員になったときスマホはありませんでした。途中でスマホが入ってきました。でもしばらく触ってなかったんです。でも今はスマホと iPad の 2 つのデバイスが当たり前の状態で授業が展開されていて、ホントに 10 年ぐらいでどんどん変わっていると思います。

そこで皆さんと一緒に考えたいのは、「30 年後の当たり前」です。「30 年後の教育に残すもの、なくすもの、つくるもの」をみなさんと一緒に考えていきたいです。(スライド 8)。

(スライド 8)

30年前の常識・30年後の常識



答えはありませんし、30 年後なので何が正解になるのか本当にわかりません。だから皆さんと一緒に考えたいです。

ではまず「30年後の教育に残した方がいいもの」。

今までの日本の教育の中で30年後もしっかり残した方がいいよねと思うものを2つ、3つとチャットに入れていただけませんか。どうぞよろしくお願いします。これをぼくらの学校では全職員で考えてやっています。残さなきゃいけないものは何か、なくさなきゃいけないものは何か、つくんなきゃいけないものは何か、とディスカッションしています。8月30日に校内研修を予定しているんですが、皆さんからいただく意見を活用させていただきたいと思っています。ぜひいろいろと記入していただきたいと思います。

まず①「残すもの」「残した方がいいもの」です。「体育祭」「文化祭」、ぼくも賛成です、生徒たちがフロー状態になって自律のきっかけをつかむ、とてもすばらしい教育活動ですね。「こういう時代だからこそ文学」、言語化するのは、スライドはさっとできても600字、800字、1000字、2000字書くというのは結構時間がかかるんです。これが大事なのかと私も思います。「修学旅行」、これは無くせないよね。それから「歴史教育」、私もこの夏はじめて沖縄に行き、独立問題、基地問題、そこに取り組む方々の一次情報を伺いながらしっかり向き合ってきました。いまでも遺骨収集されている方もいてその手伝いもしました。歴史教育は非常に重要ですよね。「地域との協働イベント」「リアルな教室」、これは学校外に出ていく活動でしょうね。「実験」、ぼくも理科の教員なので実験はやはり大事だと感じています。実はぼくはオール実験で授業をやっています。「倫理」「哲学」、人生を考える教育が今はあって、残していきたいということですね。

ではここからは②「30年後の教育には、学校にはなくてもいいじゃないか」と思えるものについてです。

これにも答えはないので、他の方のコメントへの批判ではなく、そういう考え方もあるんだと受けて皆さんと共有していきたいと思います。自由に打ち込んでください。「評定、評価」、ぼくらの学校も評定に関しては、相当に議論しています。学習指導要領に文科省から三観点からの評価も導入されましたね。僕らの学校でもどうとらえるかについて議論している最中です。もし本校がどうとらえているかについてご興味あれば後でご質問でお送りください。「学年制」「形式的な入学式や卒業式」「クラスという単位」、本校の中学校は60人で2クラス展開ですが、それをクラスという概念を無くそうとして学期ごとにシャッフルするということをチャレンジ中です。そして今後は高校1年生にもこれを実施しようかと話し合っています。「一律の宿題」、ほんとですよ。

「アートのような校舎」、これもすごく共感できますね。本校は全ての教室にプロジェクター、ホワイトボード、アップルTVがついてちょっと近代的な教室が展開されているんですが、地方の廃校に入らせてもらったら、ザ・学校って感じでした。一方に黒板があって後ろにロッカーがあって、木製で。子どもたちが「こういう校舎の方が落ち着く」って言っていたのを今、思い出しました。「アパートのような校舎」、これはもしかしたらオンラインやWi-Fiなども使いながらですが、学び舎というものがなくなるのかもね、という思いも含まれているのかもしれないね。

「服装検査」、賛成ですね。制服そのものはあってもいいんですが、日常必ず着なくてもいいんじゃないかということで生徒と話しているところです。「学年一律に行く修学旅行」、これはわれわれがちょうどトランスフォームにチャレンジしています。

では最後に③「つくるもの」です。

今は無くてもあったらいいんじゃないかなと思われるものがあつたらコメントを送っていただけないでしょうか。「不登校の生徒を受け入れるシステムや施設」、いやほんとそうですね。全員に学び舎を保障しなきゃいけないわけで、このオンラインシステムなども使いながら仕組みがつかれそうですね。学校に行くのは嫌だけど学びはできるとか、われわれとは対面で「ワン オン ワン」でミーティングができるとか、大事なことだと思います。「年齢に関係なく学べる」「メンター制度」、もしかしたら大学生や社会の地域の人がメンターとなるのもあっていいかもしれませんね。「単位互換」、これはだんだんと始まりましたよね。本校も総合型選抜でがんばっていると話しましたが、大学の先生方と連携しているのは本校でやっている活動、修学旅行などを単位互換できませんか、というものです。実は産業能率大学とも連携を始めていまして、産業能率大学にはインターン制度という単位があるんですね。インターンに行くと単位が修得できるという仕組みです。また高校でやっていたことを大学に進学したら単位互換されていく。そんなシステムがいいんじゃないかということですね。「教員のFA 制度」、これおもしろいですね。いろんな地域でいろんな学校で教師をやりたいですね。公立学校の定期異動ではなく、自治体も変えながらやりたいですね。皆さん、どうもありがとうございます、すごく楽しい、ワクワクする時間になりました。

こういったことを全職員で話し合っ、では今年度はどれを採用しようか、力をいれようか、これをやりたい人はボールを持ってどんどん進んでいきましょう、ということをこの3年間やってきています。

ちなみにスライド9は本校の生徒と、一部 ASEAN の学生にアンケートを取ったものから集めたキーワードです。アンケートの対象者は去年の本校の高校1年、2年、3年生とそれに相当する ASEAN の生徒たちの声です。先ほどと同じ3項目について尋ねました（スライド9）。

（スライド9）

事前アンケート回答のキーワード

残すもの	なくすもの	つくるもの
教師と生徒の信頼関係	教師が生徒より秀でているという考え方	生徒が興味のあることを探求する自由教育
義務教育	旧態依然とした教育制度、時代にそぐわない教材	生徒が自主的に学び自分の先生である教育
理論と実践のバランス	成績優先主義、順位付け、試験	学びを楽しくするインタラクティブな手法
倫理教育	反復教育	生徒一人一人の個性を尊重する個別教育
一人一人の個性の尊重	生徒が環境に適応できることへの教師の信頼	ロールプレイング（歴史上人物等）
包括性（Inclusive）な教育	教師と生徒の相互理解の欠如	性格分析（ジョハリの窓など）
学校の安全確保	教員と生徒の数のアンバランス	インターンを通じた社会的成果物の創造
親の教育	試験、成績重視主義	高校（生活のスキル学習含む）と大学の長所の統合
生徒の学びの有り方を問い続ける	教育のコスト、学年	VR、AI技術
フィールド（実地）体験教育	ヒエラルキーといじめ	地域の産業特性（漁業など）に合わせた教育
歴史教育	IT等家庭でも学べるようになった技術教育	STEM教育
科学・数学、STEM教育	全員共通の同一教育の提供	生徒は目標、中間報告、最終報告だけにする
大学のような学び場の提供	学校教育の閉鎖感、社会との接点の少なさ	地域間、企業間、産官学の交流促進
自発性を重視した教育	大人数の授業	少人数で意見交換できる教育
わくわくした気持ちの提供	正解を求めるテスト	生徒の熱中する教育
教師と生徒の双方向のコミュニケーション	大学の必須教科制度	教育の多様な選択肢の提供
学問の本質、学ぶ楽しさの尊重	ダイバーシティの過度な強調	コーチング、ファシリテーション
学ぶ楽しさ	学校の垣根	TYCAのような学校間、国家間のつながる場所、世代間のつながり

いかがでしょうか皆さん。国を超えて共通したものがあります。このまとめは私ではなく、事前に、アンケートを取った後に、とあるセミナーを企画されていた事務局の方がまとめてくれました。ですから私のバイアスが入っていない状態です。アンケートでは 100 名弱の生徒に聞いて回答が多かったものをまとめてくださったものであると聞いております。

「残すもの」には「義務教育」、「倫理教育」、「学校の安全」、それからこの「親の教育」は日本ではなく ASEAN かもしれませんね。日本はこの辺が弱いんじゃないかと私は思っています。それから「フィールド」「歴史教育」などがあります。皆さんと一緒にでしたね。

「なくすもの」は、「教師が生徒より秀でているという考え方」「旧態依然とした教育制度、時代にそぐわない教材」「成績優先主義」「反復教育」「正解を求めるテスト」「大人数の授業」などなど、生徒たちはこれらを止めてくれと言っています。

そして「つくるもの」は、私たちも結構参考にさせてもらっています。「生徒が興味あることを探究する自由教育」そして、生徒の自主性を尊重するような時間、インタラクティブな時間、個性を尊重してほしい、などなどという感じですね。また「コーチング、ファシリテーション」などが今の生徒たちから求められています。

皆さんはこの ASEAN を含む 15 歳、16 歳、17 歳のコメントを見て、思うことや違和感などがあればチャットに入れていただけると嬉しいです。

「性格分析」、これはもしかしたら自分が好きなことは何なのかをじっくり考える時間がほしいということかもしれませんね。探究や地域に貢献していこうということを考えると、自分は何が得意なのか、自分は何が好きなのか、ということがほんと大事になってきますよね。そう私は思っているんです。コメントをありがとうございます。では思うことがあれば、この後も引き続きコメントをお送りください。あと 20 分程度なのでいったん先に進みます。

先ほどのユネスコが出していた教育に関するレポート 2021（スライド 7）を読んだときに、書かれていたものの一部がこちらです。「生徒が求めているこれからの教育」がまとめられていました。日本語は私の訳が間違えているかもしれませんので、原書の英文をご覧ください（スライド 10）。

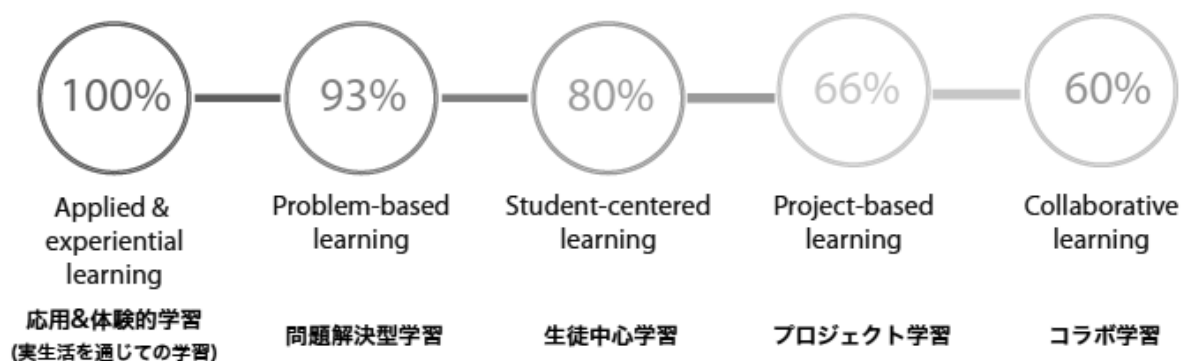
(スライド 10)

Learning that Students are Looking for

生徒が求めている学び

Figure 3: Learner-Centered Pedagogies and Practices Recommended by Students

Percentage of countries where the practice was mentioned at least once



UNESCO The Futures of Education, November 2021

実は一番左の「Applied & experiential learning」をどのように訳していいのかわからなくて、直訳だと「応用&体験的学習」ですが、私の中ではもしかしたら「実生活を通じての学習」。学んだことを実生活に活かすというか、学んだことを実際に活かすことができる教育なのか、と思っています。間違えていたらごめんなさい。それからよく言われる「Project-based learning」がありますね。それから「Student-centered learning」という言葉があるみたいですね。そして「Problem-based learning」。私は「Project-based learning」に力を入れているつもりだったので、数値の 66%を見て頭をもっとトランスフォームしないといけないなと感じました。そして「Collaborative learning」、これはおそらく学校と地域や、学校だけではやらないコラボ授業だと思います。この 5 点がトップ 5 です。これはユネスコがまとめたものなので対象は世界です、世界の小・中・高生が求めている学びです。

2 時代に合う教育を全職員で「定義」する

というわけで、これらが最初の課題で、学校に広げていくために定義していくという作業を全職員で、まじめにやっています。そこで「これからの時代を幸せに生きていく大人とは?」、これは今年の 4 月にやった研修タイトル (スライド 12) です。非常勤の先生方も管理職も大学生インターンも一緒になってグループに分かれて書きだしていきました。レゴブロックなども使いました。皆さんはこの問いをどう思われますか?

(スライド 12)

Q これからの時代を幸せに生きていく大人とは？



「これからの時代を幸せに生きていく大人とは、どんな大人なのか？」について皆さんにコメントいただいてもいいですか？「学び続けられる人」、共感いたします。「ゆとりをつくれる人」、深いですね、これはさらにコメントを聞いてみたいです。「自分を大切にできる人」、持続可能な働き方ができるか、ということと関係ありそうですね、「自分がやりたいことを見つけられている人」「他人を喜ばせられる人」、なんか素敵ですね。「利他的な思いで活動できる方」「モチベーションを高く維持できる人」「自分と他人の差異を受容できる」、寛容で多様性社会を言う人かもしれませんね。「変化を楽しめる人」「人間関係を築ける人」「年齢を問わない」、皆さんどうもありがとうございます。今日の内容をわれわれの職員研修で共有させてください。私の中にはなかったキーワードもあり、なるほどなと思いました。

私たちの学校では「自律」という言葉をキーワードとし、「自分で考え、判断し、行動できる」を全員の大きな共通認識として合意形成しました。

次に「自分で判断・ジャッジできる大人はどんな力を持っている人なのか」をさらに分解していき、図の6つの能力を持つ人ではないかとなりました（スライド14）。

そして、生徒たちにこの6つの力を身につけてもらえるような教育を中高6年間やっていこう、そして自分なりに進めた活動がもう一人の誰かを幸せにできるかどうか、ということも意識してもらおう、それが学校教育である、とわれわれは定義しました。

自分で考えて、判断して、行動できるけど、その行動が自分ではない誰か人のためになるように、これを本校なりの探究として言語化し、授業にあたっています。

(スライド 14)

「自律」に必要な力とは？



その後もさらに大事だと思っていて、「自律」を定義しようということになりました。ここは宿題となり、それぞれが何かしらのエビデンスだったり、言葉で共有しあおうとして、その結果、皆が腹落ちしたのが次のスライド 15 です。

生涯学習社会におけるロジャー・ハートの「子どもの参画」理論です。主体性を 8 段階にまとめたものです。そして私たちは 6、7、8 段階目を「自律」と定義しました。例えば行事を大人が設定したとしても、最後の意思決定は生徒たち。体育祭をやるかやらないかの最終判断は、生徒たちに委ねます。それから生徒たちが誰からも言われなくて、自分たちで何かの活動をしていたら褒める、応援する。さらに地域や私たちが巻き込まれるような活動になっていたら、それには大いに巻き込まれよう。そういったことを全職員で確認し、高校から入学する生徒もいるので、3 年間で 1 回はこういう経験ができるような教育をしていきたいよねと、話し合ってきました。そして全職員がここまで腹落ちした状態で語れる、という状態までできました。

(スライド 15)



昨年あたりからの総合型選抜で、自分のやりたいことと進路をマッチングさせている生徒もだいぶ出てきたので、ロールモデルとなる生徒、将来も幸せに生きていく自律した生徒ってどんな姿なのか、というモデルも共有できるようになってきました。「目指す生徒像の共有」では、私たちは今は次の状態にいます。とりあえずの MARCH 合格や、とりあえずの国公立合格ではなく、自分の人生のきっかけになるような大人に出会えているとか、大学進学後も深めたい学びのきっかけとなる原体験を持っているとか、高校時代に1度はプロジェクトを起こしているとか、そのプロジェクトは企業と連携しておこなっているとか、さらに中学からの6年間でコンテストに応募している、こういったことを全員がやっている、というふうに教育していきましょう、とようやく改革3年目でこういった言葉にできるようになりました。

今年度一番力を入れているのはこれです。「新渡戸で身につく学力とは?」。学力を自分たちでちゃんと定義しようとしています。国語・数学・英語の代表先生と、進路主任の先生と私、管理職で定義をしていて、定例でミーティングをしてやっています。学力は全教科で目線を合わせていく必要があるので、まずは叩き台をつくるためにこのメンバーでやっています。これも長い議論になると思いますが、今、本校で出している学力の定義には、偏差値や模試や外部模試で点数を上げるという言葉は一切排除、このメンバーからは出てこない状況になっています。「楽しめる」とか「広げられる」とか、「今まで自分ができないと思っていたことをそれは勘違いだと思えるような力」、そういう言葉になっています。

経済産業省が今年（2022年）の4月に出した『未来人材ビジョン』レポート（スライド19）をご存知でしょうか。次のように言われています。

（スライド19）

**現在は「注意深さ・ミスがないこと」、「責任感・まじめさ」が重視されるが、
将来は「問題発見力」、「的確な予測」、「革新性」が一層求められる。**

56の能力等に対する需要

2015年		2050年	
注意深さ・ミスがないこと	1.14	問題発見力	1.52
責任感・まじめさ	1.13	的確な予測	1.25
信頼感・誠実さ	1.12	革新性※	1.19
基本機能（読み、書き、計算、等）	1.11	的確な決定	1.12
スピード	1.10	情報収集	1.11
柔軟性	1.10	客観視	1.11
社会常識・マナー	1.10	コンピュータスキル	1.09
粘り強さ	1.09	言語スキル：口頭	1.08
基礎スキル※	1.09	科学・技術	1.07
意欲積極性	1.09	柔軟性	1.07
⋮	⋮	⋮	⋮

※基礎スキル：広く様々なことを、正確に、早くできるスキル

※革新性：新たなモノ、サービス、方法等を作り出す能力

（注）各職種で求められるスキル・能力の需要度を表す係数は、56項目の平均が1.0、標準偏差が0.1になるように調整している。

（出典）2015年は労働政策研究・研修機構「職務構造に関する研究Ⅱ」、2050年は同研究に加えて、World Economic Forum “The future of jobs report 2020”、Hasan Bakhtshi et al., “The future of skills: Employment in 2030”等を基に、経済産業省が能力等の需要の伸びを推計。

20

かつてのように、子どもたちを社会が求める人材にする必要はないと思います。ご批判もあるとは思いますが。参考までにですが。今までは注意深さ、ミスがない、まじめさ、誠実さ、読み書き、そろばん、この辺りが求められていました。ところが未来型では、問題発見能力、的確な予想能力、ゼロイチのアクションが起こせるかどうか、こういう能力が求められますよというレポートも出てきています。

そこで本当にこれからの時代に必要な学力とは何なのかという議論をし続けて、これを現在進行形でやっています。このテーマについて、何かひらめくものがあればコメントをお送りください。われわれの研修会で、全国の先生からこんな言葉をいただきましたと共有させていただきたいです。では話を先に進めます。

3 事例-1 「今までの延長線にない教育」

これから事例を2つ紹介します。まずは「今までの延長線にない教育」です。チャットでどなたかが書いてくださった「学年一律に行く修学旅行はもういらないんじゃないか」、そして一方では「修学旅行は残したい」というコメントと私たちもまったく同じ考え方です。そこでやったのは、全国数十か所から自分たちで行きたいところ、したいことを選ぶ修学旅行に変えました（スライド21）。

（スライド21）

パートナーシップエリア



特長は、一つのエリアには5人～10人しか行かない、大きくしないということです。時期も5つの中（6月、8月、11月、12月、3月）から最大2回選べます。また行かない選択もできます。例えば高校1年生で2回、高校2年生で2回、1人が4回行けます。積立金は25万円集めています。都立高校の海外研修をしている学校が30万円を積み立てているので、それ以上にな

らないようにと、海外に行くよりは安く、少人数制で複数エリア複数時期選べて、1人最大4回行けるように組んでいます。さらに1回経験した生徒は自分たちでスタディツアーをつくるのもありだという形で、修学旅行をトランスフォームしています。

修学旅行は何でもいいのではなく、私たちは一つのキーワードを持って実践しています。例えば宮崎県では人口減少によって廃校となった高校の視察、地元自治体・社長さん方とのコミュニケーション、生産現場の取材、高齢者にICTを教えている場面のサポート、そして大自然の堪能です。

次は今年の8月のスタディツアーでしたが、漁村に行き実際の漁に出て、市場に行き、売れ残った魚である未流通魚をさばいて食べる、基本がこれだけのスタディツアーです。そして衣食住や水やインフラの当たり前を見直そうということで、敢えてテント泊もしました。これは希望制で古民家に泊まる選択もできるし、テント泊もできます。過半数がテントを希望しました。大自然が身近で夜空には土星の光輪が見えて、私も本当に感動しました。ちなみに、土星の環が見えたときは、皆が「わっ」って言うんですね、皆で感動しました。

ということで、実は修学旅行のテーマは、「人口減少」「気候変動」「食料自給率」「エネルギー」といったキーワードで実施しています。ですから生徒たちが自分でスタディツアーをつくる時もこれらのキーワードを学ぶための、考えるための修学旅行として提案して、受理されればそれを実施していいと考えています。この夏も高校生たちが、「復興」「古民家」「人口減少」のキーワードで石巻のスタディツアーをつくりました。

次（スライド23）はちょっとしたエビデンスですが、「学習意欲を高めるのは大人の存在」ということで、学ぶ楽しさを教えてくれたとか、将来目標となる大人に出会う、尊敬できる大人に出会うというのが、生徒の学ぶ意欲を高めることと相関があるというデータが出ています。

（スライド23）

学習意欲を高める「大人の存在」

表中の数字は、学習意欲と関係性の強さを表す指数、相関係数

1	勉強の面白さを教えてくれた大人の数	0.2902
2	将来目標にしている大人の数	0.2610
3	尊敬できる大人の数	0.2573
4	相談できる友人の数	0.2465
5	友人の数	0.2266
6	親友の数	0.2235
7	所属しているグループの数	0.2224
8	異性の友人の数	0.2164
9	近所で挨拶をしたり、会話をする大人の数	0.1895
10	日常的に連絡をとる家族・親族の数	0.1581

大阪大学大学院 志水宏吉教授
全国学力テストにおける地域間の学力格差に関する研究

スタディツアーは少人数制にしているので、地元の多くの素敵な大人と出会う場となっています。

もうひとつ皆さんにお伝えしたい本校がすでに実施していることは、毎週水曜日は時間割を全部なくして、「Cross Curriculum」として1時間目から6時間目までをフリーにしています。何をやってもいいことにしています。毎週、「水曜日は何をやる？どうする？」と私たちは生徒に問いかけ続けて、生徒たちが自分で判断して行動する曜日をつくっています。この水曜日は全職員もインターン生も出勤日で、できるだけ多くの大人が生徒と一緒に伴走できる仕掛けをつくり、生徒はここで探究活動、プロジェクト活動をおこなっています（スライド24）。

今、たくさんのプロジェクトが生まれています。そのプロジェクトの定義ですが、必ず学校外の大人とパートナーシップを組みなさい、そしてアウトプットは、最低文化祭。そこで自分たちが学んできたこと、チャレンジしてきたことを第3者に伝える。あとはできるだけ外のイベントで発信しなさい、というのをプロジェクトだと位置付けています。

活動結果披露の1つですが環境フェスタの「Earth Day Tokyo 2022」において、5チームがブースで発表をしました。

（スライド24）

	月	火	水	木	金	土
朝活動	朝学習			朝学習	委員会	
1			Cross Curriculum			
2						
3						
昼					昼食	
5						
6						

NITOBE BUNKA HIGH SCHOOL

（スライド26）

プロジェクト = 学校外の大人 × 社会にアウトプット

- ①児童労働問題とフェアトレード商品
- ②FSC認証と野生動物と人間の未来
- ③ゴミという概念について
 - 古着から卒業証書・紙芝居をつくる
- ④立体絵本と人間生活と動物実験
- ⑤地域の人口減少・規格外野菜について

1つのアウトプットが終わった生徒たちに、事前事後でアンケートを取っています。それを津田塾大学と京都教育大学の先生方に解析していただき、先ほどご覧いただいた6つの能力（スライド14）がどのように向上しているのか、どの活動がどの能力を伸ばしているのか、または影響していないのか、などを分析しながら教育活動の見直しもしています。われわれは自分たちの教育活動を生徒の声をもって、大学の教育心理学的手法で解析してもらい、分析をしています。

もうひとつはおまけですが、同志社大学が出した「幸福度に関する学術研究（2022年6月改訂）」をご存知ですか。非常に気になるデータだと思います。ここには、「幸福度（wellbeing）は自己決定指標と相関がある」、つまり自分でやることを決めた回数に相関し、あとは何も相関がとれなかったというレポートになっています。学歴も年収も関係なかったと。年収については、ある年収額を超えたところから、逆にマイナスになってくるんですね。稼げば稼ぐほど幸せになるのではないということ、年収や幸福度と相関しないということのデータがとれたんですね。ということで、自分たちで決定する時間の回数を増やすほど、生徒たちの幸せ度が上昇していくということを信じて、こういうデータを信じて私たちはやっています。

4 事例-2 大切にしていること

では最後に「大切にしていること」を話します。先ほど触れましたが、私たちは毎週水曜日を「Cross Curriculum」（スライド24）と名付けて大事にしています。もちろん他の曜日、普段の授業もめちゃめちゃ大事にしていますが、本日はこの「Cross Curriculum」だけについてお話しします。

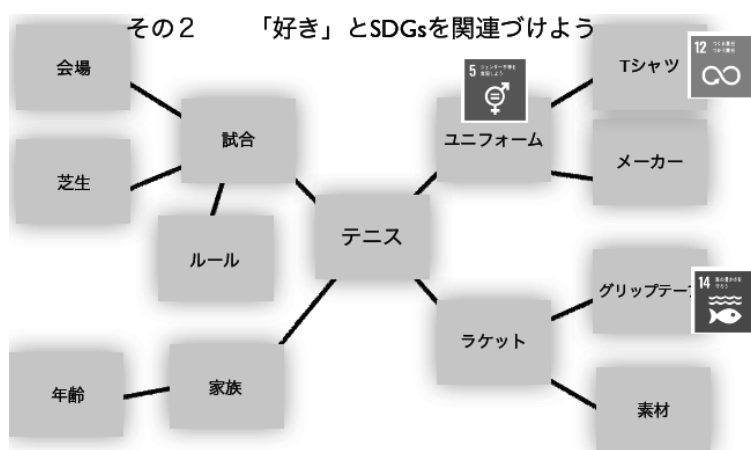
ここからいろいろなプロジェクトが生まれたことに先ほど触れましたが、ある一人の生徒について話させてください。改革1年目に高校1年生だった生徒が今年は高校3年生になりました。彼は統一したプロジェクトを3年間ずっとやり続けた生徒ですが、その内容は「戦争と向き合う」プロジェクトです。2022年6月の沖縄終戦の日に行ったプロジェクトは次の方々を招いたものでした（スライド33）。左から戦争体験者、戦場カメラマン、在日ウクライナの方々、高校生、大学生、高校生、大学生、区議会議員

（スライド33）



彼は3年前に何をしたかと言いますと、毎年やっている『みんなの「好き」から「誰かの笑顔」につなげるワークです。こちらは博報堂のみなさんと一緒に考えた教育活動をヒントに本校でアレンジした内容になっております。—その1「好き」を分解しよう』の授業です。まずは徹底的に好きなことを分解します。次に、そこにSDGsを紐づけます。(スライド38)

(スライド38)



この紐づけは合っている、合っていないは関係ないんです。なんでもいいんです。そうかなと思うものをつなぎます。例えばテニスを分解しますと、ユニフォーム。そこには色によって男女の差があるとか、スカートが女子だけなどは、それはジェンダー問題ではないかというのでもいいです。そういう感じで考えていきます。そして実際のグループワークはこんな感じです (スライド39)。

(スライド39)



そして彼はこんな感じでした（スライド 40）。

（スライド 40）



彼のセンター（スタート）はプラモデルです。ここまでは博報堂と一緒に考えたデザインですが、ここから先は私のオリジナルになります。ここから検索をかけて本を探します（スライド 42）。SDGs のロゴのキーワードなども入れながら探します。

（スライド 42）

新渡戸らしさ 「本物(本・人・組織・イベント)」を探す



彼はその検索で戦争体験者の本を見つけました。しかも自分が好きでつくっているプラモデルの、当時の乗組員による著書が見つかったんです。それを図書館で借りて水曜日に読む。彼は内容にとっても心を打たれたようで、「では、水曜日に会いに行こう」と出版社に連絡をしたところ実際に著者に会えました。コロナ禍でも著者が喜んで受け入れてくれました。そして著者との時間を過ごして彼は何をしたかと言うと、はじめのアウトプットは文化祭で発表しました。大好きな軍艦のプラモデルをつくり、取材で聞いた話をレポートにまとめて配る、という発信をしました。がんばったと思います。

そして彼に「次はどうする？」って聞いたら、「次は授業をつくりたい」と言いました。2021年6月の沖縄終戦の日に「オンラインで授業をつくる」。著者と学校をオンラインで繋ぐ授業をつくりました、彼が高校2年生のときでした（スライド43）。

（スライド43）



そして「次はどうする？」で、高校3年生では中高全体集会を行い、そこで先ほどの（スライド33）授業を実践しました（スライド44）。

（スライド44）



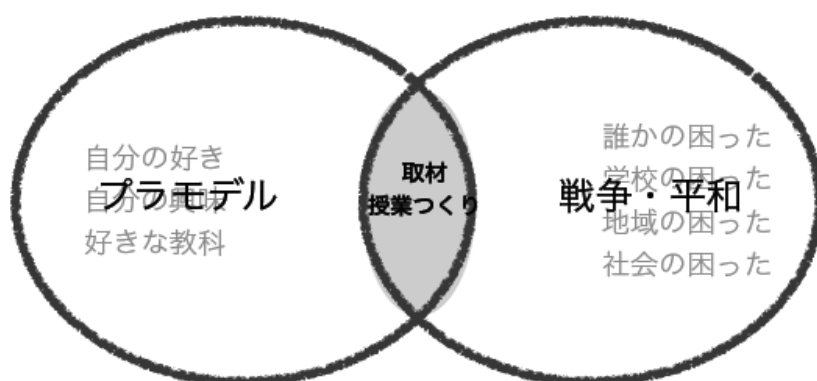
ちなみに、本の著者は他界されてしまい、ご家族の方から葬儀への参列を望まれて最後のお別れをしました。そして彼は葬儀の後に言ったのは、私はずっとこれからも戦争と向き合っていきたい、というものでした。私はこの言葉にじーンときまして、沖縄戦や基地問題をしっかり勉強しようと思って、今年の夏に沖縄に学びに行ったという次第です。

私たちが大事にしているプロジェクトというのは、自分の好きなことと、誰かの困ったことが重なるようなところをプロジェクトにしています（スライド45）。

彼の場合はプラモデルが好きで、戦争という誰かの笑顔が消えているという課題があり、そこを重ねたら1次情報を持っている方を取材でき、授業をつくるというプロジェクトが生まれました。

(スライド 45)

自分の「好き」× 未来づくり



SDGs で言うと、10 番と 16 番ですが、SDGs と紐づけることをあまり大事にしているわけではなく、結果的に世の中をよくする方向にプロジェクトが膨らんでいく、ということです。

最後に私が大好きな 2020 年 4 月 19 日の朝日新聞の朝刊の記事を紹介します。世界的にコロナ禍で自粛が起き、ステイホームです。日本では一斉休校が行われた時期です。一か月ほど一斉休校がありました、あの 4 月です。人が出歩かなくなったら街中にピューマが現れたとか、トドが出たとか、茶色いパナマ運河が水色に戻ったとか、インドの大気汚染がきれいになったとかのレポートで、われわれが行動すれば社会は変えるということや、その原動力には自分の好きが必ず武器になる、これを信じて、中高時代に思いっきり取り組んでほしい。結果的に総合型選抜等で進路も確保できる。先ほどの生徒も、歴史教育、戦争と向き合えるような研究室を探して総合型選抜にチャレンジ中です。といったことをやってきたのが今までです。

以上で話を終わりたいと思いますが、「SDGs 時代における学校変容と学校文化に広がる学校改革の進め方」という大きなテーマをいただきましたが、今、本校でやっていることは以上のようなことで、まだまだ完成形ではありませんが、ちょっとずつ変容しています。自信を持って言えるのは、全職員が同じマインドと腹落ちしている部分があって、歩みを揃えて学校改革をがんばっているということです。この後のディスカッションでご質問をいただいたり、皆さんのご意見からいろいろ学ばせていただきたいと思います。ではここで終わります。ありがとうございました。

質疑応答

—質問 入学志願者数が増加しているようですが、中学生の保護者は現在の学校がおこなっている学びに興味を持って志望しているのですか？ また現在の学校の学びをどのように広報しているのか教えてください。

—山藤 現在の高校3年生は入学後に新しいカリキュラムに変えていくということを伝えているので、正直びっくりしていると思います。今の中学生は全員、「こういう学校です」と伝えてからの入学になりますので、そのマインドはちょっと違うと思います。今の高校3年生とその保護者には、彼らが高校1年生から高校2年生にあがるときに、「来年度から入学してくる高校生は水曜日が「Cross Curriculum」になります、修学旅行も選択制に変えます。皆さんは入学したときのままの現行のカリキュラムを維持することもできるし、新しいカリキュラムに変えることもできます、どちらを希望されますか」ということを問いました。そうしたら、「後輩たちと同じ新カリキュラムに変えてほしい」と生徒も保護者も言ってくれたので、去年（2021年度）から全学年で一気に新しいカリキュラムが実施できました。

その意味ではある程度の賛同が得られたと思います。一方で、変えている最中なので、今どのように変容しているのか、どんなことが課題になっているのか、生徒たちは今どういう状況かということを、かなり丁寧に伝えていかなきゃいけない、と考えています。今は学期に2回ずつ、文書による説明とオンラインによる説明会を始めたところです。ご指摘がありましたように、ここは大事にしないといけないところだと思っています。一生懸命仕組みをつくって外には発信するんですが、内部への説明はこれまで学期に1回の保護者説明会でしかやっていなかったものを、それを2倍に増やして伝えるようにしています。

広報に関しては地道な説明会を繰り返して、メディア等で取り上げていただけることは本当にありがたいことだと感じています。

—意見 「水曜日を教科の授業を入れずにやっているところが素晴らしい。導入したい学校はあると思うが、実現できない」というご意見がきています。

—山藤 ありがとうございます。改革の初年度（毎水曜日に6時間を抜く前）は、2時間でやっていた。中学生は木曜に2コマ2時間、高校生は金曜に2コマ2時間です。4人の先生が教科横断でやっていました。そしたら生徒の反応がとてもよかったんです。さらに生徒からもっと長い時間をやってくれという声も出てきました。先生方からも教科横断で探究を軸にする学校にしていこうということで1年で合意形成が取れました。そして、これをメインカリキュラムにしたいよね、ってことで、「それならメインにするなら水曜というセンターに置こう」と。そして「1日2時間ではなくて一日中やろう」というビッグアイデアが登場して、ではやってみましょう、となりました。こういった段階がありました。

今年は改正して3年目が動いている状態です。このように段階的にカリキュラム編成をしました。カリキュラム編成をするときは、卒業単位は法定通りにいったん整理しました。はじめは敢えて国語・数学・英語の時間を多くしていました、受験対応ということです。ですが、全てを必須履修のミニマムな状態にして水曜の6時間を捻出したという状況です。

一質問 改革開始から3年ということですが、新しく改革に来られた先生と、旧来からの先生との意識共有はどのようにしているのでしょうか。

一山藤 ぼくはどちらかというと新しく来た、改革派、新規型です。人数的にはもともといらした先生方が多い状態です。こうやって改革をしていきたい、チャレンジをしていきたいと発信をしているので、多くの先生方が応募してくださって、この3年間で加わった新しい先生は10名以上います。各教科に1人は新しい先生が入っている状態になっています。そして常に、4月1日、2日、そして8月の30日、31日の年に4日間、半期に1回ずつの研修会で、先ほどの話に登場したような大きな問いをみんなで共有して全員の言葉を集めて、教育活動の最上位目標の確認をしています。

私は今、副校長という立場ですが、「こういう探究型の学校にしよう」とトップダウンでやるのではなく、「これからの時代に本当に必要な教育は何だろうか」と話し合っていたら、皆で、自律だよ、自分で考えて行動する生徒だよ、となって、そのために修学旅行も自分たちで選んでもらえるシステムにしようとか、学校行事も自分たちで考え直してもらおうとか、そもそも自分たちで考える時間を増やした時間割をつくりたいですね、となって「Cross Curriculum」が生まれ、改革の実際の一步ずつを皆でつくってきたので、質問にあるような昔からいる先生と新規の先生との間のフリクションのようなことは起きていないです。自信を持って言えます。

一質問 1日フリーにすることを考えています。実施する上で、クリアしなければならない課題があれば教えてください。

一山藤 おっ。ぼくも2年目で課題はいっぱいあります。例えば、こういう学校だと知って入学してきても毎週1日がフリーでどうしよう、っていう生徒は当然出てくるんですよ。そういう生徒たちをどうするのか、ってことを事前に考えておくということですかね。私たちが出した答えは、動かないことを肯定するということです。「よく動かないな、素晴らしい」と。「適当にお茶をにごすように動くのではなく、じっとしているのは偉い」という受け止め方のマインドでいます。それから「動くことだけをよしとしない」という気持ちを伝えようとしていて、動かないで悩んで考えているということはとても大事なことでなんだと全職員が言葉を揃えて言う、そういう雰囲気をつくることを大事にしています。

一方、今はいないのですが、妨害する、プロジェクトを邪魔する、マイナスのオーラを出す、そういう場合は、大人として厳しく言うからと生徒に伝えています。学ぶ環境を自分のせいでマイナスの環境にすることは、大人として許さないということを言っています。自分がやらないの

はともかく、周りに悪影響を及ぼすのはよくないと宣言しています。ありがたいことにそういう生徒はいません、ただ動けない生徒は結構います。そしてそれは肯定しています。

あとは、こういうことをやるのは初めてだという先生ばかりです。ですから先生方が不安になります。じつは私も不安なんですよ。これでいいのかな、生徒は満足しているのかなと。そこを私たちは2週間に1回クロスカリキュラムミーティングをやっています。毎水曜は「Cross Curriculum」が一日中なので、2週間に1回は午後2時から放課後にするんです、生徒は帰ってもいいんです。生徒はプロジェクトやクラブ活動で残ってもいいけど、それ以外の生徒は全員帰します。その裏でぼくたちはミーティングをしています。そこでは「Cross Curriculum」は最近どうだとか、何が難しいのかとかのミーティングです。さらに先生方に順番で振っていますが、この2週間でどんなことをやっていたのかということを「ショウケース」という名前をつけているんですが、実践紹介や苦戦して失敗した紹介を3人ほどの先生に5分～10分程度の時間でプレゼンしてもらっています。それを皆でプレゼンを受けながら「それわかる」とか「そうだよね」と言って、皆のマインドを揃えています。そういうことをやっています。

―意見 生徒や保護者に教育の選択権を与えている点を見習いたい。

―質問 探究に舵を切ったことで、学習評価はどのように変えていきましたか？

―山藤 ありがとうございます。保護者への説明、生徒との対話は引き続き重要視しなければいけないと思っています。

そして学習評価については、評価にエネルギーをかけないというのが私たちの結論でして、本来の、見なきゃいけない評価は、「授業を通じてどういう能力が身についたのか、ついていないのか」です。例えば課題設定ランクではどんなランクにいるのかを生徒が自分で認知することが大事で、「この能力は足りない」とか「この能力は高まってきた」とかを自分で認知することが大事だと思っているので、自己評価と他己評価はかなり綿密にやっています。6つの能力の説明をしましたが、全ての授業で単元が終わったときに、自己評価させています。それからグループで他己評価をさせています。これは全教科でやっています。それはグーグルフォームを利用しているので、生徒がポチポチ入力すると一気にデータが揃います。

また、生徒に成績表で戻していく評定評価に関してはもうエネルギーをかけない。例えば先ほどの探究の「Cross Curriculum」に関しては全員が10段階の8です。全然何もしない、反応が無い状態は5。仲間を妨害する、無反応という生徒はいないので今はほぼ全員が8です。プロジェクトと言われるものを1つでも起こしたらそれは10にしています、だから8か10しかいないですね。だから最後の評価は先生方がグループでやるんですが、この生徒はプロジェクトしてるよね、まだしてないよね、で、8か10しかつけられないですね。本当にこの子は何もしてないよね、という生徒は数人いて、その子たちは5になっています。そういう状態でエネルギーを評価にかけない、という手法です。正しいかどうかはちょっと置いておいて、です。

―意見 公立高校では総授業時間数によって教職員の定数が決まる。現行より授業時間数の少ないカリキュラムをつくと教職員数が減らされるので、学校経営が苦しくなる。学校独自で職員を雇用できる私立の強みがある

―山藤 はい、実は本校はそんなに潤沢な学校じゃなく、都立高校より職員数は少ない人数でがんばっている状況です。具体的には総合的な探究の時間を増やして、そこに先生を充てているんですね、だから水曜日は1日6時間がフリーですが、そこに教員全員が4時間足しているんですね。だから、公立でも高校1年生の総合探究担当、高校2年生の総合探究担当、高校3年生の総合探究担当とやれば、時数に入れられると思うんですね。私も公立にいた時代は、ホームルームと総合の時間をカウントしたと思うので。そのカウントを私たちは4時間を全先生に足しているという状態です。そうやって算出しています。総時間数としては、結構皆さん14~18ぐらいの中でがんばっているという状況です。

総合的な探究の時数が多いという状況を皆でまわしています。大抵の他の学校では2だと思うのですが、学年に5人の担任がいれば5人がそこに入るという感じだと思いますが、そこを本校では副担と呼ばれる先生も全員入るという形にしてがんばっている状況です。基本的に特別な先生がついているということはやっていないです。この状況を解消するために水曜日にはオルタナ教育に関心があるという大学生インターンを呼んでいて、今年も2学期からは9人が来ます。この9人は私たち教員側の分母としてがんばってもらう。人が必要なのでそういう手当をしています。

―それでは質疑応答はここまでです。セッション2を終了いたします。山藤先生ありがとうございました。

(終わり)

教育改革推進フォーラム長崎 Session3

【テーマ】 教育の不易と流行とは？ そして教師の役割は変わったのか？

鼎 談

鈴木 達哉 先生

和田 美千代 先生

下町 壽男 先生

ファシリテーター 林 巧樹

教育の不易と流行とは？そして教師の役割は変わったのか？

1	鈴木	先生
2	和田	先生
3	下町	先生
4	鼎	談

お話 1

「学習の個別最適化」の現状と近未来
従来型一斉授業との対比において

ユマニテク教育研究所副所長（元 三重県立四日市南高等学校校長）
鈴木 達哉

お話 2

教師の役割は変わったのか？
教師の不易流行

福岡大学人文学部教授（元 福岡市立福岡西陵高等学校長）
和田美千代

お話 3

教師の役割は変わったのか？
教師の不易流行

しもまちハイスクール/盛岡白百合学園（元 岩手県立花巻北高等学校校長）
下町 壽男

鼎 談

教育の不易と流行とは？そして教師の役割は変わったのか？

鈴木 達哉
和田美千代
下町 壽男
＜ファシリテーター＞ 主催者代表 産業能率大学 林 巧樹

ファシリテーター 林 巧樹

本日はセッション3にご参加いただきましてありがとうございます。これからセッション3を始めさせていただきます。私は主催者の林です。今まで表舞台に出たことはないんですがセッション1が表の正規の番組だとすると、このセッション3はネットだけに配信するものです。私はテレビ番組のバス族シリーズが好きで、「あのときあのバスに乗っていたらよかった」という番組の感じで、もう少し本音で下町先生と和田先生にさらに語っていただこうと思います。

先ほどは「生徒は変わったのか」という視点でしたが、「教師自身はどうか」という観点でお話しいただこうと思います。先ほどのセッション1でお話しいただいた下町先生と和田先生に加えて、そもそもですが、今から10年ほど前の名古屋で5年間ほどフォーラムを開催していまし

た。「フォーラムを東京だけでなくぜひ地方でもやってほしい」という声掛けをしてくださった鈴木先生に、今回加わっていただき、鼎談としてお届けしたいと思っています。

ちょっとスケジュール確認をさせていただきます。この後、鈴木先生にお話をいただき、その後 10 分程度チャット機能を使って鈴木先生のお話への質問、ご意見、感想など何でもいいのでチャットにいただきたいと思います。その後、和田先生からこのセッション 3 のテーマでもある「**教師の役割はかわったのか？ 教師の不易流行**」についてお話をいただき、続いて同テーマで下町先生にもお話をさせていただきます。その後にお二人のお話の意見、感想、ご質問をチャットでお送りください。

そして和田先生、下町先生から鈴木先生のお話について意見や感想をお話しいただいて、次は逆に和田先生と下町先生のお話について鈴木先生からお話しいただき、さらに皆さんからいただいたご質問等を含めて討論したいと思います。最後にはお一人ずつご挨拶をいただいて 5 時に終了となります。長丁場になりますが皆さん、おつき合いいただければと思います。

まだ予定している 50 名ほどの方が揃っていませんが、どのような方々がいらっしゃるのか名簿をご覧ください。遠方の方もそうじゃない方も参加できるのがオンラインのいい所で、北海道の先生、長崎の先生、距離は関係ありません。でも遠いところからありがとうございます。われわれは画面を見ながらお話しさせていただきますので、可能な方はカメラオンをお願いします。それではさっそく、まずは鈴木先生からお話しいただきます。先生よろしくお願いいたします。

お話 1 鈴木 先生

「学習の個別最適化」の現状 と近未来

従来型一斉授業との対比において
ユマニテク教育研究所 鈴木達哉

こんにちは、鈴木と申します。異様に顔が赤いと思いますが、酔っているわけじゃありません、緊張しています。本日はオンラインということでお話しさせていただきますが、今日はとても緊張しています。そもそもが、和田先生、下町先生のセッション 1 をすでに皆さんが見ていらして、あの話の後で私が何を話すんやという根本的問題がありますし、もうひとつは後からも言いますが、2 年半前に公立高校を退職いたしまして、ユマニテク教育研究所に所属しながら、実は三重大学大学院でもう一度勉強をし直していたんです。私の強みは「現場第一」「ガチ本音」だと思っていますが、その現場を 2 年も離れているので、本当にできるのかしらと不安に思いながら今日はやらせてもらいます。

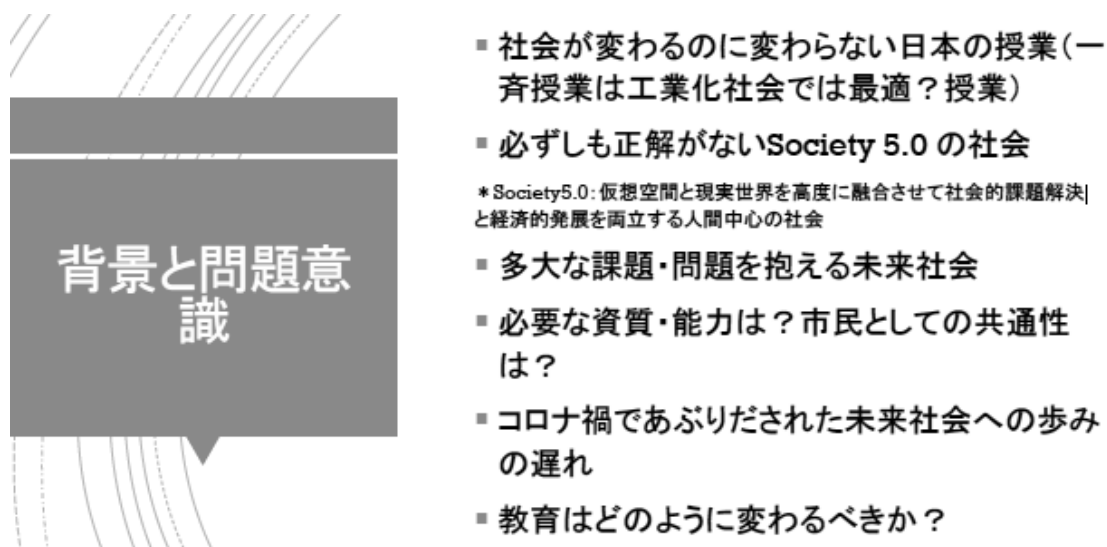
産能大のフォーラムは、要らんことは喋らずストレートに本題に入るといえるものだと思いますが、後からの話と関連するので、先に少しだけ退職してから2年間にどういことをやってきたかを話させていただきます。

コロナ禍の中で退職いたしまして、ユマニテック教育研究所というものを立ち上げてもらいまして、そちらもやりながら、でもメインは三重大学大学院で教育科学の勉強をする、もともとやっていたキャリア教育を中心に勉強し直すというものです。授業をやりたいという希望があったのでもう一度アクティブラーニング（以下AL）としてのコミュニケーションを勉強したり、教育の将来、地域の将来、特に私はずっと地方のことをやっていたので、地方の教育の在り方、授業の在り方等も含めて勉強をしてきました。具体的には学習心理学、認知心理学、自己調整学習、生徒指導論等を勉強した、いや勉強したといっても精緻な理論を持っているわけではありませんが、そういうふうなことを勉強してまいりました。今日は「学習の個別最適化の現状と近未来」ということで、お話しさせていただきます。では画面を共有させていただきます。

ご覧いただいているパワポは、大学院2年生で勉強していたときの「学校教育理論Ⅱ」の授業の中で、院生の学生と一緒に勉強して発表で使ったもので、画面をご覧になっている先生方には「こんなもん、もうわかつとるわ」という感想もあるかと思いますが、そのあたりは飛ばして進めさせていただきます。よろしくお願いします。

1 背景と問題意識

(スライド2)



背景と問題意識

- 社会が変わるのに変わらない日本の授業(一斉授業は工業化社会では最適? 授業)
- 必ずしも正解がないSociety 5.0 の社会
 - * Society5.0: 仮想空間と現実世界を高度に融合させて社会的課題解決|と経済的発展を両立する人間中心の社会
- 多大な課題・問題を抱える未来社会
- 必要な資質・能力は? 市民としての共通性は?
- コロナ禍であぶりだされた未来社会への歩みの遅れ
- 教育はどのように変わるべきか?

まず、背景と問題意識です。スライド2の中の「社会が変わるのに変わらない日本の授業(一斉授業は工業化社会では最適? 授業)」「必ずしも正解がないSociety 5.0 の社会」というのはもう皆さんは充分にわかっていらっしゃると思いますし、セッション1で和田先生、下町先生からお話がありました。要はこのコロナ禍の中で教育がどのように変わっていくのか、ないしは、教育がどのように変わるべきか、ということの問題意識として捉えたというものです。

2 発表の流れ

発表の順番は次のスライド3の流れになります。

(スライド3)



- ①従来型の一斉授業とは
- ②アクティブラーニングとは？
- ③アクティブラーニングとSociety 5.0
- ④コロナ以後の教育と安彦理論
- ⑤私の考察と現実的な実践
- ⑥参考文献

①の「従来型の一斉授業とは」の説明は皆さんもう十分ご存知なので飛ばします。②は「そもそもアクティブラーニングとは？」について。③については、自分が勉強したことや発見したことを付け加えながら説明します。④については、今ユマニテク教育研究所で安彦忠彦先生（名古屋大学名誉教授）に顧問になっていただいております、2年前にフォーラムを行いました。その中で「コロナ禍以後の教育」という話を安彦先生にさせていただき、私はそれにとっても共鳴したので、少し説明させていただきます。続いて⑤では、しかし現実問題として、私は「ガチ本音」というスタイルなので「理想はそうだけど、現実にはできるの？」という現実的な実践ということで、話をしたいと思います。

3 アクティブラーニングとは

ではスライド4は飛ばして、スライド5です。このスライドから3点お話しします。

1点目ですが、私は2007年の学校教育法改正をものすごく重要視しています。これが教授学習法のパラダイム転換がおこなわれた一番のきっかけだと思っています。

2点目は、そのときにアクティブラーニング（以下AL）が出てきたんですが、かつて一緒に勉強させていただきました溝上慎一先生のAL定義、これに従ってわれわれは勉強してきましたので、これについてのことが書いてあります。また、大学院で勉強した中で「あっ」と思ったことがあります。ALを高校でやっていた当時、溝上先生の「一方向的な知識伝達型講義を聴くという受動的学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のこと。能動的学習には、書く・話す・発表するなどの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う」が言われていたんですが、「認知プロセス」が自分自身にはどうもよく理解できなかった。それで、われわれがこれを話すときに「認知を思考へと表現を変えてもいいか？」と許可を得まして、自分の中ではずっと「思考を伴う」という理解でやってきたんですが、その後勉強したことで「認知とはこういうことだったのか」とわかったことが私の中では大きかったです。

(スライド5)



・新しい学力観・・・2007年 学校教育法改正

①基礎的な知識・技能の習得

②課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等

③主体的に学習に取り組む態度

・これをもとにした教授学習法のパラダイム転換＝主体的学習

・溝上慎一のアクティブラーニング定義

(アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換より)

「一方向的な知識伝達型講義を聴くという受動的学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のこと。能動的学習には、書く・話す・発表などの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う」

・その後、新学習指導要領における文部科学省の定義

「主体的、対話的で深い学び」＝探究の要素が大きく入る

3点目は、スライド5の下方の新学習指導要領です。今日はほとんどが学校の先生方で、今の1年生から実施されておりますが、このときにALに「主体的、対話的で深い学び」という探究的要素が入ってきたと思います。それで言いますと、われわれはALと言っていますが、少なくとも私にはキャリア教育というところがありまして、この後のスライドでもご覧いただきますが、自分なりに考えるキャリア教育というのがあって、そのキャリア教育の中で出てくる授業、授業のキャリア教育がALだという捉え方をしていました。そうするとALと言いますが、実際には「AL型授業をする」という教員を中心に考えるという発想でやっていったんですが、「主体的な学習」という探究の要素が多く入ることで、私自身は教員がやるAL型授業以外にも、生徒が中心になる本当の意味でのAL、探究が入ってきたことが、教員の役割変換に大きく関わっていると思いますので、それも押さえておきたいと思います。

4 キャリア教育とアクティブラーニング

では次スライド6です。私は15年ほど前からキャリア教育ということでやっていたんですが、この「キャリア教育」にもいろんな考え方があり、私が考えるのはスライド6に書いたものです。

一番のおおもとは「未来社会で若者が『生きる力』を育成する」というものです。具体的には、私は進路指導をずっとやってきたので、進路学習、資質・能力の開発、シティズンシップ教育の3点にキャリア教育の重点を求めています。スローガンとしては「高い志と世のため人のため」。それからキャリア教育と言う以上、「誰も置き去りにしない」ということを考えてやっていました。そのためには、当時から個に視点を置いた学びの連続性、小中高大の学びの連続性を言っていました。「個に視点を置く」というのは、当時から言っていました。このことが今の「個別最適な学び」につながっていると考えています。

(スライド6)



私の考えるキャリア教育

- 「未来社会で若者が『生きる力』を育成する」
- 進路学習、資質・能力の開発、シティズンシップ教育
- 「高い志と世のため人のため」「誰も置き去りにしない」
- そのために「個に視点を置いた学びの連続性」
- すべての教育活動をキャリア教育の視点で「横串を通す」
- 主体性・自立・共生
- 授業のキャリア教育がアクティブラーニング
- 見通し(目標設定)→生徒が思考する授業→振り返り(リフレクション)

それから授業だけでなく全ての教育活動、例えば部活、特別活動、学校行事、掃除、挨拶を含めて、全ての教育活動をキャリア教育の視点で横串を通す、私は「横串を通す」という表現を使っていました。そうやって育てたいものは、主体性・自立・共生という3つでした。

ALについて言うと、授業のキャリア教育がAL。先に申し上げましたがこれが私の考え方です。ALについてはセッション1でお二人の先生からのお話がありましたが、さまざまなALの思想がありましたが、基本的には「見通し(目標設定)」→私は思考という単語を使っていたのですが、「生徒が思考する授業」→「リフレクション」。これができていればALとなり、かならずしもグループワークを伴わなくてもALとなるんだという発想でやっていたのが、私が考えるキャリア教育としてのALでございます。

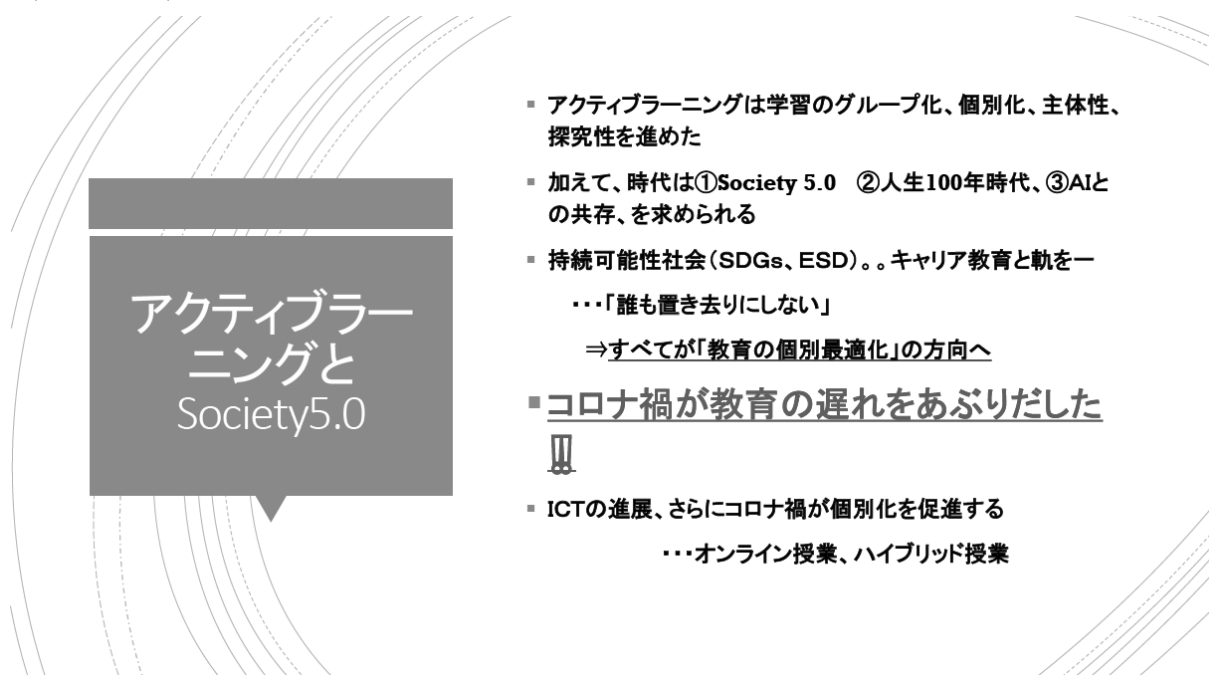
5 アクティブラーニングとSociety5.0

ALが行われたことで、学習のグループ化、個別化、主体性、探究性などが進められてきたと私は考えています。

加えて、時代はSociety 5.0、あるいは人生100年時代、AIとの共存も求められる時代になってきて、持続可能性のある社会ということも言われています。そうすると持続可能性のある社会というものはまさにキャリア教育、だれも置き去りにしないというSDGsの根本的な考え方とつながりますので、私はこういった、スライド7の上部の3点も含めて、これから先、全てが教育の個別最適化の方向に向かっているのではないかという考え方を持っています。

さらに、2年半前にコロナ禍が教育の遅れをあぶり出したということは、今日のセッション1のお二人のお話にもあったことでございます。その結果としてICTの進展、さらに個別化を促進したということです。もっともオンライン授業、デジタルというものが入ったことによって、私自身はまったくその方面ができないのでものすごく困ったというのが正直なところですが、以上述べてきたものが、ALになってきたんだなというところですよ。

(スライド7)



アクティブラーニングと Society5.0

- アクティブラーニングは学習のグループ化、個別化、主体性、探究性を進めた
- 加えて、時代は①Society 5.0 ②人生100年時代、③AIとの共存、を求められる
- 持続可能性社会(SDGs、ESD)。。キャリア教育と軌を一
 - …「誰も置き去りにしない」
 - ⇒すべてが「教育の個別最適化」の方向へ
- コロナ禍が教育の遅れをあぶりだした

- ICTの進展、さらにコロナ禍が個別化を促進する
 - …オンライン授業、ハイブリッド授業

6 コロナ禍以後の教育と安彦理論①

先に話した安彦先生にユマニテク教育研究所の顧問をしていただいておりますが、このように考えたところに、2年前の11月に安彦先生に基調講演をお願いして第3回ユマニテク教育フォーラムを開催しました。そのときの安彦先生の講演をまとめたものがスライド8、9です。

これは安彦先生のこれまでの理論に加えて、さらにコロナ禍によってまた教育はこうなっていくということを語られたと思ってください。これは私の考えではなく安彦先生が話されたことなので忠実に読ませていただきます。

まず、「公教育」と「私教育」、特に私教育を安彦先生は重要視されますが、これらを区別した上で「福祉主義的公教育」への変質をおこなう。もう国家権力が運営する近代学校は後進的だというのが、彼の考え方です。

そして2番、就学義務から教育義務への転換。必ずしも学校だけが教育をおこなうということじゃない。私教育充実への社会改造をおこなうべきだというご意見です。

3番、学校の授業はオンラインと対面のハイブリッド型に変える。「私教育」の種々の場所、人的資源を活用する。これはまさに外部人材の起用、外部との連携がそれに当たっていると思います。

(スライド8)



- 「公教育」と「私教育」と区別したうえで「福祉主義的公教育」への変質を…国家権力が運営する近代学校は後進的
- 就学義務から教育義務への転換。私教育充実への社会改造
- 学校の授業はオンラインと対面のハイブリッド型。「私教育」の種々の場所、人的資源を活用する。
- 学習者に主導権、教育者は補助が基本。一斉指導は一部にし、一斉・個別・協働を組み合わせたアクティブラーニングで課題解決型学習を中心に。
- 教育の目的を「自立と共生」に絞り込む。
- 小学校3、4年までに読み書き・計算の基礎的部分(＋デジタル基礎)、中学校終了までに探究型と思考力・コミュニケーション等の基礎部分を育成＋国民としての教養(未来の主権者としての能力＝シティズンシップ教育：鈴木注)育成

4番、学習者に主導権があり、これは学習者中心ですね、教育者は補助が基本である。一斉指導は一部にし、一斉・個別・協働を組み合わせたALで課題解決型学習を中心におこなう。

5番、教育の目的を「自立と共生」に絞り込む。絞り込むことによってかなりいろんなことを公教育から省くことができる、というのが彼の考えです。

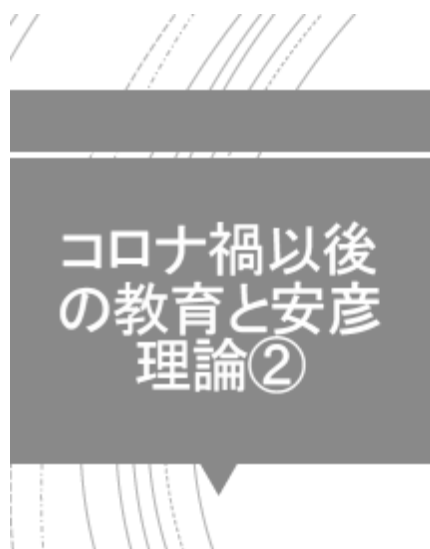
6番、小学校3、4年までに、これは高校の話だけでなく小中高での学びの一体化、学びの連続性という視点で、読み書き・計算の基礎的部分を、また今の時代なのでプラスしてデジタル基礎を。中学校終了までに探究型と思考力・コミュニケーション等の基礎部分を育成する。プラス国民としての教養。これは私が言うシティズンシップ教育と同じことだだと思います。そしてその育成に当たる。ここまでが前半（スライド8）の部分です。

7 コロナ禍以後の教育と安彦理論②

7番、義務教育以後の教育、つまり高校・大学は生涯学習体系として接続する。通学・オンラインのハイブリッド。有職者も随時導入する。リカレント教育を含め、入学・履修を可能とする、とおっしゃっていました。

ここからが本日のメインとなるところですが、8番、学習そのものが個を軸とした個別最適化学習、ないしは個別最適化教育。これは私が20年前から主張してきた学びの接続、あるいはキャリア教育の理念と合致すると思ひまして、まさに我が意を得たりと思ひました。

(スライド9)



- 義務教育以後の教育＝高校・大学は生涯学習体系として接続。通学・オンラインのハイブリッド。有職者も随時導入、リカレント教育を含め、入学・履修を可能とする。
- 個を軸とした個別最適化学習(教育)＝私が20年前から主張していた学びの接続、キャリア教育の理念と合致
- 教師の在り方も変容・脱皮
 自立の基礎を身に付けさせるティーチャー(20%)、子どもを支援するマネージャー(30%)、自主学習の遂行支援(30%) (私はこれに外部との連携のファシリテーター要素も含めたい)、生活指導のためのカウンセラー(20%)
 ＝コロナ禍以後、教師はスペシャリストではなく、プロフェッショナルであることが求められる

9番、そうすると当然ですが、教師の在り方も変容・脱皮が図られるということです。例えば、自立の基礎を身に付けさせるティーチャーの役割が20%、子どもを支援するマネージャーの役割30%、自主学習の遂行支援に私は外部との連携のファシリテーター的要素も含めたいと思いますが、そういった要素が30%。そして生活指導のためのカウンセラー、これも面白いです。かつての、よくするための生活指導というよりカウンセラーとしての生活指導に役割を変えるということですが、この要素が20%でした。ただし、安彦先生は今ここに並ぶ数字を厳密な数字で分けているのではなく、合計が100になるように私が先生の意に沿って考えましたことをご了解ください。

合わせて、安彦先生はコロナ禍以後は、教師はスペシャリストではなくプロフェッショナルであることが求められる、と語られました。

8 私の考察と現実的な実践①、②

ここまでで、3点整理をしたいと思います。まず、将来こういった授業、こういう教育になっていくと、授業も探究も主体的学習になっていくので、学習の枠、学習の範疇、あるいは学習の概念が広がったと考えるべきではないでしょうか。そうすると、当然今までとまったく違うことをやるわけで、教師の役割が変わる必要性もある、というのが私の考え方でございます。

2つ目、教師の役割が変化すると申しましたが、学校の役割と教師の役割を分けて考える必要性もあるのではないかと、という考え方です。

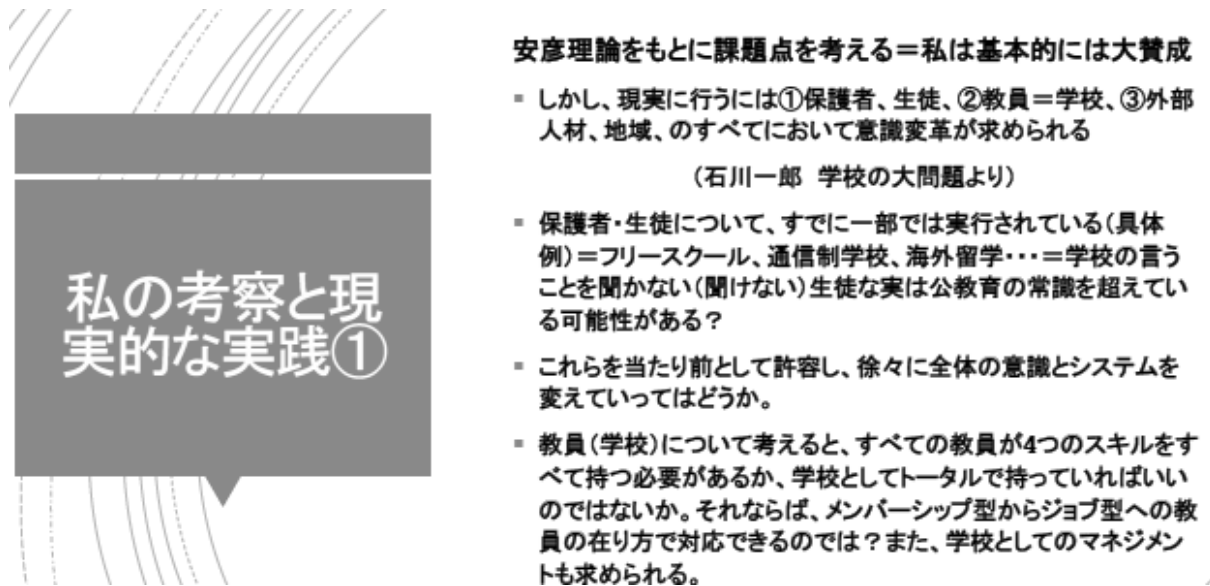
3つ目は「一人ひとりを大切に、誰も置き去りにしない」ということから言いますと、例えば学力が上位の生徒、この学力が何かという問題もありますが、上位の生徒でしたらいいのかもしれませんが、このようなレベルの話は全ての教員、あるいは全ての生徒、保護者も含めてですが、本当にやれるんだろうか、という問題が私の中には厳然としてあります。じゃあ、私自身がどうしていったらいいのかを、安彦理論を元にして課題点を考えてみました。

ここからは私の考えになります(スライド10、11)。基本的に私は安彦先生の理論に大賛成で

す。しかし現実にはこれをおこなうには①保護者、生徒、②教員＝学校、③外部人材、地域、の全てにおいて意識変革が求められる。これは石川一郎氏が「学校の大問題」で指摘されていることですが、まさにその通りだと思います。そこで、1つの方策として、まず保護者・生徒については、N 高や、広域通信制学校、海外留学などもそれに当たるかもしれませんが、すでに一部では実行されているフリースクール、通信制の学校、海外留学などを認めて当たり前のものとして許容していったらどうか。そういう人がいてもいいじゃないか、ということです。その中で思うのは、学校の言うことを聞かない生徒は、あるいは親、モンスターペアレンツも含めて、そういう人たちは実はもう公教育の常識を越えたところにいるんじゃないか、ということです。

次に学校、ないしは教員を考えたときに、全ての教員が先ほど言った4つのスキル、ティーチャー、マネージャー、ファシリテーター、カウンセラーの全ての要素を備えている必要があるのかどうかの問題です。というのは、これら全てを兼ね備えるスーパーティーチャーはそんなに大勢いるとは私には思えない。それならば自分の得意な分野を生かす形で学校としてのトータルでこれらの4つの要素を力として持っていればいいのではないかと、という考えです。だからある先生は授業はものすごくできるけれど、生徒指導の部分が苦手という人もいるでしょう。そういう人がいてもいいじゃないか。一方にカウンセラーに長けて、授業もある程度やれている人がいるという人がいてもいい。あるいは足りない部分は当然学校外から来ていただくという部分を含めて、学校としていわゆるスクールマネジメントということを考えに入れながら、教員として全てのものを持っている必要はないという考え方です。

(スライド10)



安彦理論をもとに課題点を考える＝私は基本的には大賛成

- しかし、現実に行うには①保護者、生徒、②教員＝学校、③外部人材、地域、のすべてにおいて意識変革が求められる

(石川一郎 学校の大問題より)

- 保護者・生徒について、すでに一部では実行されている(具体例)＝フリースクール、通信制学校、海外留学・・・＝学校の言うことを聞かない(聞けない)生徒は実は公教育の常識を超えている可能性がある？
- これらを当たり前として許容し、徐々に全体の意識とシステムを変えていってはどうか。
- 教員(学校)について考えると、すべての教員が4つのスキルをすべて持つ必要があるか、学校としてトータルで持っていればいいのではないかと。それならば、メンバーシップ型からジョブ型への教員の在り方で対応できるのでは？また、学校としてのマネジメントも求められる。

セッション1の下町先生の話の中にもありましたが、今、教員が背負っているものはものすごく大きい。背負いきれない人も多いと思います。これらを全てやりなさい、ということになるとたぶんもう無理がくるんじゃないか、というのが私の考えです。

一方では、いわゆる学力上位の30%ではない生徒たちにとっては、探究をやりなさい、クラブ活動をやりなさい、勉強はやらなきゃいかんよというのは、オーバーペースになってしまうことも考えられます。ならば、もうちょっと肩の荷を下ろすことも必要ではないか、という考え方を

持っています。

(スライド11)



- 一方で、学校の持つ仲間づくり、人間関係づくりの場としての役割は残したままで行くべきでは？(面談、進路指導、生活指導なども実際にやっている＝カウンセラー、ファシリテーター)
- すでにチーム学校として、カウンセラーやスクールロイヤー、外部指導者の形で教員外のいろいろな人たちが学校に入ってきている。
- 地方と都会では意識差が大きい。地域ごとに現実的対応を行っていくべき。
- 外部・地域の変革については我々の「教育研究所」が橋渡しの役割を果たすことができる。教員にも研修を行うことが可能。この機能を伸ばしていきたい。

また、学校が持つ仲間づくり、人間関係づくりの場としての学校は残したままいくべきだと考えます。例えば私教育を強化することへの異論はありませんが、公教育が持ついい部分まで捨ててしまうことはないと思います。例えば広域通信制の学校ではICTを、デジタルを使うことで自分のペースで勉強ができる。そのように使うなら個人でICTを用いながら勉強することは可能だと思います。でも人間づくり、仲間づくりを考えたときは、生身の人間が持つ素晴らしさや協働性を持つことの素晴らしさを残したままいく方がいいのではないかと思います。

それで言うと、既にチーム学校という考え方で、現在のカウンセラーやスクールロイヤー、外部指導者、例えばクラブ活動の外部指導者などはすぐに入るといっても言われていますが、学校の教員以外の人たちがもういろいろと学校に入ってきていますので、それをもっと強化する形でやっていったらいいのではないかと思います。

加えて、私は地方の10年後の教育というものを修士論文で書いたんですが、やはり地方と都会では意識の差、あるいは実状の差があります。具体的には学校のキャパシティの問題、持っているリソースの問題。例えば探究活動では、地域ではどうしてもその特性として、テーマにSDGsや地域連携、地域の課題解決といったものにもっていくしかないというのも現実問題としてあります。そこで地域ごとに現実的な対応を取っていくべきだという考え方を持っています。

大雑把ではありますが、以上が私のコロナ禍以後の現実的な教育についての提案でございました。スライド12は参考文献です。ちょうど30分となりましたので、私の話はこれで終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

(スライド12)

参考文献

アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換

(溝上慎一 2014 東信堂)

アクティブラーニング実践

(鈴木達哉他 産業能率大学出版会 2016)

多元化する「能力と社会」ハイパーメリトクラシー化の中で

(本田由紀 NTT出版 2005)

私教育再生 すべての大人にできること

(安彦忠彦 左右社 2019)

コロナは教育にどのような影響を及ぼすか

(安彦忠彦 教育展望2020年9月号)

AI時代の到来と教師の使命

(安彦忠彦 学校教育研究所年報 2020)

学校の大問題(石川一郎2020)

ファシリテーター 林 巧樹

鈴木先生ありがとうございました。それでは和田先生です。先生には第1回目のフォーラムで「不易と流行」というお話をさせていただきましたが、そこから15年の歳月を経て昨年、横浜創英高校の工藤校長からも不易というお話がありました。工藤校長はそもそも「教育に流行ってあるのか」というお話でした。そんなところから、教育に関して流行とか不易とかいうけれど、そもそもあるのだろうか、という私の素朴な疑問からもう一度和田先生に戻してみようと思ひ立ち、今日このオンラインで、本当はゆるい雰囲気ですりたかったんですが、緊張感がある中でお話を聞きたいと思います。アナログそのものの対応ですが、私がこの席を離れると横から和田先生が入ってきますので、皆さん心の中で拍手をしていただいて、和田先生をお迎えいただきたいと思います。それでは和田先生よろしくお祈いします。

お話2 和田 先生

教師の役割は変わったのか？ 教師の不易流行

和田美千代

みなさんこんにちは。とてもアナログな和田です。笑っていただけましたでしょうか。午前中のセッション1では「生徒は変わったのか？ 生徒の学びは変容したのか？」というところで私は生徒の学びは変容した、もしくは変容しつつある、という立場で話させていただきました。そうすると生徒の学びが変わっていく中で、じゃあ教師の学びはどうなんだ？ 教師の役割は変わった

のか？ というのが私がこれから話す内容です。もちろん先ほどの鈴木先生の話の中で「4 つのスキルを全て持つ必要はあるのか」というお話がありましたが、そのことも含めてお話ししたいと思います。画面の共有をさせていただきます。

サブタイトルに「教師の不易流行」とつけました。セッション 1 で次のスライドをあげました。中央下段にある「対面の先生の役割は？」というところで、ファシリテーターであることはもちろん、ガイド役、学びの案内人、相談にのる学びのカウンセラー、そして問いを最初に立てる人はやはり先生だと思います。そのうち生徒自身が問いを立てられるようになるのが理想ですが、そのように問いを立てる人ということ、それから学び続ける背中を見せる人ではないかと思っています。

(セッション 1 のスライドから流用)

**結局、ICTは教室の学びにどんな変化をもたらしたか
教室に閉じていた学びが、世界とつながった**



**世界の誰からでも、何からでも学べる
世界に向かって発信できる
対面の先生の役割は？**

**ガイド役、学びの案内人。相談にのる学びのカ
ウンセラー。問いを立てる人。学び続ける人。**

そして、キャリア教育、アクティブラーニング（以下 AL）、探究、ICT、それぞれの話題が登場してきたときに、どれもが自己目的化してしまい「キャリア教育すること」「AL すること」のように、そのものが目的になっていました。AL をすることが目的となって、ものすごくかまびすしくなった、皆がワーワー言っていた状態なんだけど、今日のこのセッション 3 のタイトルの「教師の役割は変わったのか？」というところの、そもそもの教師の役割って何なのか。その定義によって「変わった」とも言えるし、「変わっていない」とも言えます。

私にしてはめずらしく控えめに小さい文字をスライド 3 の下方に載せましたが、結論から言いますと、そもそも教師の役割は何か。「教師の不易流行」の「不易」部分ですが、これはキャリア教育であろうとアクティブラーニングであろうと探究であろうと ICT の活用であろうと、「学びのワクワクドキドキ、学ぶ楽しさ面白さを伝える人ではないか」と思います。そういう点では教師の役割はずっと変わらないんじゃないかと思います。この「学びのワクワクドキドキ、学ぶ楽しさ」のところで、その時代ごとのそれぞれの流行として、キャリア教育、AL、探究などの言葉が登場しているんじゃないか。だけど教師の本質は学ぶ楽しさのようなものを伝えられる人ではないかと思います。

(スライド 3)

キャリア教育 アクティブラーニング 探究 ICT

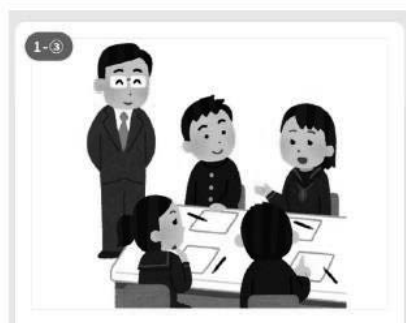
どれも自己目的化してかまびすしく。
でも、そもそも教師の役割って何？

学びのワクワクドキドキ、学ぶ楽しさ面白さを伝える人ではないのかな・・・

そして現在は、基本的には学ぶ楽しさを伝えるのが先生の役割ですが、ただスライド 4 のように生徒たちが主体的、対話的に深い学びに向かっているのを見守るような、そういう教師のマインドセットが必要です。ついつい教師は教えたがって、しゃべりたがって、マイクを離したがない。だけどそのマイクを手放して、生徒たちに渡すことが求められているのではないかと思います。

(スライド 4)

教師のマインドセットの変化が求められている

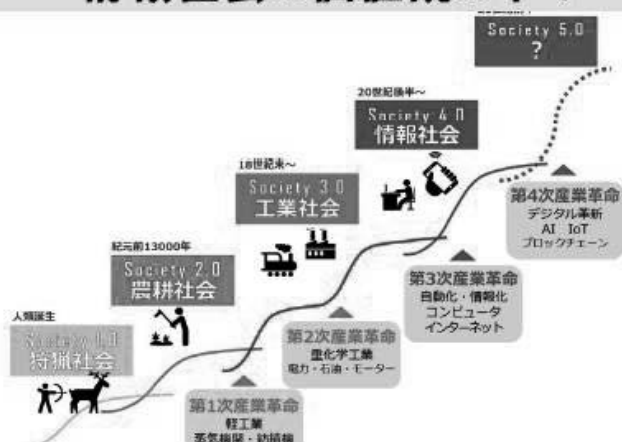


セッション 1 の、society5.0 の話の中であなたはどの社会にいますか？ という話をしましたが (スライド 5)、私はこのコロナ禍でやっと近代工業社会の価値観、society3.0 の価値観、もっというと昭和の教師の価値観が、ようやく『風と共に去りぬ』じゃないですけど「コロナと共に去りぬ」で、やっと学校は society4.0 の情報化社会に入ったと思っています。そういう中で学ぶ楽しさを伝えるという教師の役割は変わらないと思います。だけど流行していくものは変わるので、そこはちゃんと押さえるということだと思います。

「StuDX Style」これは文科省が出している GIGA スクール構想を浸透させるための、先生たちの学びサイトです (スライド 6)。私はこれを福岡大学の学生に紹介しながら「先生って、時代の変化に合わせて学ぶことが必要なんよ」と伝えています。私としては「学びのワクワクドキドキ」を伝えられる先生であり続けたいと思っています。私からは以上です。

(スライド 5)

あなたは今どこ？工業社会の価値観の中？ 情報社会の価値観の中？



(スライド 6)

GIGA StuDx メールマガジン

GIGAスクール模様の実現

生きる力

子供の学び応援サイト

STEAM Library

未来の教室

スタディーエックス スタイル

StuDx Style

GIGAスクール模様の浸透させ 学びを豊かに変革していくカタチ

新着情報・注目情報

○新着情報○

2022.6.24 > (事例)【動画追加】4-⑤保護者へのお手紙をはじめ計6事例更新 (4-①,②,③,④,⑤,⑥)

2022.6.10 > (特集)教育現場での著作権とは？「授業目的公衆送信権限制度」について改めて確認しよう

2022.5.17 > (特集)学校と保護者等との間で確認・共有しておくことが望ましい主なポイント×StuDx Style

>>>過去の更新情報はこちら

○注目情報○

【ミニ研修】StuDx Styleを活用した研修の紹介【特集ページ】全国の自治体や学校の取組などの紹介

【StuDx Style】当サイトについての紹介【GIGA StuDxメールマガジン】メールマガジンの紹介

“すぐにも”“どの教科でも”

1台端末の活用シーン

履修する
つながる
活用

各教科等
での活用

STEAM教育等の
横断的・統合的な
学習

ファシリテーター 林 巧樹

和田先生、ありがとうございました。このセッション3のタイトル「教育の不易と流行とは？そして教師の役割は変わったのか？」を考えた理由の1つ目は、和田先生のお話にありましたが、教師としての本質的なことは当然ながら変わらないと思うんですが、そういうことは意外とこういった場でも話に登場することがなくて、一度それを見つめてみたいと思ったことです。理由の2つ目は、今も参加されている千葉先生から、『AERA』に「日本の先生は教えることはすごく上手だけれど、それでいいのか」という記事があって、それについての千葉先生のお話があり、そこから2年前の青森でのテーマも決めました。つまり長期的というか本質的な部分で今の学校教育での役割が変わっているのかいないのか、そのあたりを3人の先生に聞いてみたいと思った次第です。では下町先生、お願いいたします。

お話 3 下町 先生

こんにちは、下町と申します。10 分間ほど話しますがテーマは和田先生と同じ「教育の不易と流行とは？そして教師の役割は変わったのか？」です。私はスライドを使わずに話します。

お二人の先生が話されたことと違う視点で話そうと思ったんですが、先ほど鈴木先生がキャリア教育とアクティブラーニングのつながりを話されて「ああ、なるほどなあ」と感じたので、キャリア教育の視点でまとめようかなと思っています。あっちこっちに話が飛ぶかもしれませんが。

まず、聞いていて思ったことがひとつあったのでその話からします。3 年前に盛岡三高で高校 1 年生にキャリア講演をしました。90 分ぐらいでした。そうしたらその 1 週間後ぐらいに生徒たち 300 人分ぐらいのリフレクションシートが送られてきました。皆びっしり書いてくれて、私はすごく感動しました。何がすごいかって言うと、そこに私の話の中で気になったキーワード、印象に残ったキーワードが書かれているんですが、それが 100 種類ぐらいあったんです。「100 種類もしゃべったかなあ」という感じだったんですが、それぞれ皆の受けとめが違うんですよ。それを見たときに、「これこそ学びなんだ」と思いました。つまり、先生があることを話す、例えば、それが自動車学校だったら、話したことがそのままストレートに受信者に伝わっていくべきですよ。単純に資格試験で何かを絶対覚えなければならぬ場面では、教えたことがその通りに受信者に伝わるのが大事です。でも学校における「学び」は、先生があることを話したときに聞き手はそれぞれ違うことを受け取るのだと私は思います。だからまさに盛岡三高の生徒たちは主体的な集団なのだと思います。もし、皆が同じようなことを書いてくるんだとしたら、それは主体的ではなくて与えられたことを待つだけの群衆です。だからリフレクションを見るというのは、生徒がどれだけ主体的であるかというのを知るひとつのバロメーターかもしれないと思います。

そこで、テーマの「教育の不易」ですが、学びの不易として私が言いたいのは、学ぶことは先生が言ったことを効率よく自分の中にインストールすることではなくて、インプットされたものをいかに編み直して自分ごとにしていくのか、ということだと思います。そこでキャリア教育の視点なんです。学びとは、自分が AI も含め、他によって代替できない者であること、確固たる唯一の自分であるということを自覚するための活動なのではないかと。これはまさにキャリア教育にも通じる話ですよ。つまり「学ぶ」とは、生きることだともここで思ったわけです。

では、「教師の役割はどう変わったのか？」という話ですが、単純に「変わった」「変わっていない」の比較は人によって違うので簡単には言えないけれど、自分を顧みたときに、それは明らかに変わっていたんです。今は中学と高校の授業を担当しているんですが、毎時間アイスブレイクをやっていて、それにウキウキしている自分がいます。これは 20 年前、30 年前の自分と比べるとまったく違うことだなと思います。こういうのって「不易と流行」で言ったら「流行」に当たっていると思っていて、では教師の不易、教師の役割、教師の資質、教師のたまたまいとしての不易とは何かと考えると、先ほどの話で「自分が世界でただ一人の自分であることを探し求める旅をしていること」が学びだとすれば、教師はそれを見届ける証人だったり、さらに背中を押してくれる同志であることなのかなと思います。

そこでセッション 1 で話したように、「教師はどういう人であればいいのか？」と考えたときに、まずは知に飢えている。知識に欠乏しているけれど、それを知っていて、そこを何とか埋めよう

としている。そういう姿勢が子どもたちの目にはきり見えている。そういう人だと思っています。

それからもうひとつは、「学ぶこと」や「教えること」が楽しくてしょうがない人。まずは自分が楽しいんだけど、それを子どもたちや他の人と共有したいなぁという思いを持っている。

そういう教師の姿を見ることによって、先生が憧れる知というものに生徒が憧れる。そういう構図が生まれてくると思います。

鼎 談

教育の不易と流行とは？そして教師の役割は変わったのか？

（参加者）

鈴木先生／下町先生／和田先生／ファシリテーター 林 巧樹（主催者代表 産業能率大学）



（▲左より ファシリテーター林 巧樹、鈴木先生、下町先生、和田先生）

—林 さてこれからいよいよ鼎談に入っていきたいと思います。よろしくお願いします。お話を聞いていて思ったんですが、皆さんとはおつきあいも十数年あるんですが、そもそも先生たちはどうして先生になりたかったんですか？ またはなろうと思われたんですか？ 積極的に先生になろうと思った方と、しょうがなくのパターンがあると思うんですが、和田先生はどうですか？

—和田 それが私は消極的だったんです。小さいころからなんとなく将来なるなら先生かな、と思ってはいたんですが、大学時代にどう思っていたかと言うと、いわゆる就活はゼロなんです。大学を卒業するとそのころは「家事・手伝い」という選択肢があったんです（笑）。それでしばらくは家事手伝いをして、結婚をして、専業主婦になろうと思っていました。皆さん信じられないと思うでしょうけど。でも父が「東京の大学に4年間行かせたんだから福岡の教員の採用試験だけは受ける」と。それで2週間ガーっと採用試験の勉強をした記憶があります。そしたら通ってしまったんです、通知が8月30日ぐらいに来て、「ああ、これで働かなくちゃいけないようになったなあ」と。以来今日に続いています。教師になってみたら、はまってしまう性分なのでそれではまっているんじゃないかと思います。

—林 どうしてはまったのかはまた後でお聞きます。下町先生はどうですか？

—下町 積極派ではないと思いますが、少年時代から数学と、あとはコンピュータのつくる世界に関心がありました。SF も大好きで、タイムマシーンとか好きでした。それで数学とコンピュータが両方できるような仕事に就きたいと思っていて、それが可能な大学にいったんですよ。ところが数学を極めるには私はあまりにも落ちこぼれてしまって、これはあかと（笑）。だけど私は教えるのが好きだったんですね。それで教師になろうとした。教師になって何年かして、職場の PC の OS が MS-DOS から Windows に変わったときはすごく大変で、情報処理科の責任者でしたが、機器管理やソフトやシステム開発だけでなく「プリンターの紙が無くなったよ」「エクセルのやり方教えて」などとあちこちから何から何までもう。そのとき思ったのが、これって「数学とコンピュータが両方できる仕事」というかつての夢がかなっている状態なのか、だとすれば悪い夢だったなって思いました（笑）。そんな感じ。

—林 下町先生はもともと教えることが好きそうな感じですね。 数学の授業を見ているとそう思うんですよ。

—下町 そうですね、好きですね。自分のキャラクターに自信がないので、モノを使ったり技を編み出してそれに頼ったりしてるんですよ（笑）。ニコッと笑っているだけでキャーキャー言われる先生もいるわけですが、私はそうではないので（笑）、苦勞するんです。いろいろと乗り越えてきました。

—林 鈴木先生はどうか？

—鈴木 これは結構いろんなところで言ってますが、ある意味、積極的といえば積極的なんです、先生になりたいというより高校野球の監督になりたかったんです、ずっと。高校野球の監督になろうとしたら教員にならないといけないので、そういう意味では積極的かもわかりませんが、最初から教員なりたかったわけじゃないんです。大学であと 2 単位とったら少なくとも中学の英語の教員になれるというところまでいったんですが、それが無理だと思って国語に変えた。でも 10 年間ぐらい高校野球に携わってみて、自分は監督としての才能はないと思うようになったので、これからは進路であると。ちょうどそのころ切り替わる時期でもあったんです。それで、まあはまっていますね。

—林 部活動をやりたくて先生になったという方って結構多いですね。和田先生や下町先生のパターンと自分が似ていると思う方はリアクションボタンの「いいね」「拍手」ボタンを押してもらっていいですか。どのくらいいらっしゃるんでしょうね。逆にやりたくてなったという方は。はい、わかりました。ありがとうございます。先ほど教師に憧れるという話がありましたが、以前安彦先生から「出藍の誉」ということをフォーラムでお話いただいています、そのあたりも含めて和田先生、下町先生からご感想をお願いします。鈴木先生のキャリア教育のお話にもありました。

—和田 私は鈴木先生のお話の中で「全ての教員が 4 つのスキルを全て持つ必要はない」というところで、授業が得意とか、カウンセリングが得意とか、パッと直ぐ思ったのは管理職の悪い癖か

もしれないんですが、「え、時間割がそれで回るか（笑）」ってすぐに思ってしまいました。だから、例えば自分はカウンセラーとしての役割が得意だからそれに特化させてほしいとなったときに、「じゃあその人の授業の代わりは誰がするんだ」と。すみません、そんなことを思ってしまいました。だけど確かに私たちって昭和型の全人教育で、全てのマルチなタスクをやっているのが今の学校の先生だな、って。それがいわゆるブラックって言われることにつながっているのかなと、そういうことを思いました。

—林 下町先生はいかがですか。

—下町 キャリア教育やっていて、「誰も置き去りにしない」というこの言葉が心にぐっときたんですが、これは鈴木先生の言葉ですか？

—鈴木 いや、もともと私は「一人ひとりを大切にする」と表現していました。でもこれいいなといただきました。

—下町 リンダ・グラットンの「Life Shift」に「100年ライフ」って言葉が出てきますね。人生80年時代は、学びのステージ、働きのステージ、引退して余生を過ごすステージの3つのステージに分けられていたんだけど、それが100年ライフになると、それぞれを単純に引き延ばすってわけにはいなくなるということです。働き方がどんどん変わっていったって、複数の仕事をする人も出てくるし、リタイアした後にはあらたな学びに進んだり、また人によっては中学生でも起業する。そうなるとうままでのような横並びで世代の中で競争していくようなキャリアステージではなくなっていくます。それって必然的に「だれも置き去りにされない」ことになるのかな？って思いました。競争することがないから・・・。

あと、個別の学びというのはまさにパーソナライズ、つまりそれぞれの人たちのそれぞれの目標が達成されることだとすれば、そこには序列化は生まれません。置き去りにされないなど。「個別最適な学び」というのは、私の中ではややネガティブな思いもあるんですが、鈴木先生が言われたことは「だれも置き去りにされない学び」なのかもしれないと思いました。

—林 今回「個別最適な学び」は敢えて入れなかったんですが、皆さんのお話の中で結局ICTからの流れの中で「個別最適」は絶対に出てくる。そもそも「個別最適」ってそれは本当に皆にとっていいものか、と置いていたんですが、「置き去りにしない」というと誰もがなるほどと腑に落ちていく。考えることは大切なことだと思いました。さて、鈴木先生は和田先生、下町先生のお話にさらに加えることはありますか？

—鈴木 お二人が素晴らしいと思ったのは、私が思っていることを補充していただいたというか、その通りなんですよ。例えば和田先生が「それでカリキュラムが組めるんか」ということで言うならば、「20%が」というところはやはりパーセント的にはそれでは無理だよなという所はあるんです。だから安彦先生の中ではひょっとしたら全員がそうだということなら、20%ということでは

しょうけど、学校全体として考えるならやはり半分ぐらいはいつてもらわんと。50%ぐらいは授業ができて、あとひとつ、というぐらいの感覚かもしれません。

それから、「個別最適化」が「誰も置き去りにしない」につながるということならば、本当にそうだなと思いました。それであれば、自分はやはり「個別最適化」の学びに行くべきということ、を、改めて感じさせてもらいました。ありがとうございます。

一林 セッション1の下町先生のお話のときに、考えたのは、まさに Well-being というか、「個別最適」に行けば行くほど、利己主義的にならないのか、ということと、もう一つは、そこでの教師の役割とは何なの、というものです。

皆が iPad で学習して自分に合った教材が送られてきて勉強するんだったら、教科面だけで考えた場合ですが、先生って要らないんじゃないですか？ そういう塾もあります。全員東進ハイスクールで勉強したらいいってことになりかねない。教科だけの話ですよ。でもだから教科じゃないところに教員の役割があるんだというそういう話になると、それはまたそれで違うんじゃないかと思う。そこはどう思いますか。

一下町 アタマプラスという AI 教材をご存知ですか。私が前にいた学校ではアタマプラスを入れているんです。基本的に「個別最適な学び」が学びのパーソナライズだとすると、それはいわゆるフィードバック系を持つ学びなんです。学んだ結果があって、そこに対して「これはいかがですか」「あなたはここが欠乏していますね」「もっとここをやったらいかがですか」というフィードバックサイクルの中でだんだんと自分が大きくなっていくという。だけど私は、そこには大学受験で合格を勝ち取るためのスキルを磨くというようなモチベーションやコンセンサスがある中で成立している「個別最適」のような気が一方です。さっき話した盛岡三高の話の中で、講演を聞いた生徒がそれぞれ違う感想を持ったというのこそが本当の個別最適の学びではないかと私は思うんですね。

私の教え子の話ですが、フラメンコギターの発表会があって、そこで失敗したというんです。彼女が言ったのは「失敗してしまった、やっぱり基礎が大事、基礎だ」と。そしたらある先生が「ほらね、そういう発表の前には基礎をちゃんとやってなきゃだめだよ」というような言い方をしたんです。でも、私は違うと思う。発表する・発信するという活動があることによって、逆に基礎が大事だと気づくんですよ。プレゼンテーションをすると何かを発信するというのは、その結果をうんぬんするのも大事だけど、それだけじゃなくて、前後でどういう行動・決断をするのが大事なんですよ。「個別最適な学び」の話に戻るんですが、それは、AI などによるフィードバックサイクルをもつような単純なものではなくて、発信などの外化の活動という「協働的な学び」があるからこそ生まれるものだと思うんです。つまり「個別最適な学び」とは単純に自己拡大する完結したループを提供することじゃなくて、そこに行くためにはつねに「協働的な学び」というのが存在していて、そこから自分の欠乏なり、「基礎が大事だな」とわかって個別の学びに向かうという。そういう感じなんだと思います。

一和田 「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な推進というところまでがセットだと思うんですよ。だから「個別最適な学び」だけが膨らんで行くんじゃないくて、それと同じぐらい

の「協働的な学び」があって、それでひとつ、というか。個人だけで学んでそれで幸せかという
と、やはり私は自分が学んだことを誰かに伝えたくなったり、誰かと一緒に何かを解決する、そ
ういう方向に行くんじゃないかなと。だから「個別最適な学び」と「協働的な学び」はセットだ
と思います。

—林— それぞれの教科とか探究とか、学級マネジメントなど役割とかスキルなど大きく変わったと思
います。これが今の先生方を苦しめているというか、要するにいろいろと立ち位置をかえなきゃなら
ない。「個別最適な学び」と「協働的な学び」ってまさにそうで、指導なのかコーディネートなのか、
先程からのお話しでは教師ってカウンセラーですね。カウンセリング的なことをするスキルも必要に
なる、だからコーチングやカウンセリング、その場面でいろんなものを使わなきゃならない。

—和田— 一人で何役もしなくちゃならないってことかな。

—下町— 昔から「教師は五者であれ」って言ったものですよ。学者、役者、芸者、医者、易者。今
はファシリテーター、ネゴシエーター、キュレーター、なんていう人もいます。だけどさっきの
チャットにもありましたが、クレーム対応とか本当に大変なんです。教頭とか副校長の段階だと
だいたい 90 分コースですよ、こちらが地雷を踏むととんでもないことになる。そういうことが、あ
まり地域などに知られていない部分があるのかもしれないです。

—林— 外部の人間として思うのは、大切な教師の役割が、周辺のことは役割じゃないとは言いません
が、本質的にそれこそみなさんが教師としてやりたかったことができない状況になっている。周辺の
ことに時間を取られている。セクション 1 で聞いていて思ったんですが、いつも自分の立ち位置を見
つめ続けるというか、見つめる機会を持つとか、そのことが今は大切なんじゃないかと思うんです。
どうですか。

—鈴木— まさにその通りですね。

—林— 公立の先生と、私立の先生で感触の違いがあるのかな、と。両方経験されている下町先生どう
ですか。

—下町— うーん。やはりいろいろじゃないかと思います。私立といっても文房具から全部買わな
いとならないような私立もあるし、進学に特化したようなところもあるし。私自身は公立から私
立に行ったときに、公立の学校が持っている不自由さ、融通の利かなさというものから解放され
ているのかなと思ったんですが、そこは必ずしもそうではないようでした。いいところもね、も
ちろんいっぱいありますよ。

—林— 先生方にもチャットを見ていただいて、ご意見があれば。「生徒を信じるところ」というとこで
共感されていたように思うんですけど。逆に裏切られることも多いですね。そういうのはどうやっ
て乗り越えたんですか？

一和田 生徒を信じて、待たなきゃいけないって思いますね。それからときどき質問で解決する。進捗状況がどうなっているのか、どこで躓いているのか、とか。そのアシストが大事じゃないかって思います。

一林 和田先生へチャットからの質問ですね

（チャット画面）2年前青森で和田先生から、生徒を信じて教えることを手放しなさいとうかがいました。インテイクスイッチ理論をさっそく実行して2年経ちました。実際、なかなかうまくできない部分が多く、反省の日々です。

一和田 インテイクスイッチ理論で生徒をアウトプットさせるために、生徒に考えて発表させたり意見をまとめさせたりするところの「問いの立て方」が、これがいつになっても難しいと私自身は思っています。その日の授業の中で、講義の中で、「ここがメインクエスションである、これを生徒たちにゲットさせたいから、生徒たち自身に考えてもらおう」と。そうするとサラッとやるところと、本日の山場を持ってきてアウトプットを想定して流れを立てるやり方、そこをずっと工夫し続ける。もちろん失敗することもありますよ。

一林 ありがとうございます。皆さんが先生になられた30~40年前、その頃に「あの先生いいなあ」と感じた先生と、今の若い先生も含めて、「あの先生いいなあ」というのは変わったでしょうか？

一下町 私の妻も実は教員なんです、それで2人で自分が影響を受けた教師10人というリストをつくったことがあります。先輩の先生であろうが後輩の先生であろうが関係なくです。リストにある先輩はいまだに「巨星」って感じで心に残っています。でも私が歳を取ってくると年上はいなくなってくるし、若い先生をリスペクトするというのも多くなっています。

少し話はズレますが、今の私は週に3日しか学校に行っていないです、11時間しか授業を持っていないんです。若い先生はもっともっとめっちゃくちゃ持っています。だからすごく忙しいです。なのに私ともうひとりの75歳の数学の先生は2人で向かい合って数学の話ばかりして楽しんでいるんです。彼らに悪いなあって思いながら。でも一方で前期高齢者になる私がそんなにたくさんの授業をやるとかえって迷惑になるということもあるんですよ。だから私がちょっとだけでもやるという働き方をするのは、若い先生方の負担を少しだけ軽減できるのかもしれないとも思います。「クレーム電話が来た」「よし受けよう」って。そういう分担の仕方をして、お金だってそんなに必要じゃなくなるじゃないですか。そういうふうに、若い先生の仕事を少しずつ分担する。そうじゃなくて再任用みたいに従前と同じような仕事量をこなして給料が半分になるといったら、それはモチベーションは下がるし生産性も上がらない。それよりはこういった少しずつの分担の方がいいのでは、と思うこの頃です。

一林 和田先生、どうですか。

一和田 私には憧れる先生像はなかったですね。ただ高校生のときに「この先生は授業が上手いな」って思う先生はいらして、私はずっとその先生の喋りをマネしてる、というのはありますね。それから今、下町先生が言われた若い先生へのリスペクトは私もすごく感じています。例えば何年か前のフォーラムで話したんですが、私が校長をやっていたときに当時の30代の先生がものすごくバリバリやっていて、まぶしかった。自分はそれを支援する側になった。「思いっきりやりなさい、責任は私がとるから」という側に今の自分はいるんだと。私が30代の頃に見ていた校長先生がいますが、今は自分がその校長先生の立場にいる。そうなって「あのときの校長先生はこんなことを考えていたんだ」ということがわかりました。それぞれの年齢で、それぞれの立場で見えてくる世界は違うんだと思っています。

一下町 産能大のフォーラムの存在って結構大きいです。若い先生で特にとんがった先生たちがいて、フォーラムを介して全国区デビューしていった。時代がまわりまわって、それが今の学校の益になっている。

（チャット画面）「教師の「must」が多すぎて重いと思うこの頃です。教材研究や勉強会、研修会への参加は楽しくて仕方がないのに、「強制される学び」（例えばなくなりましたが免許更新など）のストレスが苦しいと思っている先生が多い、真面目な先生ほど」

一林 要するに真面目な人ほど大変な思いをしてしまう、ということですね。どうしても管理職の方は、一所懸命な人や前向きな人に意識が向いていて、あまりやる気がない先生はラクしてる。民間企業でもできる人のところに仕事はどんどんいって、そうじゃない人はヒマしてる。でもそこに賃金格差ってあまりなくて、教員の賃金格差はもっとないですね。そういうのに先生たちは晒されているというか。

一和田 思うのは「must」を手放す勇気。これが今、めっちゃ必要なんじゃないかと思うんですよ。コロナ禍になって、かつて当たり前にやっていたことが当たり前にやれなくなって、「あ、それはしなくても何とか回っていくんだ」ということがあって、「それは本当に絶対に必要なのか」ということ。皆が日課表を毎日書くので、職員朝礼を無くしてみようという空気になってきたり、そこら辺でICT活用をして働き方改革をするのも、ありだなと思います。だからコロナ禍も「must」を見直すいいきっかけでした。

一鈴木 林さんの問いに関して言うと、自分がさぼっていると思っている教員はいなくて、誰に聞いても「俺はえらい」って言いますね。でも「えらいんかな」って思いますね。だから管理職側が客観的に見てあげることは大事で、やはりねぎらいの言葉をかけることも大事だと思います。

一林 この「えらい」というのは東海地区の言葉で、意味は「偉い」ではなく、「大変だ」「しんどい」になりますね。

一鈴木 「めちゃくちゃやっている」という意味ですね。

—林 千葉栄美先生、もしよろしかったらカメラオンでご質問などどうぞ。

—千葉 私は学校が担い過ぎているように思っています。例えば主体性についてですが、生徒と親との3者面談をするとすぐにわかることですが、私が生徒に言った質問を、生徒本人よりも保護者が先に答えてしまったりする。そのときにはこの生徒は主体性を持てるわけがないなということを感じます。本当の主体性って家庭や地域社会で育ててくるべきだったのに、それを全部学校教育の中でやれと言われてしています。それを全部真面目な教師が受け取って、必死になっているという状況なので、もっと勇気を持って家庭や地域に返せるものは返した方がいいと思います。

でも同時に、鈴木先生がおっしゃったようにそこには地域性があって、例えばそれを地域・家庭に返そうとすると、家庭そのものが機能していない場合もあります。だから地方ではそれらを全部学校が担って、一律の機会を与えてやらなければならないというジレンマもあります。その中で教師たちが今本当に必死でやっているんだと思います。でもこれ以上は制度疲労が起きると思うので、考え方・やり方の変化が求められている時代は、今ほどないんじゃないかと思いました。

—林 千葉先生、いきなりでしたがありがとうございました。これからの保護者の在り方。教師は保護者とどうかかわるのがいいのか。結構前から言われているんですが、確かにいまだに変わらないのかな。3者面談ってそこで何を話されているのか。進学の話がほとんどだと思いますが、千葉先生の話聞いて思うのは、何か、保護者にもここまでやってくれというような何かがないと、教育も変化しようがないのかとも思います。そのあたりどうでしょう。

—下町 これは大きな問題ですね。以前いた学校は東大や医学部を目指すという経営ポリシーを持っていることもあって、塾の先生が言うことにウエイトを傾ける親も多かった。また、朝に子どもが自分で起きたら30円とか、期末考査で何番だったらiPad買って与えとか、そんなふうにモチベーションを高めようとする保護者もいた。そんな中、親もストレスがたまるだろうということで、そのころPTAの20人ぐらいの有志の方を集めて率直な意見や本音をいつまでも聞く、という「ガス抜き会」というのをやったりしていました。

—和田 親御さんは「学校に任せとったら大丈夫」と思ってらっしゃる。または学校に期待している。それで、「それは家庭の役割ですよ」と言いたいけど言えない。そういうところでPTAの役員の方たちとガス抜き（笑）。逆に、ある意味では日本の学校って保護者からすごく信頼されているんじゃないかなと思います。

—林 昔はそこまで保護者との関係にストレスを感じることはありましたか？

—鈴木 私もお2人のように保護者との関係はわりと密にっていて、今の学校では保護者を味方にするのを抜きにしては語れないですね。

一林 その意味では両者の本質的役割は変わっていないということですが、立ち回らなきゃいけない場面が多くなり過ぎてしまった。

一下町 保護者でも別の考え方、180度違う方もいますね。例えば進学指導だけに力を入れて結果を出してほしいという保護者と、そうじゃなくてちゃんと心の教育をしてほしいという保護者と。それって本当は二律背反ではなくて、むしろ一体のはずなんですけど、なかなかつながってこない。ではそんな対立があったときにどうするかというと、その先を考え、「なぜ」を掘り下げ抽象度をあげていくんです。すると結局は子どもを幸せにしたいというコンセンサスにたどり着く。だから、「その先」にあるのは Well-being のようなものではないかと思います。

アメリカのTV番組「What would you do?」にこんな話がありました。ある学校の先生がスーパーで生徒の鉛筆や文具を自分のお金で買いそろえたらお金が足りなくなってしまうという状況を仕掛け、それで周りはどう反応するかモニタリングするという内容です。すると、お金が足りなくなっている先生に、その様子を見た周りの人皆たちが「私が出します」って言ってどんどん支援していくんです。コミュニティ全体が先生の大変さを知っていて、何とかしようと思っている。そもそも、そういう番組がつけられること自体すごいと思いました。なんでこういう行動を起こせるのかなって思ったときに、宗教が根底にあるのかもしれないと思いました。だとしたら、日本においては、それに代わるものとして必要なのが Well-being 教育だと私は思っています。

一林 私は大学受験という中で保護者の方と接しているんですが、親は皆、子どもに幸せになってほしいと願っている。子どもは早稲田大学に行くことで幸せになれると信じている方もいれば、そうではなくて自分の子どもは「自分を知ること」で幸せになれると思う方もいる。両者は違う思考だけど共通の思いは子どもに幸せになってほしいということかなと思います。先ほど学校の先生のタイプにもいろんな方がいるという話がありましたが、下町先生タイプもいれば、和田先生タイプもいる。保護者も同じなのかなと。

さて、時間も少なくなってきたので、なんとなく締めなければならぬですね。このままだと締めがなくなっちゃうので、鈴木先生から順に、テーマの「不易と流行」でもいいし「教師の役割は変わったのか」でもどちらでもいいので、それぞれご自身でまとめてください。

一鈴木 聞かせていただくばかりで、今日は本当に勉強になったなあというところですが、「不易流行」で話すと、当然不易の部分はあります。でもこんだけ時代の要請も変わってきているので、当然そこについては応えるように教師は変らねばならない。そのベースは「個別最適な学び」で、今日はその思いを強化してもらったのが下町先生の Well-being の考え方を加えることによって、いっそう「個別最適な学び」に向かう決意、決断ができました。ありがとうございました。

一下町 『学ぶことは深く個人的なことであると同時に、本質的には社会的なものだ。学びは抽象的な知識だけで人と人をつなぐ』。これはピータ・センゲの言葉ですが、この言葉をあらためて、自分の腹に落としたと思いました。

一和田 教師も生徒も学び続けることは大事なんだなと。だから学ぶことは生きることなんだな、と思います。

一林 皆さんありがとうございました。正直申しあげまして、このオンライン企画はセッション1の裏番組のような感じでやったら面白いかなと思っていたんですが、皆さんも私もスタートが堅苦しくて、だんだんとほぐれてきましたね。ただそれが皆さんにとっていい話だったかどうかはわかりませんが、普段あまり3人から聞けないような話が聞けたらこの企画は成功だったと思います。皆さんはお楽しみいただけでしょうか。堅苦しくない鼎談というスタイルを目指しましたが、だんだんとそういう雰囲気になっていったかと思います。

また来年は教科をテーマに考えていきたいと思っていますが、皆さまとお会いできると大変うれしいです。こういう状況で直接お会いする機会はつくりにくいのですが、われわれは可能なかぎり対面も含めて実施していきたいと思っています。またどこかでお会いできるとうれしいです。本日はセッション3にご参加いただき、ありがとうございました。ではこれにて終了させていただきます。みなさんカメラに向かって拍手をどうぞ。ありがとうございました。

(終わり)

第 15 回キャリア教育推進フォーラム 報告書

教育改革推進フォーラム（長崎開催）

「探究は生徒の学びを変えられるのか？」

発行日 2022 年 11 月

発 行 産業能率大学 入試企画部 企画課

〒158-8630 東京都世田谷区等々力 6-39-15

TEL03-3704-0731 FAX03-3704-9766

<https://www.sanno.ac.jp>

（禁無断転載・転用・複写）
